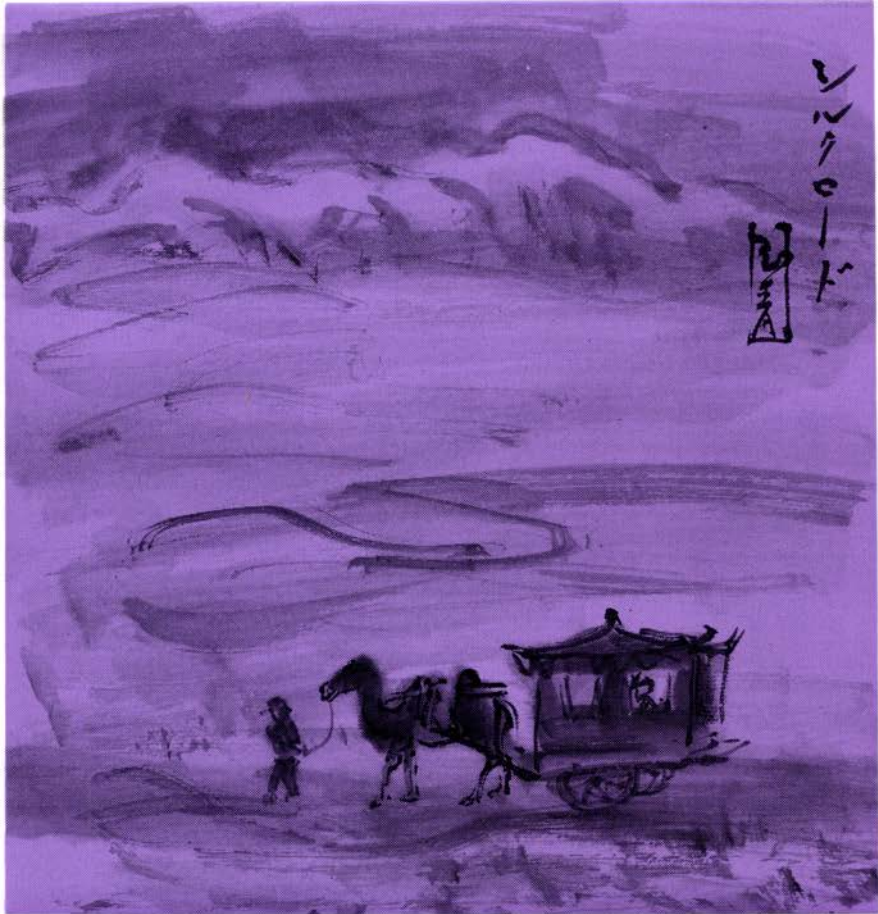


塔柳川

昭和四十一年八月二十五日 印刷
昭和六十三年九月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷七三六号



日川協加盟

No.736

九月号

63年度 同人総会と

二賞表彰 本社10月旬会

日時 昭和63年10月2日(日) 午後1時開場
会場 大阪市立労働会館

JR環状線又は地下鉄中央線「森ノ宮」下車す
ぐ(日生球場東側)

電話〇六(九四二)六三三二(代表)

▽同人総会 午後2時から

〔議事〕①会計報告②高杉鬼遊③事業経過報告④
辻白溪子⑤役員改選⑥質疑応答

▽二賞表彰旬会 午後5時半から

会場略図



兼題 「幸い」「走る」
「眼鏡」「話」
各題3句 締切6時30分

川柳塔社

藤島茶六先生 米寿記念建碑 の趣意書

日本川柳協会理事長藤島茶六先生が本年は米寿を迎えられますので、先生の米寿を記念し、千葉市亥鼻山に句碑を建立して先生の功績を永く後世に顕彰し、併せて川柳普及の一助と致したいものと思ひ計画致しておりますところ、幸い市当局のご理解を得て、この程句碑建立の運びとなりました。

つきましては句碑建立基金を左記要項により広く全国柳友各位より募金致したいと思ひますので、ここに実行委員並びに発起人連名の上お願い申し上げます。

記

一口 二千元(何口にても可)

振替 東京 〇―八三二七七(西村在我)

締切 昭和63年9月末日迄

除幕式予定 昭和63年10月30日(第五日曜日)

実行委員長 山田良行

発起人(本社関係のみ)

西尾 栞 橘高 薫風 黒川 紫香
野村太茂津 西田柳宏子 小林由多香

詩の島

西尾 葉

佐渡ヶ島へ行つて来た。東海道新幹線と上越新幹線を乗り継いで新潟へ出た。新潟港より両津まで、ジェットフォイルという快速船で一時間にして佐渡へ渡った。普通二時間半の行程である。佐渡は新潟県下にあつて、佐渡支庁が行政している。私が曾て勤めていた阪大医学部の経理課長の丸島氏が約五十年前に支庁長として赴任していたことを思い出した。丸島氏は柳号を利生と言つて私を川柳に誘いこんでくれた人である。根っからのお役人で、親分の上司が新潟県知事になられた時、支庁長を拝命されたのである。詩の島へ働きにゆく朗かさ 利生
坑道で見直してみる金鎖 〃
四十九里浴衣の袖も涼しかろ 路生
等の句を作っていたが、一年余りで知事が変わると支庁長もやめねばならなくなつた。(今のよ)に選挙で知事が決まるのではなく、内閣が変わると知事が変わるという時代であつた)

一介の吏喜こびの首を垂れ 利生

と一句ものして、再び大学へ帰つてきて元の職に就かれた。

耻しい中に嬉しい元の鞘 利生

という句を示されて、尖閣湾の素晴らしい景色、金山の坑道の話、村田文造のおけさぶし、等色々ときかしてくれられた。その時は一度佐渡へ行きたいと思つて、五十年後の今日まで行く機会がなかつた。

両津は島でただ一つの市であつて、支庁のあるのは相川町であつた。

船下りて佐渡の祭ののほり旗
船下りて島の言葉をきき返す

丁度島は夏祭の最中であつた、最初の宿は両津の花月旅館にとつた。

レットルマツチの柄も島踊

宿のマツチにはおけさ踊の絵が画いてあつた。翌日はタクシー二台で島巡りをした。根本寺、妙宣寺、朱鷺の郷博物館、順徳上皇の真野の御陵、尖閣湾を船で一周して金山の跡を見学した。実物大の人が槌を振り水を汲み上げている景景は正に眼を瞠る許りであり、リモコン操作で突然人形がこちらむく目の鋭さに女子の驚きの声が坑道にひびいた。この槌を振る人を金掘大工と言ひ、家を建てる大工をテイクと言ひ説明をきいた。大佐

渡スカイラインの山波を越えて二日目の宿は八幡ホテルであつた。

雲の峰追つて大佐渡越えにけり
今日の宿クルメ女のやかましき

翌日、両津を出て再び新潟湾へ渡つた。新幹線で燕三条を経て岩室温泉の高島屋に投宿、夜の膳に幻の酒「越しの寒梅」を注文したが、二人で五合しか出さず、あとは「雪中梅」にしてくれと謝られた。

弥彦山より麓を見れば
あれは岩室湯の煙

甚句ききたや顔見たや
ヤンレヤレヤレ湯の煙

一度来てみて二度三度
という甚句で夜が更けた。温泉は霊雁

泉として檜の木風呂であつた。

しみじみと眼閉じけり出湯枕

湯巡りの余生の旅の朝ほらけ

宿は昔、庄屋であつたというたはず
いで、竹林の広々とした庭があつた、フ
ロントには自在鉤のかかつた囲炉裏があつた。

自在鉤昔庄屋の旅籠かな
旅愁とや自在の囲炉裏囲みけり

翌朝、有名な弥彦神社にお詣りして燕三条から、もと来た鉄路を大阪へと帰つた。
JRの駅長若し旅終る

座右の句

秋風に傷なきものはなかりけり

(薰風)

私の句

鳴き交わす虫に泣く声もあり

森川 まさお

川柳塔 九月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

詩の島

西尾 栞 …… (1)

阿倍仲麻呂

橘高薰風 …… (2)

川柳塔(同人吟)

西尾 栞選 …… (4)

自選集

東野 大八 …… (36)

■川柳太平記(124) 川柳の群像 増井不二也

阿達 義雄 …… (40)

■連載 誹風柳多留廿六篇研究(三十七丁)

黒川 紫香選 …… (42)

江戸川柳富籤志(4)

波多野 五楽庵 …… (35)

水煙抄

西出 楓 楽 …… (61)

秀句鑑賞 [同人吟]

水煙抄 …… (62)

63年度二賞候補作品中間発表表

橘高薰風選 …… (65)

愛染帖

橘高薰風選 …… (65)

阿倍仲麻呂

橘高 薰風

阿倍仲麻呂は文武天皇二年、阿倍中務大輔船守の子として生まれた。十九歳(一説には十六歳)の養老元年第二回の遣唐使の一行の中に学生として加わる。一行には吉備真備や学問僧玄昉らがあった。長安に至り朝衡と名乗って玄宗皇帝に仕えた。勝宝年間、鑑真和尚に会い米日を招請、自らも帰国の途につくが海上で遭難、安南に至り、後再び唐に帰る。左散騎常侍、鎮南都護として唐朝三代に仕えた。李白・王維ら文人との交際深く名を成す。没後、潞州大都督を追贈される。わが国でも正二位を贈りその功を賞した。以上が人名事典にある仲麻呂の項の概略である。

東野大八氏執筆の「花は舞う大唐の春」(川柳塔七月号)に、朝衡の船難破すと聞き、李白が悼んだ「朝衡を哭す」と題する詩が掲げられている。

仲麻呂はこれより先に、玄宗に帰国を願いつたが許されなかった。その時詠んだ詩は、慕義孝不全 義を慕って名は空しく在り 愉忠孝不日 忠を愉いだせば孝からず 報恩無有日 報恩日としてあることなく 帰国定何年 帰国定めて何れの年ぞ

この詩の意味は「帝を慕って位階は上ったものの、名声など空しいものだ。忠を尽くせば、年老いた両親への孝養はおろそかになる。

〈女性コーナー〉 茴香の花……………	八木千代選……………	(68)
老いてますます冴えるユーモア……………	土居耕花・高橋千万子……………	(70)
言いまわしの個性 (五) 先輩作品の分析 (続)……………	竹内紫鑄……………	(74)
消える渡辺町……………	布施幸子……………	(80)
■句集鑑賞 鶴丸句画集「自然点火」……………	恒松叮紅……………	(81)
玄宗皇帝と楊貴妃と李白と……………	渡辺圭坊……………	(82)
初歩教室……………	阿萬萬的……………	(84)
「力」……………	渡辺善句選……………	(86)
一路集「隙」……………	仲どんたく選……………	(86)
「記憶」……………	曾我部 裕選……………	(87)
柳界展望……………	……………	(88)
本社八月句会……………	……………	(90)
各地柳壇 (佳句地10選 / 吉川寿美)……………	……………	(94)
■9月各地句会案内……………	109	
■編集後記……………	111	

座右の句

いま嘘を書けばきのうも嘘になる

(千代)

私の句

合掌をほどかないよう生きていく

白根 ふみ

親の恩に報いるの日など一日とて無かった。はて、日本へ帰れるのは何時のことやら」百人一首に有名な和歌、

天の原ふりさけ見れば春日なる

三笠の山に出でし月かも

これは長安を出発した仲麻呂らが、当時、楊州の大明寺の住職だった鑑真和尚と合流して、蘇州から船に乗った時、船の前を一雄がよぎったので不吉として出航を数日見合わせ、折りに作ったものと言われている。この和歌を漢詩に訳して見せると、「同感歎久しくしたと言った」。

仲麻呂は清廉な性格だったので、彼が死んだ時、葬式さえ出すことが出来ず、時の皇帝代宗は、家族に色々な物品を贈っている。当時、地方長官を二、三年も勤めれば、一生食える貯えが出来た。それというのも公然と税の上前をはねるのが認められていたのである。

日本での大名の地位に居ながら貧しかった仲麻呂は、留学生らの面倒見が良かったのであろうか。後世その評価はまちまちで、藤田東湖は、「この日の本を忘れ……かたちこそをのこならぬ、心はをうなにもはるかに劣れるぞいまわしき」と貶しているが、蒲生重章は三笠の月の望郷の歌を賞賛して、次のような漢詩を詠んだ。

豈に畜(ただ)東西風馬牛ならんや
水夫萬里恨み悠悠

君を憶いて夜夜掃心切なり

山月依稀たり三笠の秋

私は、長安で阿倍仲麻呂を心ゆくまで偲びたく思っている。

川柳塔

西尾 葉選

松原市 谷 垣 史 好

鯨一尾 貴公子然と売れ残り

平和主義者ばかりではない駅の鳩

海の藻はおどろおどろと亡母の髪

胃下垂の男に惚れたのが因果

騒がしい月になりそうハンブル語

されば六十 口ほどにない枇杷の種

逝く夏をハモニカ吹いて惜しみけり

松原市 佐 藤 藤 子

フライパンいつもホンネで生きている

親切がすぐにかえってくる他人

田高の金魚はふとりつづけてる

長距離の受話器かすかに波の音

東塔と西塔むすぶ飛行雲

古井戸をのぞく僧侶とわたくしと

弘前市 波多野 五楽庵

花粉症ですか女にむせぶ人

妻に似た人が溢れる給料日

腹を貸すだけの名馬を撫でている

嬉しくて寂しい鍵を子に譲る

一杯の酒の悪魔にして天使

新しい靴で葉月の旅に出ん

竹原市 小 島 蘭 幸

子が寝たら妻とラーメンなど食べる

雷が去るまで漫画でも読むか

郷土出身力士を愛す妻の眼よ

ピンポンのラリーが続く人妻と

七月の鰻はおとうさんだけに

神さまは残り時間を教えない

桜井市 岩 本 雀踊子

妻のある男を愛すのも自由

定年という人間の使い捨て
来世も妻でありたいと嘘を言う
猫語をしゃべる妻で猫が好き
ポケットの小ぜにワンカップなら買える
天秤に私と年金計られる

岡山県 土居 耕花

ふる里の厠で返り討ちに遭う
洗濯機に首突っ込んでみたくなる
円高で六文銭に釣りが来る
乱視嬉し妻が奇麗な時がある
伝統をじつと守って蚕の死
くすり漬けやがて線香漬になる

米子市 林 瑞枝

誰もが酔うと音楽好きをほめかす
ビー玉の転がる世間を生きている
向日葵が咲くと広がるレパートリー
民宿に寝てカマキリと見合います
会者定離平均寿命はまだ伸びる
また逢える此処にそば屋のある限り

米子市 寺 沢 みど里

城を背に内緒ばなしは似合わない
他人さまの宝いたたく釣書かく
補助椅子に掛けていねむり許される
定型の踊りくずせぬ水すまし
なだらかな峰にも四季の風当り
火を抱いて終着駅を折り返そ

寝屋川市 平松 かすみ
鬼門など言わぬがします地鎮祭
バンドラの箱にしましようマイホーム
良いことの裏の裏まで母の胸
明日あると信じて鉛を舐めている
自分史の耕目に姑と娘婿
ばあちゃんの服にも入る肩パット

米子市 石垣 花子

耳栓をはずせる時がきつと来る
鬼の手が温いぞ熱が有るのかな
ふるさとの海を男は逃げ出せぬ
語りつづけて海は昔にふれさせぬ
野兎の記憶の中の負けいくさ
息切れをしながら豆の木は伸びる

米子市 田中 亜弥

夏だ夏だと向日葵さんのはしやぎよう
天と地のつながりに住む父母よ
号令を待たず鉄砲打ちたがり
僕は身内の誰にも似ないので悩む
ほら貝を盛んに吹いて夕暮れる
ジョークの通じぬ男で飢えている

下関市 石川 侃流洞

耳だけは確か反骨持ち歩く
雑巾へ決して落ちぬ佐賀錦
無記名という保護色で書く答え
サーブ権妻へ渡して妥協癖

文明に逆らい螢取り戻す
金バッジを正義の味方と思い込み

八尾市 高杉 鬼遊

ひまわりが街の女の胸で咲く
リクルートひとの儲けを数えても
電話より酒さえあればよく喋る
履歴書を持って頭をもう下げぬ
忙しいのち鴉が待っている
骨壺をせともの市で見つけよう

平田市 久家 代仕男

自給率ゼロの日本がきつと来る
爽やかな汗を勞う青田風
どこにでもある倅せを願う妻
適当にどうぞと妻が拗ねて見せ
晩酌に明日では済まぬ用が出来
幾ばくの余命ぞ気儘また許し

兵庫県 遠山 可住

弱いから蟻は集ることにする
反対の旗も青葉の風に乗る
散る花に約束があるひとり言
みな飲まなあかんビールの栓抜かれ
末っ子がきっちり蓄めている小銭
颯爽とピアスの耳で風を切り

名古屋市 越村 枯梢

梅雨末期どつと降らせた憂き晴らし
ゴキブリを殺すな友がひとり減る

枕辺のボトルお前も寝つけぬか
猫には猫の生き方もあり縁の下
千円時計まだまだ弱音吐きませぬ
ひとを恋う何と虚しき祈りかな

和歌山市 西山 幸

今日は泣き黒子を付けている演技
同情が欲しくてナースコールする
ねずみ花火の動きを何故か笑えない
敵のない人を信用できませんか
即答を避けているのも友情だ
副作用そんな答えを返される

西宮市 林 はつ絵

忘れたい昨日を逃げる洗濯機
鬼やんま脱いだ殻へは振り向かぬ
休火山親しみやすい貌になる
吉凶のセツトを神がくだされる
炎天が続き夢売り来なくなる
ひまわりの学級園も夏休み

岡山県 嘉数 兆代賀

眼鏡拭いて今日のいくさがはじまるぞ
十七音字に生きて横文字など知らず
ははの忌や亡母の好んだ花が咲く
正直に言えば貴女に傷がつく
まっすぐに見つめられてる敗けている
お迎えが来るまで待とうそば枕

倉敷市 小野 克枝

炎の泉探し続けて生きている

昨日まで自由な海に居た鱈

一杯のワインで溜飲下げる妻

それからを聞かぬ女のすわりだこ

夕焼けのように明るい別れ道

温そくに夫婦時雨の駅に降り

大阪市 西出楓楽

いいお方ですと本当は頼りない

朝シャンにはじまるヤングたちの今日

安くてもかわいこちゃんのいるバイト

心配ごととひとり相撲をとつてます

帳尻をどこかで合わす戻り梅雨

脳ミソの追加をしたく本を積む

美禰市 安平次弘道

焦点をぼかして逃げ道を探す

ときめきもなく妻と飲むレモンティー

点滴のリズム命の確かさよ

消費者の欲が擬似餌を見抜けない

パントマイム今税務署が来ています

育児日記姑にペースを乱される

岡山市 時末一灯

沈黙の狡さ賢さしたたかさ

引金に指先かけたままの席

ビル街に咲く原色の虚と実と

貫うのもやるのも同じ指がする

涼しさは螢帰ってきた話

藤井寺市 吉岡美房

勝ってたらどうなったやら敗戦忌

駆け引きと取り引きばかり永田町

飴と鞭それが政治というものさ

非常口聞いて不安になって来る

年金の枠で生きてる蟬しぐれ

退院の父天皇と同じ齡

松江市 柳楽鶴丸

下戸だからダンスに酔ってます

家計簿に妻の暮しのかくし味

幸せの方程式は馬鹿と阿呆

一〇一頭のかぶれからばれる

三日坊主今度はスキューバダイビング

下手だとは言わず個性が出ています

八尾市 宮西弥生

金持ちに暇と自由はあげられぬ

ライバルの盃うけてから踊る

少し羽目はすそう命のびただけ

雨の日は雨のせいにするノルマ

梅漬けて長寿国へ参加する

校庭の見える部屋で詩集読む
和歌山市 松原寿子

戸惑いを激しい雨にくずされる

掌の淵で女のさだめ渦を巻く

こんなにも強気にさせる熱い私語

あなた恋うなみだ風にも炎にも
訣れても生きてゆけないことはない
人を恋う極み掟に逆らわず

倉吉市 野中御前

どんぐりの一つに昔の友がいる
薬師様に鱗一枚さし上げる
あぶり絵のなから青い詩がでる
ほんとうに好きになつたら嫌という
掌でうける雨ひとしづく涙色
燃えつきた鬼がおかしなことを言う

岡山県 矢内 寿恵子

保育器へ生きる力の四肢を振る
姉ひとり亡母の代りをまだつとめ
豊かさに東へ西へパスポート
円満な夫婦で火の性水の性
力抜いてください美人の値が下がる
確かなる予約ツバメの居住権

和歌山市 堀端 三男

戦友の三倍生きた夏が来る
運の無い虫で白壁這うている
ミレーの晩鐘祈り聞こえるよなロビー
耳の欠けた地蔵のそばで内緒ごと
人生の答が流れ着くみなと
檜山へあと直線だけとなる

羽曳野市 塩満 敏

血圧をなだめなだめて生きている

前略ごめんせわしい文字のレター来る
男なら高嶺の花に手を伸ばそ
当選へギックリ腰も飛び上り
新住所エレベーターのある団地
悪友にまだ宵の口宵の口

藤井寺市 福元 みのる

聖戦が身につき侵略言い難し
懐手しての領き駄目と知る
田舎風とあるので食べて見たくなり
古書高く古本安し秋が来る
真っ直ぐに帰つたは嘘万歩計
前歯四本抜いてはははと笑いたり

米子市 林 荒介

今逢つた人を握っているこぶし
宥されて峰から降りて来たんだね
笛一管旅の半ばは既に過去
体臭は愛し疎まし永らえる
僕よりも妻は長生きする家系

大阪市 津守 柳 伸

ひらめきは諦めになる五十坂
欲望が失せてひとりの生地獄
突然の便りのちのバズル解き
猜疑心集めて女ひとり旅
一生を賭ける力の大軒

大阪市 江城 修 史

ふり返りふり返り来た古希の坂

一期一会心に残る遠花火

労わりの言葉にあせてゆく意地よ

いとおしむ命渴いた街に住む

まわり道ばかり歩いた父なれど

富田林市 板尾岳人

愛し方愛され方も教えます

愛される技術を知らぬかぐや姫

恐るべき妻で生命保険加入

朝食は離乳食にて健康

目がさめて寝るまで喧嘩しています

伊丹市 樫谷寿馬

痛む日の膝は一入愛しかり

真直ぐに歩ける神と手を繋ぎ

一片の疑いはあり薬飲む

約束を誓う妻の寝息を聴きながら

適量は越えず祝の京料理

奈良市 宮口笛生

私よりずうつと若いお葬式

煙草止めたことを大いに自慢する

冷奴とつてもうまい梅雨があけ

街通り暑さがどつとカンナの朱

二人きりへきゆうり毎日太くなる

倉敷市 野田素身郎

君もそうか俺にも怖い妻が居る

挨拶も明るい梅雨の中休み

梅雨よ明けるな禁酒へビール欲しくなる

傘持っていて雨宿りする豪雨

義理で来て出口に近い席を占め

倉吉市 奥谷弘朗

政治家に本音吐かすに骨が折れ

野の花で終る男のコップ酒

指切りに弱い男ともう見抜き

警官が強盗もする変な国

雨の街人に疲れて人を恋う

米子市 小西雄々

ロボットに勝った自慢をまだ聞かず

リゾートへ賛否両論地平線

死ぬまでに捨てる手紙を持つている

金を見てからの笑顔は信じない

約束を果せぬままに墓洗う

寝屋川市 稲葉冬葉

マクニティードレス男の顔がくずれてる

憧れていた専業主婦は保守的だ

くもの巣にかかる誤解と生きている

感情をむき出しにした日が暮れる

ハンサムな歯科医の指を噛んでやる

今治市 越智一水

野良着とはいいな土踏み風を踏み

信じてる夫婦坂道休まない

トンネルを抜けると高層ビルが建ち

金貯めて親戚中からきらわれる

路郎忌へ路郎の軸を出して座す

鳥取県 川崎秋女

哀しみが染みてしまった桐簾
大正の生れで捨てるものがない

ポックリと死ねたら長生きしても好い

太陽が笑うヒマワリも笑う

ヒマワリの根に埋めておこう夏の恋

神戸市 山口美穂

熱帯夜夢のつづきが見られない

秘めごとがよぎる夾竹桃の紅

背の丸さ老母の苦労を撫で流す

昨日の疲れ今日持つてると知るわたし

目覚し時計に罪はないけど早う鳴り

竹原市 森井菁居

人間に還る非番の移植ごて

ポイントを逃がさぬ母の花ごよみ

鬼の面つけて五十の坂登る

燃えた日のグラフは達成感を持つ

英検に挑む短かい夏休み

倉吉市 渡辺独歩

一陣の風には風鈴靡かない

こだわりを持たぬ男の太い眉

方向に音痴な人の旅自慢

子育てのすむ頃翔べる空を持つ

淋しがり屋に兎町の話など

島根県 小砂白汀

来し方を金魚逆さに振りかえり

羊頭を掲げスーパードンナ泥試合

神々しなどとマドンナ脱がされる

好きなもの何でも食えと脅される

渡りぞめてんでん虫にさせようか

松江市 恒松叮紅

戦友という体臭が風化する

祭り笛今年も里は嫁不足

夾竹桃戦友の笑顔が浮かぶ空

院号が良いが和尚の金釘流

へら台へ母は確かな鯨尺

松原市 玉置重人

グループはヤングレディーの大ジョッキ

老夫婦起きる自由と寝る自由

バカになりアホになるのもいる年季

なたね梅雨二度目の職の定期買う

善人の性が枕を低くする

大阪市 西森花村

なむあみだぶくと他は言わず

悲しみをふつと忘れる時もあり

雷も巡查も恐い母も子も

酒タバコ男は弱い者と知る

夏過ぎて秋には秋に逢える人

京都市 松川杜的

朝の膳母の湯呑が今日も無い

鳳仙花も母の帰りを待っている

母病む(二句)

ギョツ猫が笑うてるコマージュナル
文鎮を次々変えて書が楽し
車椅子少し甘えがおまへんか

尼崎市 春城 年代

晩酌を電話ひとつにさいなまれ
お見舞いにいそいそと行く老夫婦
蚊取り香にやっぱりマツチいるのです
続篇だとて鈍行ばかり望まない
聞いといて欲しいと姑はひぎを詰め

尼崎市 春城 武庫坊

モスクの裏で神の言葉が宙に舞う
裏の裏読んで男は胡座かく
病院の窓の向うにある寺院
裏道を心得ているふところ手
珍しく下駄の音して街晩夏

和歌山市 福本 英子

慕情の曲へ湯上りの爪磨いでいる
献体のことなど芝生刈りながら
どの彩を足しても虹が落着かぬ
煩惱がいっぱい惚けてなどおれず
曲り角幾つも越えてきた無口

島根県 堀江 芳子

忘れてたことを歯ブラシ思い出す
短くて長くて似合う宿浴衣
疼いてる辛さは生きる素晴らしさ
妻の座の錨おろしたままでいい

飲みこんでお腹あたりでとけた悔い

島根県 堀江 正朗

雑談のなかの棘抜く役もあり
泣きごとを捨てて点字の音に満つ
箸に目があればと思うじれつたさ
盃にもてあそばれてもう眠い
手さぐりの僕にも読める人ごころ

大阪市 河井 庸佑

子の日記またも夫婦が採めたらし
会いたくもないのにまたも擦れ違う
先生に悪いが嘘をつき通す
山頂を前に引き返すのも勇氣
初耳のような顔して聞き上手

高槻市 辻 白溪子

酒のうえだけでは済ませぬ事を聞く
それ程は相手に応えてない嫌味
手話仲間一人残って電車出る
ご用聞きに機嫌がよいと見抜かれる
近すぎたのが縁談に差さわり

京都市 都倉 求芽

舟虫にこわいものなし陽は真上
稲妻へ身を乗り出して軒しのぶ
忙しい言訳朝顔の種にまで
花ごよみ違和感もなく住める町
大物になると人の道が邪魔になる

守口市 羽原 静歩

幼稚園ノンちゃんらしい母もいて
不快指数浮気指数とややこしい
絆を脱ぐと話が丸うなり

国宝のことは吐いて枯れ芒
情けとは何ぞ家裁の灯が赤い

堺市 中川 滋 雀

哲学には遠いみどりの散歩道
逆立ちの夢とロマンは見つづける

いい事がありそう雀が窓に来る
逃げた蚊に両手叩いていた力
星くずと旅情にひたる露天風呂

堺市 高橋 千万子

駅員のへま迷い子をよけ泣かせ
泣きやんだ頃に大きくなった瘤

愛は演技私も犬ほど尾を振ろう
あつからかん罪を重ねる夏帽子
アクセサリーすかん男に引っかかり

浜田市 中川 幸一

酒と女に強い男で胃が弱い
カッとして叩いたくせに愛の鞭

顔上げて開き直った眼に怯む
童唄だけは忘れぬ健忘症
ホツとして夕陽が沈む赤い海

倉敷市 稲田 豊作

ああ今朝も日銭稼ぎに雨が降る
欲走る顔擬餌鉤で釣れそうだ

鬱の日も仰げば広い空がある
世故の知恵嫁が時々借りに来る
老い楽や趣味の一日孤におらず

東大阪市 森下 愛 論
狂ってる世の中狂ったままで住み
ひとり居の空気の抜けたマリみたい

孫抱いて欠伸うつして叱られる
来る来ない花びら無残むしられる
つじつまを合わせて吞んで生返事

大阪市 黒田 真 砂
あじさいが雨を待ちつつ陽も恋し
再会を約し別れたかすみ草

一別の話つきないティールーム
話す事もなくて茶店の水中花
あじさいの心変りを責める雨

大阪市 本間 満津子
母の織る手織木綿は母に似る
クレジットカードが誘う試着室

マネキンにどこも似てない試着室
店員のお世辞空しい試着室
胸算用こらで妥協すると決め

大阪市 神夏 磯 典 子
冷やっこ今日ふり返る舌ざわり
力んでも脳細胞がついて来ず

舌切雀思う老人痴呆症
節々に亡母が言うてたことに触れ

大阪市 神夏 磯 典 子

節々に亡母が言うてたことに触れ

節々に亡母が言うてたことに触れ

ハイヒール履けば遠いと思う道

大阪市 北 勝美

職人の腕が笑ろてる宮仕え

街に住みすっかり忘れた月明り

露草をコップに挿して配転地

どっちが先逝ってもみじめな老夫婦

ダリヤより桔梗が好きな朝の露

大阪市 藤田 頂留子

本質は不変現代時代劇

年とともにへりが早まる化粧品

ふとん太鼓かつぐ一人はきつと亡兄

通行証みたいに呉れる反対ピラ

水だまり蚊になる前に殺虫剤

大阪府 坂口 公子

仏さまにウインクされて浮いた腰

あと何年生きると開きもおれず

老夫よ仏の顔で寝るでない

腹立てたままで鏡を見てごらん

井の中の蛙に手古摺っている仏

大阪市 吐田 公一

毒舌の毒を抜いてる赤い爪

クローラーを切って老母の夕涼み

居眠りの議員へ血税支払われ

力一パイ働く父のうまい酒

大阪市 古川 美津枝

アイロンをかけたお札はとびたがり
リクルートノーコメントと言う記憶
茄子の針心の隙をみのがさず

あくびあり勇み足あり信号待ち
彼岸会にあなたの好きな着物です

計算ずくの孫の土産が面白い
大阪府 町田 達子

自分史に懐かしい恋青い恋
まほろばに遠きロマンを絹の道

下り坂で振るサイコロは力まずに
適当に減速もする今節目

和歌山市 若宮 武雄

終着駅をのんびり待てる身一つ
野良犬のあすは無くてもいい昼寝

あんな奴仏になって悲しませ
これ以上目立ってならぬ脇役で
和歌山市 内芝 登志代

原発事故無いと言うから怪しまれ

旱天の雨は祈られ拜まれる
長いことかけた保険がはした金

つまずきへ広い心の有難さ
お互いに充電しつつ金婚式
大物が老母を讃える立志伝
和歌山市 垂井 千寿子

時の流れそれも円満解決法
お隣の芝生が好きな鳳仙花

女いつも女ざかりと思うてる
海の向こうの虹を捜さないように
深い所で損得がある国と国

和歌山市 牛尾 緑 良

紙おむつ過去は何にも光らない
努力って何だろ鼻毛抜きながら
程々がわかる夫婦の月日かな
たくらみは無いのに泡が立つビール
白い手袋は野心を丸くする

和歌山市 神 平 狂 虎

ペンが重たい人の情けを借りてから
我慢した数だけ熱くなるポエム
言い足りぬことばに海が荒れてくる
街灯の点く頃疼く胸の疵
海の話になると貧乏ゆすりする

唐津市 田 口 虹 汀

島々に流人の夢が埋めてある
爽やかな風と出遭った勝訴の日
この儘じやきつと閻魔に笑われる
今少し勉強をして逝くとする
頭など刈って魂入れて来る

唐津市 仁 部 四 郎

軋む音椅子のサイズに比例する
単身の庭虫虻が不意に死ぬ
餞別の使途念を押す妻の旅
これしきと思えど涙親譲り

陽炎の出口で神と初対面

唐津市 久 保 正 敏

票を買う政治家やがて国を売る
洪水に襲われ飲める水がない
脇役が斬られて終る汚職劇
アフリカを救えず月に旗を立て
残高を減らす女の媚に会う

唐津市 浜 本 義 美

包丁の日毎ひごとに梅雨の錆
梅雨深し小蟹しきりに堀を這い
みんな巢へ戻るおいらの巢には鍵
痩せるだけ痩せても生きる葉漬け
監視所の望遠レンズ何を視た

富田林市 藤 田 泰 子

女々しさを貫き通す月見草
夢ばかりみではおれないお腹空く
着ないけど絹の寝巻は持っている
一周忌西瓜の好きな亡母でした
曲げてみて反発力を知っておく

富田林市 田 形 美 緒

生涯を添う他はなし影法師
弟よ豊太閣と同じ夢
夢を見るレンズ七彩クリスタル
露草の目立たぬ女の深情け
昨日まであなたと見てた同じ夢

鳥取県 松 下 た つ み

雑音に慣れて味方が見えてくる
潔癖な人のコップは冷えたまま
腹話術の愛に呼吸乱される
偽りの虹へ善人かけて行く
沈黙を武器に心は疲れてる

鳥取県 林 露 杖

粽結う妻と手順を探りつつ
贅沢は窓一杯の青嵐
知らぬ街通れば知らぬ花に逢い
顧みて身を焼くほどの恋なくて
ブロンズの裸婦の乳房は蒼なる

鳥取県 森 山 盛 桜

命ある限り尺取虫でいる
引っ込みがつかずに昼の月で居る
男の為に歌を歌ったりはしない
忍の字を真結びにして朝を出る
葛藤の中でやがては姑になる

鳥取県 土 橋 螢

ブランコを蹴って夢みる少女たち
囲炉裏から父の煙管の音がする
半分は笑った顔に見えるかな
美しい女の風邪なら貰おうか
嘘をつく力を愛という情

鳥取県 新 家 完 司

花束を上げたい人が二人いる
頂上はお花畑に違いない

ハイハイハイいつも正しいのはあなた
相性はびつたりポチとわたくしと
宝石はないが両手に星が降る

寝屋川市 柴 田 英 壬 子

同い年の暑中見舞いは釣り三味
おん墓のような汗母で支えてる
息抜きのはずの手習い重くなり
耳にせん父の花火を見守りぬ
逆縁の弟送り老母しずか

寝屋川市 江 口 度

ラッキョウを剥いてる猿を笑えるか
たくさんの誤解を聞いているピカソ
それしかないのと言われそう浴衣着る
昼の飯場で冷えた麦茶と国なまり
みんな去に仏間でぬるい茶をすする

弟の死(二句)
松原市 北 野 久 子

仏となる喘ぎの息をただ見つめ
死ぬ時も通夜も畳の上が良い
夫への感謝芽生える六十路
指輪外して不運な友と逢う
男は産むな一つ違えば鬼と化す

松原市 小 池 し げ お

ボヤでよかったのに消防はおかんむり
ひまわりに迎えて貰う無人駅
厄介な話へ蟬が泣きやまず

梯子から落ちて見舞を笑わせる
キッスして欲しいカーテン締め立ち

豊中市 田中正坊

陰口は聞きたくはない蜆汁

水虫が治ると信じている梅酢

惚けかけた兄とひととき血の絆

一合を妙薬として老父達者

戦前の物価老母の記憶力

豊中市 上田登志実

深追いをするから運に逃げられる

いつまでも親分肌のぬけぬ馬鹿

メモ一枚政財界を慌てさせ

ダイエット海水浴に間にあわず

凡俗の悟りか老いの諦めか

羽曳野市 佐野白水

真っ直ぐに歩き損多かりき人生

真っ直ぐに歩く男の金庫番

老友のポケ老友の名を忘れ

広告のティッシュに夏風邪助けられ

一蓮托生首相蔵相幹事長

羽曳野市 榎本吐来

ウサ晴らすパチンコ玉の素直さよ

自信過剰の耳に素直な感嘆詞

こつこつともつれの種を貯めて逝き

嘘ひとつ通しおおせた昼の月

盃へ弱気の鬼が入りする

台湾故宫博物院 中国記念堂

島根県 石田清泉

殷代の文化に恐縮するばかり

甲骨文眼の前にして息をのみ

何もかも許す総統の目と出合い

中正堂の広さに小さく小さくいる

台平の歴史がわれに問いかける

島根県 松本はるみ

手ごたえのわからぬ程の紐の先

それなりに幸せと言う座りだこ

一筋の涙は神に近づけり

キナ臭い話にのらぬきりぎりす

子子の吐息を聞いたアメンボウ

米子市 青戸田鶴

夜になれば私の世界広くなる

話し合いにがい思いがあとをひく

夫の掌にのつたかたちでいる平和

その時は無神論者も掌を合せ

ふところが深くて山に近よれぬ

米子市 菅井とも子

遠い子の人形人形も持ち輪をくぐる

無口の子本音吐き出すまで待とう

方言を覚えて帰る夏休み

自転車に乗ると寄り道したくなる

飛行機にのって世界を甘くみる

西宮市 奥田みつ子

淋しさに母母と書いている
ろうそくの火影に亡母が揺れている
白芙蓉遠い記憶の母がいる
電話口夫婦喧嘩のあとらしい
病床に一番早く朝がくる

西宮市 西口 いわゑ

セツトしたので当もなく町へ出る
千手観音のぞみ一つがままならぬ
火のついた煙草のような物思
留袖を脱いでどよめき聞いている
逃げ水を追いかけて喜劇くり返す

京都市 山本 規不風

灰になる愛を万両の実と離婚
奥様はお元気ですか顔の艶
逢いにゆく祇園囃子が哀しくて
五寸釘なぞは古いよテレパシー
お遍路に誘われてリハビリが弾む

奈良市 天正 千梢

ストレスなんて何さ激動生きて来し
桑の実でくちびる赤く染めし頃
火の種はボタンかけちがえただけの事
「真剣さ」心の中にも汗をかき
銭に負けて実年も棒にふり

兵庫県 辻 文平

久しぶり妻も酔うてる猪口二つ
善人の仮面が重い紫煙の輪

もひとりの私を吊るす私小説
未練まだ捨てないままの水鏡
満腹でもうどちらでもよい妥協

大田市 藤田 軒太楼

呆けかけてせめて正座を崩さない
爪を切る手元のふるえて老いを知り
ポーナスと思えよ牛が子を産んだ
親爺とは名ばかりいつしか放つとかれ
駄目おしの言葉が喉にひっかかり

宇部市 平田 実男

体罰もやさしい顔もあつた亡父
濡衣を着てから格の上がる秘書
半生記消ゴム欲しいところが受け
ストレスの解消野良着してくれる
天才の母は過疎地で鎌を振り

出雲市 園山 多賀子

捨て石が寝返ることは考えぬ
愚痴つぼくなる受話器なら伏せておく
独り言馴れてそれから貝になる
仏前に保存期間のあるお菓子
詳らか敬語が生きる車間距離

岸和田市 福浦 勝晴

妻アスで音痴で気さくで日々平和
カラオケは不得手で読書はリズム的
仏壇の花替え水替えムード替え
遠花火単身赴任の缶ビール

立呑み屋繁盛戦争風化する

西条市 片上明水

風上の策風下で故紙になる

車椅子鳩に巻かれて動けない

ネオン街抜ける歩幅を心得る

帰る家ないから螢まい戻り

足ばかり踏まれ都会の地に慣れず

東大阪市 崎山美子

アイドルのポスターが待つ一DK

蛇の目傘ゆつくりゆつくり菖蒲園

知らぬ間に亡母の袖の似合う歳

粹筋のお方とわかるぬき衣紋

一族の儲け頭がつく上座

貝塚市 行天千代

ふきぬきの水車の風呂へ家族連

目も耳も遠くあの世は近くなり

枕して明日の目覚めを信じよう

紫陽花のおしゃれたびたび色直し

難波駅娘と待ち合わずグルメ行

高知県 赤川菊野

才媛でないから人が寄ってくる

草に寝て少女の私と語り合っ

読み終えて私に遠い有夫恋

糠漬がとでも上手で翔べません

まわりくどい話はきらい土佐育ち

大和高田市 岸本豊平次

天皇のお田植えはまだ手で植える
境内の隅で埋れた力石

触れ合えば夫婦茶碗ももろさ持つ

ついついと言つて半端な日が暮れる

吊り革の隣は何をする指か

高石市 浅野房子

人嫌いと言うわりにはよく喋り

人嫌い動物好きで自閉症

寄りかかる大樹がゆれてきた余生

夾竹桃暑くるしいと知らず咲き

知らぬ間に流されてきた吹きだまり

岡山県 荻野 鮫虎狼

お酒落して女地藏と対話する

煙草止め酒止め人間止められず

白百合の首がぐったり倦怠期

世を捨てた昼寝が文句言うて起き

田が匂い山が匂うて遍路宿

姫路市 丁坪 サワ子

針の筵花のむしろに更える嫁

食べ物のゴミ溜になる冷蔵庫

車座へ父の座れる場所が無い

カルガモに訓えられてる縄電車

不器用な女で溺れる天の川

静岡市 渥美 弧 秀

みどり児の瞳に救われる昼下り

詩と音楽憑かれた兎月を出る

絵馬多彩神も願いを持って余す
大欠伸した瞳に蒼い空がある
梅雨晴れて心の隅へ忘れもの

宝塚市 丸山 よし津

不言実行の親の期待は裏切れず
現実から決して逃げない父の眉
頑ななビルの谷間の平屋建て
蛇口から水漏れ駅も古くなる
窓は雨雑巾だけを縫うミシン

八尾市 鷺見 章

刑事の目解いて非番の肩車
朝顔の路地にようよう陽が匂い
炎天を睨んで風の仁王門
のんびりと団地の昼をわらび餅
車椅子妻と揃いの夏帽子

尼崎市 奥山 美智子

奥水間温泉(三句)

深閑と空気が眠る別天地
グルメとや素朴な味に舌鼓
噂から逃れて風が温かい
雨つづく甘え上手な膝小僧
言いすぎて少し淋しくなってくる

松江市 舟木 与根一

頼りない小指とげんまんして帰る
切り札はいつも女のほうが持つ
遺産などないので兄弟仲が良い

火葬場の設備へ行政胸を張り

岸和田市 原 さよ子

日本を細かく分けて梅雨明けず
頼られる嬉しさ真昼のベダル踏む
もの忘れに拍車がかかるとの暑さ
プライドがたった一言言わせない

岸和田市 清野 こう

父の日のベッドに娘等の顔揃う
嬉しさを泣いて表わす病む夫
嫁のない与作に異国の嫁が来る
お若いと言われて数え歳を言い

岸和田市 島崎 富志子

ジャンボくじやつと当れば三千元
週休二日制ほしいと思う台所
風鈴の短冊自作の句がゆれる
風は気まま家に来る日とこない日と

岸和田市 古野 ひで

梅雨晴間神経痛も中休み
梅雨晴間廻るわ廻る洗濯機
石段の数は祈りを深くする
梅らっきよ娘も漬けるらし電話来る

岸和田市 芳地 狸村

リハビリ外野席が喧しい
大部屋で知る人生の生きる道
女房の看病してます均等法
金曜の十三日にする手術

銀盤から銀輪かける夢五輪
風見鶏かぜの力量見逃さず
隙見せぬ剣客も未だ修業中
清貧も寒き茅屋の隙間かぜ

唐津市 筒井 竜

女医さんも家で飲んでる家伝薬

唐津市 山口 高明

揺り籠の人形愛を信じきり

報道の権利とテレビ自惚れる

口紅を買って大人の仲間入り

唐津市 浜本 ちよ

初生りのひねた茄子を亡母に見せ

シャンデリア素敵な面を皆かぶり

体験で物言い若さに疎まれる

踏切の向うもイライラしてる顔

島根県 西村 早苗

齢は齢恋はちやつかりするつもり

気がねなどするなさんまがおいしいぞ

そして秋どの恋愛も咲かぬまま

もて遊ぶ矢が直線に僕に向く

島根県 神原 秀子

つくる閑貰う閑ならなおたのし

縦横の糸の絆を大切に

横糸の大事へ箴が痛み出し

睡蓮が心のさわぎたしなめる

米子市 野坂 なみ

もう来ない一日ですね日めくりよ
踊り人形の捻子ゆっくりと捲いてやる
芋虫も無駄に生きてるわけでない
一人の世界でわたくしへの掟

米子市 政岡 日枝子

破れてる仲間の靴を見てしまふ

寶石をつけて裸の王様に

言うだけは言っていびきの人となる

父と子の会話男をのぞかせる

米子市 澤田 千春

峰の雪消えてあかるい便りくる

ときめきの風を小箱に入れておく

橋の真上ごうけつ笑いたくなる

つまりいた石が一拍休止くれ

米子市 光井 玲子

同志からみれば刺身のつまでいい

お茶漬けのリズム崩さず二人住む

峰歩く男はうしろ振りむかぬ

小町ではないが優しい妻といふ

米子市 小村 てい子

さわやかな花の木植える垣隣

情念をふくらませては水中花

遠雷や試行錯誤のきつね雨

満月は欠けるものだと知りながら

寝屋川市 宮尾 あいき

孝行な息子と瀬戸大橋今渡る
絶景かな瀬戸の島々雨がすみ

喜寿の母押しあげられて御本堂

寝屋川市

岸野 あやめ

三界に家もない身がする昼寝

強運の顔が並んだクラス会

父の日の父は梅の実挽ぐばかり

コスモスのやさしさ強さ初秋の風

町田市

竹内 紫 鏘

留守番電話さすが朗読会の人

絶景で失う日ありコンタクト

受け身ではない原稿紙買ひに出る

体型はおばさんと言うほかはなし

呉市

林野 甦 光

商談の出直すところでけりをつけ

ひらめきの効かない座右の薬瓶

秋の山借景にしてお嫁来る

言い訳は利口に裏も読んでいる

呉市

横田 英 詩

冷静に見えるだろうかふところ手

夫婦愛来世は他人かも知れぬ

朝刊をゆっくり読んで遅刻する

大の字に寝て王様の夢をみん

弘前市

斉藤 効

やがて夏ねぶた絵武者に目を入れる

ペン胼胝が忘れはしない敗戦記

ダイエツト女の夢はカスミ草
花火鳴る方へ気の合う夫婦下駄

弘前市

真喜内 實

刺身切るうまさも父の履歴書か

冀親父とまだ頼られている証拠

故郷のせせらぎ夫と高ぶりて

もつと自信持ちましよ顎引きましよ

姫路市

人見 翠 記

言いたいこと言って老後をあたふたと

自らを下げて噂を気にかける

乗り越せぬ姑の背骨は真直ぐで

愛されることのみ望むにくい人

姫路市

中塚 遊 峰

亡母笑い何時しか気づく同じ癖

今も尚亡父のひと言生き続け

耐えた日を思い出してる片羽どり

食通がシェフに突っ込むかくし味

和歌山市

福井 桂 香

砂煙り敦煌を観て嗽する

反抗期さえブーメラン信じ切る

目の前にゴキブリ居ますどうします

大ジョッキ女の手にも軽々と

和歌山市

後藤 正 子

じゃがいもの花ゆれている亡母と逢う

一部始終にふれて流れが深くなる

長い列横切るときの寒い背な

笑いつかれて涙がにじむ姫鏡

和歌山市 山川 克子

脇役が主役か香水びんの蓋

窓際でシベリアの月聞かされる

来世まで従って行きたいこまります

私にも呑む打つ買うという自由

和歌山県 寺田 裕美

梅雨からのこの愉しみの梅を干す

やっと袖付いて夜店へ駆けてゆく

標本になる蟬も鳴く夏休み

てのひらを返すと男でなくなるぞ

八尾市 山下 みつる

温泉の鯨の風呂で海を見る

東京で田舎の味のオカキ買う

結局は米肉買ひも手打する

こぜわしい浪速のウインド秋の彩

八尾市 宮崎 シマ子

生年月日妻のは妻に聞いてから

欣求浄土貴方と一緒にならいいね

胸をつく計報聞く日もカンナ燃ゆ

うちの子も金と力はなかりけり

鳥取県 森田 布堂

蝸が鳴く夕暮れを野辺送り

今朝もまた汚職の顔と記事が載り

御中元義理と人情地におちず

戻り梅雨また黒星の気象庁

半島の民話からりと星が降る

B面のリズムは少し甲高い

慈雨三日そろそろ愚痴が尖りだす

適量を内緒で越した高いびき

鳥取県 江原 とみお

晩成の大型の筈がほけてきた

向日葵だって弱点はあるだろう

輪の中で自分のいびつ確かめる

ご自慢をたっぷり聞いて花もらっ

諫早市 原田メイシユン

左遷とは伸びる芽を摘む鋏かも

朝の決意が夜には酒を買って来い

降れば降る降らねば降らぬと愚痴こぼし

平和とは核ちらつかすことだろか

今治市 矢野 佳雲

お祈りがすむといい顔して帰り

日本間をほめて外人靴を脱ぎ

夫婦とは脆いものだと判をつき

ドライフラワー自分も生きてると思ひ

茨木市 井上 森生

スピードに燃えカルガリーにもソウルにも

時差の怪回る地球の昼と夜

ピジネスがうつろに見えて梅雨明ける

逃げ水が眠気を誘う炎天下

茨木市 堀 良江

鳥取県 羽津川 公乃

アメリカのみやげ日本製カメラ

一言が葉以上にとく効いた

逆らわぬ妻の心にある謀反

盛装のオバサンを皆振り返り

大阪市 塩田 新一郎

女房の笑顔も梅雨の晴間かな

シルクロード博ビクともしない大仏さん

家計簿に増えた科目や猫の餌

そのうちにロボット労組出来るやろ

玉野市 小谷 仙山

適当におこつて人を笑わせる

古希の坂どう装つても前かがみ

明日はあすはと同じ夢を見ています

一本の道しか通れぬ白いバラ

竹原市 岩本 笑子

テッセンの色を盗めばたそがれる

握手した手から大臣金を生む

どの子にも笑くば信じてあげましょう

夫と来て海がこんなにも静か

竹原市 石原 淑子

きっかけを聞かれていつも口ごもり

潮時を逃がして気ままな独り住む

愚痴っばく子供の自慢を聴かされる

掌を返された日の虞美人草

高槻市 川島 諷云児

頂点に立って変わってきた主張

言い勝つてみても父の背超えられず

いたわりを嫌う頑固なベレー帽

嘘のない花に逢いたく旅に出る

高槻市 竹内 花代子

老いらくの恋は責任取れませぬ

もう孫も居ますお務め飽いた月参り

枝豆を供え仏と飲むビール

塔の影鯉のジャンプに崩される

岡山市 井上 柳五郎

自画像へ余生の彩もふえてくる

残りものでよいと年金老いの箸

ずりあげた老眼鏡のひとり言

ほんとうの理解者と知る嬉しい目

岡山市 岩道 博友

正確な回答すれば蔑視され

都合よく出会った地下街邪魔を連れ

遊びから帰れば来ていた納税書

誕生日坐薬一本入れて過ぎ

岡山市 小林 妻子

安心をさせたい老母への笑い声

汗光る我が生涯の男道

父の忌へ女ばかりの舞扇

闘病の生贄姉は嫁きおくれ

岡山市 山本 玉恵

まだ夢を抱かせてくれる花ざくろ

竹の子がバサツと着物脱ぎ捨てる
昔から鴉と百姓ウマが合い
酔うてますでも自尊心は持っています

笠岡市 松本忠三

郵便が忠二と書いて届けられ
爪楊枝くわえたままで付けといて
殿様として生きている蛙めが
御機嫌が斜め灯りがついている

箕面子 坪田紅葉

ティールームいつもの席が空いている
気楽過ぎこだわり忘れた霞草
今日も雨電話で話す老いのぐち
つっぱって生きてる人の裏話

松山市 谷信夫

榮養満点のおばさんが来る道譲る
あつたあつたこんなところに探しもの
何とかなろう何とかなって根をおろし
越中で孤老の夏を斬りぬける

和泉市 西岡洛醉

初恋はもう時効なり共白髪
断ち切れぬ未練に外は雨しとど
平凡な暮らしを乱す朝の記事
流し台妻の背中に見るおんな

倉吉市 渡辺菩句

珍しく郭公に朝起こされる

猫の目にはライバルである猫目石
蝶番がはずれひまわりガクと折れ
反骨はこっちへ置いて心太食う

福岡県 横地雅風

あわだち草刈ってすすきの美しき
瘦せる茶を瘦せてる夫も飲まされる
励ますと一浪が普通ですと孫
海に手を合わせて漁夫の妻なるか

河内長野市 井上喜醉

英雄の末路はあわれ二日酔い
スタイルが落ちた女でよう食べる
フルーツパーラー若く見えてる妻の顔
二刀流あんたそれでも男かい

羽咋市 三宅ろ亭

せつかくの鰻も下痢をして控え
あの日から数えて何年経つ日記
通過都市三万を割る寂しさよ
一輪差し毎日換える妻の趣味

静岡市 永倉僕川

悪友は祝辞に言葉飾らない
俺の名で掛けた保険が怖くなり
叱られた記憶がないと嘘を言う
手術台神に任せて眼を閉じる

堺市 柿花紀美女

半袖の腕のたるみに老いの影

何かある鉢の金魚は落ち着かず
年寄りのくらし朝顔数えてる

ご先祖の家訓がわかる年となり

富田林市

松本 今日子

黄西瓜赤いトマトに恋をする

盛り皿のサラダは優しい色ばかり

これ以上背くな種のない西瓜

もどり梅雨どこかで借りた女傘

熊本市

永田 俊子

自尊心強くて蟹の横歩き

螢火ほどの一生できれいな水が好き

あのことを言わねばと思う釘つけ

農継がぬ子ありき陛下御田植

有田市

松井 かなめ

盃重ねしどろもどろの本音聞き

巫女の振る鈴のリズムに朝涼し

赤貧の中にも義理は持ちつづけ

単身赴任妻の心配つめて出る

海南市

三宅 保

天気予報どのチャンネルも雨という

お互いに引くと結び目解けません

ちっばけな庭を選んでくれた蟬

車座になっても目だつ人がいる

広島県

藤 解 静 風

精一杯背伸びしている菜指

夫婦舟舫い解きたい日もあろう
雨の音夫婦それぞれ別のこと
他人ではないから妻に腹が立ち

豊中市

辻川 慶子

ふすま絵の波打ち寄せる魁夷の絵(唐招提寺)

面影がもしやと思う人に逢う

ときめいて待った手紙も遠花火

長電話結局話まともらず

吹田市

栗谷 春子

朝早き子供の声は透きとおり

踏切の鐘がこわくて走りぬけ

今日の日は何と何とををして暮れる

リア王の如く悩むか星なき夜

出雲市

河原 恵美子

塗り物のお盆が笑う過去の事

引き続きレールに乗ったキューピット

淡々とレモンが恋をうちあげた

君だから一パーセントの賭に勝つ

仙台市

川村 映輝

用意した言葉が出ない話下手

正論ばかり吐く男で親しめず

くじ運が弱い女房大当り

神戸市

仲 どんたく

御先祖のロマンを語る踊りの輪

治るのが惜しくなるほど看取られる

みなたつしや並の暮しに竿をさし

芦屋市 竹 中 綾 珠

半日の不養生一カ月臥かされる

金で買うような幸せならいらぬ
こたわりを捨てて気づいた温い風
きっかけが欲しくて故里の陽を浴びる

天井の木目も四、五日は面白い
朝夕の息子の挨拶元氣呉れ

七尾市 松 高 秀 峰

老人と言わず長寿の方と言ひ

カルガモのニュースに朝が笑い出す
潮干狩心も袋も満たされる
雨雨雨しつとり似合う京の旅

セールの口に暗示をかけられる
落し蓋知ってる母のかくし味

加賀市 細呂木 魯 木

転落はひとり合点の誤算から

野良仕事時計代りの汽車が行く
牛の値がついて別れる峠道
結ばせて神も呆れる離婚劇

三流のひげ目発言控えてる
東京に住んでて日本がよく見えず

出雲市 吉 岡 きみえ

麦の秋ああ平和なひこう雲

和のためにやっぱり言わないことにする
お散歩は老人ホームの粹な花

出雲市 板 垣 夢 醉

写経して阿弥陀の心つかめたか

酒ぐせへこっそり祝賀の宴を抜け
老人大学交通安全又も聞く
了見の狭い師匠のいやがらせ

鏡見て五時から男しやきつとし
都会の香さげて降り立つ盆の駅

出雲市 石 倉 芙 佐 子

みごもつて花の主張が強くなる

一界は女に家がある寿命
剝製の亭主にさせたオチヨボロ

化粧箱みだれて夏もゆかんとす
約束がどこかで狂う花時計

出雲市 細 川 稚 代

出雲市 竹 治 ちかし

出雲市 小 玉 満 江

出雲市 小 白 金 房 子

出雲市 園 山 良 子

出雲市 二 宗 吟 平

岡山市 花 田 たけ志

岡山市 花 田 たけ志

和歌山市 細 川 稚 代

和歌山市 細 川 稚 代

和歌山市 細 川 稚 代

和歌山市 細 川 稚 代

和歌山市 細 川 稚 代

和歌山市 細 川 稚 代

和歌山市 細 川 稚 代

和歌山市 細 川 稚 代

和歌山市 細 川 稚 代

和歌山市 細 川 稚 代

和歌山市 細 川 稚 代

和歌山市 細 川 稚 代

和歌山市 細 川 稚 代

和歌山市 細 川 稚 代

和歌山市 細 川 稚 代

和歌山市 細 川 稚 代

和歌山市 細 川 稚 代

和歌山市 細 川 稚 代

和歌山市 細 川 稚 代

和歌山市 細 川 稚 代

雨女きつちり雨の京の宿
この街を愛し恋した人も逝き
雑踏の中で面影追うている

和歌山市 桜井千秀

こまねいた腕から抜けてゆくパワー
面倒を避け退屈と差し向い
丸出しのエゴで固めた日記帳

和歌山市 木本朱夏

お守りの代りに聖書もっている
みじろぎも出来ず見ているラブシーン
赤ちゃんの白い心がこわくなる

和歌山市 青枝鉄治

土落とされ埴輪大きく深呼吸
土つけた野菜で保つ隣の和
汚職への誘いかからぬ椅子に居る

大阪市 大野武太

むつかしい話の腰を折るくしゃみ
ぬるま湯でくしゃみのでそうな消費税
新しいスリッパ父の誕生日

大阪市 寺井東雲

予報官今朝もナマズに餌をやる
趣味の縁ライバル意識少し持ち
他人様に嫌い嫌いと言うておく

大阪市 渡部さと美

良い汗を流し健康派とやせたい派

言いそびれ話そのまま向きを変え
三十五年その先かすんでいるローン

大阪市 松尾柳右子

汗ぬぐうお見舞客が励まされ
腕にある輪ゴム時々人助け
夏期プランビザとる話よその事

大阪市 北山悟郎

ふん切りが男の価値に火を付ける
ライバルが横で欠伸を噛みしめる
老碌の言葉に隠れ金を貯め

大阪市 板東倫子

年寄の冷水立派じゃないですか
看護する方も呆けてる老夫婦
希少価値になった貧乏楽しもう

米子市 金山夕子

Tシャツがうしろまえですお父さん
失礼して鬼の金棒つかみます
雲つかむ話をしてるティータイム

米子市 白根ふみ

肩のこる話はあとでビール注ぐ
肩の荷をおろしすぎたか歩が合わぬ
ひまわりに睨まれながら昼寝する

米子市 川上より子

ははと居て昔話の縄を編む
ふる里は雨で太鼓が届かない

リハビリのピアノですかと問われたり

高知県 中内朱坊

(前月分)

島根県 松本文子

人生の余白まだまだ金が欲し

借金に慣れて来たローン

膨らんだ夢も一夜の月見草

高知県 小澤幸泉

連休も用無し庭の草むしり
愛憎の哀し眼鏡かけ替える
持駒が少なくなつて低姿勢

鳥取県 金川満春

金持ちの女美人にみえてくる

老人も夏を着ている帰り汽車

一幕が下りてうしろをふりかえる

高知県 曾我部裕

今朝取れの魚を提げて祖母を訪う
失敗はもうたくさんだ大東亜
新婚の爆笑しこり等は無い

鳥取県 土橋はるお

幸せはまだ働ける怒鳴られる

直前で曲がりますよと出す指示器

あるスリル卵を一つのんで出る

島根県 北川民子

しりとの終りになつたワイングラス
姑の手前の事が許します
ロボットが大きな軒かいている

鳥取県 さえきやえ

ハンカチの隅にも残る恋ごころ

夏座敷女ひとりへ陽が沈む

金封の赤黒こもごも夏に入る

島根県 藤原鈴江

ああ無冠野良で自由をむさぼりぬ
港の灯父の泪がにじんでのる
小さな嘘でついにタバコを止めさせる

鳥取県 谷口次男

夕焼に染まりたいから赤トンボ

わが身さえ思うとおりに動かない

雨後の草残らず生命噴きあげる

島根県 松本文子

丸い地球の中でいがみ合う
あれからは不気味な声のする深夜
泣くよりは我慢の顔が泣かせます

鳥取県 津村八重子

二度童子老母の誇りが保てるか

愚痴も夢も捨てざる湖の青さゆえ

逃げ仕度する親蟹よ海開き

米寿越す父にも温い膝がある
お人好し囿にされる事に慣れ
風鈴は裸ん坊に飽きている

枚方市 宮川珠笑

同伴へ妻の好みを着せられる
忙しいそがしい喋り過ぎて主婦
年寄りの病院通に勞られ

姫路市 大原葉香

税制を喰い脱税大手振り
昨日の事は忘れ昔をよく覚え
神様の投網にかかる運不運

竹原市 信本博子

断ち切れぬ愛が生かした釣忍
教会へ讚美歌聞きに來る雀
繩文のおしゃれ女の絹衣

富田林市 片岡智恵子

上手ですわ胃カメラを又のまされる
黄西瓜米世は赤と決めている
幕降りるまでは言うてはならぬ文字

富田林市 新開千代女

涙とはもうおさらばと今日も泣き
何時の間に遺影と話す昨日今日
気が弱く本音がわからず困つてる

西宮市 瀬尾六郎太

おじぎするそのくせ大事電話口
だっこしておんぶして孫日々重く
仕事でのモミ手の亭主妻知らず

川西市 松本ただし

楷書から行書に変わる恋ことば

荷物やつと降ろした後の蟬しぐれ
静謐の空氣に変えた美辞麗句

豊中市 一瀬福一

あやまちはきのうの事とネオン消え
運命という事にして放つとかれ
思うことずけずけ書いて光るペン

吹田市 茂見よ志子

逢ってきた余韻今宵を狂わせる
会うまでの期待虚しいモノローグ
人柄の匂うお庭で花談義

高槻市 河瀬芳子

恵まれた五体にこころ欠けていた
鼻もちのならぬ私へ突き当たる
以下同文に慣れてきました堅い椅子

守口市 森川まさお

ほめられて点滴一日中つづき
焼肉と螢見物セットなり
ベンチで一人催し案内読んでいる

兵庫県 脇田米朝

言葉撰るいつも静かなお人柄
通せんぼしてたは初恋のあなたです
何をこれしきよくよなんかしなさんな

箕面市 椎江清芳

ポーナスの味を知らない手内職
紫陽花の花の面影雨女

記念日を忘れていない古時計

和泉市 岡井やすお

黎明の空気が旨い万歩計

奈良県 宮川古都路

職さがし人材さがしには酒場
テニスでも鉢巻をする正念場
外人に稼がせ稼ぐプロ野球

吹田市 園田文子

いちびると尺がとび来る毛糸玉
迷信をはっきり言える無神論

兵庫県 都里遊光

寝苦しい裸にされた夢を見る
酒は売るもの女貫くネオン街
白足袋の母のおもかげ月見草

大阪市 中西兼治郎

思い出より明日がほしいお月様
馴れ過ぎた愛に近づく隙間風

鳥取県 乾喜与志

事故はここガードレールの物語
献血ももう許されぬ齢になり

大阪市 宮下とし

男ぎらいの熟女にイエスさま宿る
人生行路狂ったなりの花咲かす

鳥取県 田村きみ子

清元とデイスコが棲む双た世帯
生え際の白が気になる更年期

大阪市 富岡温子

純情派わたしは白い服が好き
今日の後悔きつと宝として生きる

広島県 田村新造

聞こえないふりで揉めごとさせぬ姑
軒かく主居ぬ夜の寝つかれず

大阪市 横山為子

夾竹桃赤し今年も忌がめぐる
蟬しぐれ墓地に艦隊勢揃い

倉敷市 田辺灸六

腕一本両手に余る子を育て
畳から解放された座りだこ

寝屋川市 堀江光子

自己診断病名あれもこれもつけ
風邪ひとついたわり合うてウサギ小屋

和歌山市 山田高夫

別れする夜更けの駅の火取り虫
ちらちらと話題遺産に触れてくる

高知市 北川竹萌

斜交いに星を数える大ジョッキ
一病に馴染んでからの梅雨の鬱

東京都 吉川一郎

転出の挨拶惜しむペアルック

休肝日明日の分まで呑んでおく
新任地寂しがり屋に雨の私語

赤い傘男の肩が濡れている
暮し向き良くも悪くもする噂
河内長野市 植村喜代

出雲市 久谷まこと

倦怠期古傷はまだ語らせぬ
耐えて来た憎まれ口も共白髪

守口市 結城君子

鼻がいるから噂せずに行く
わたくしの白骨どんな細さかな

岡山市 池田半仙

声も眩きも父子真似てる訳でない
損得をここは度外視義理につく

岡山市 直原七面山

影として生きて来て
寄付をして顔を立て

第24回川柳塔きやらぼく 忘年句会

とき 昭和63年12月4日(日)正午開場
ところ 米子駅前 米吾ビル5階
(電話0859-33-2221)
宿題 「危ない」「ポスト」「鍵」「いつか」「鸚鵡」「吹く」「橋」「割る」「水」「逢う」「蛇」
会費 三、〇〇〇円(懇親宴とも)
選者当日決定 各題2句 締切13時

主催 川柳塔きやらぼく

日本川柳秀句集(第四集)
日本川柳推薦句集(第二集)
締切迫る

発行 昭和64年3月予定

締切 昭和63年9月末日

掲載内容 日本川柳秀句集 百句

日本川柳推薦句集 三千句

応募作品 昭和61年10月以降の自作品十句以内、既発表未発表を問わず

参加料 一件三千円(日本川柳推薦句集、日本川柳秀句集各一冊呈)

一件に限定し、申込み一件ごとに

参加料添付(振替又は小為替)

選者 藤島茶六・山田良行・磯野いさむ

西尾栄

◇参加用紙ご入用の方は左記へ

〒542 大阪市南区谷町7-1-39

新谷町第二ビル206

日本川柳協会事業部

電話 06(768)2622

振替口座(大阪7) 3575

自選集

児島与呂志

また一人便りくれてた人が逝く
言い足りぬ手の温もりが気にかかり
歳甲斐もなくゲジゲジの怖い妻
ひっそりと二人に熱い茶がうまい
成るようになるさと寝息うらやまし

黒川紫香

踏みそうになつた蛙と風を聞く
古里へ来るとタニシが食べられる
掃除するメイドが待っている廊下
呼び止めて車掌に時間聞く女
老いらくのデートも来てる中之島
背信をたくらむだまし舟を折る
師の影を踏まぬ歩幅を小さくとり

小林由多香

しじみ舟めつきり減つた湖凌う
燃え尽きた胸に故郷の風を入れ
手抜きなどできない父の汗光る

工藤甲吉

としよりを世の中置いてきぼりにし
平和とはしじみ鳩の目の円さ
一日を終わり軟着陸をする
万病の薬となると疑われ
訣別のあとにぶらんこ二つゆれ

本田恵二朗

人生航路まだまだ港見つからず
十五夜がゆうゆうせまらず雲を割る
根負けをしそうでしない母性の愛
夜空一瞬袈裟斬りにした流れ星
郷愁へ星がほほ笑みかけてくれ

大矢十郎

世の中に怖いものなしループタイ
可愛さのランクも小さい順に孫
大スターと私と病気だけ同じ
代議士は独りになるとほくそ笑み
果し状税吏が名刺置いて去に

野村太茂津

情熱燃ゆ遮る風の吹くかぎり
辛辣な言葉もうれし自問する
ムチムチ症明日はおそらく晴れだろう
一の矢は的中の矢は折ってある
一人では出来ぬ手を出せ口を出せ

山内静水

出来そこねの男にすぎし二人妻
お焼香ゆずりあつて二人妻
真からは悪じやあなかつた死んじまい
絶対安静開き直れたのが不思議
時どきは見合ひしてますまだひとり

藤井明朗

若い氣でいても脳から黄信号
消費税野党代案どうする氣

口先は達者で敬遠されている

化粧美人へ無駄な迷いをするおとこ
美しく老いるわたしに詩がある

水粉千翁

あのときを臉のうらの雨のおと
静けさのことさら風のささやきぬ

夏白く風青く人背伸びする

さみだれの瀬音わびしくしのぶ川
湯のかおり涼しい恋としてほてり

米澤暁明

能なしの馬鹿にもなれぬ破目を行く
色っぽい噂は耳を汚さない

よくない返事かな受話器待たされる

この坂を上ると夢がわきそうな
ままごとも正直者が馬鹿見とる

高橋操子

葉桜も又よし続く池の土手

葉桜の下へ持参のイスを出し

読み終えて豊かな胸の二、三日

雨でいい今日も読書にあてている
貸した傘さして帰りもさして去に

八木千代

雨は晴れてもてのひらにある水たまり

傘に入るとしぜんに俯いてしまふ

風鈴を傾かすほど風の噂

あほらしい事に切り札出すわたし

目覚めたらすぐに椿の虫を取る

小出智子

マイペース夾竹桃は今さかり

うちに居ると人の情がよく解る

単純になつて菟菟煮ています

雨降つてそれから先を見ていよう

藤枕夏の疲れをためている

月原宵明

魔船へなつかしむよう波寄せる

合槌を打ったばかりに借りられる

止り木で自問自答の酒となる

美しい茜は見えぬサングラス

濡れているポストが丸く詩になる

金井文秋

過労死はなからうマイペースの私

化粧して隠せる齢を女優持つ

かけ取りの方は根負けせずに来る

カットバックぼちぼちドラマ終りらし

頼むのも面倒になる倦怠期

有働芳仙

もう一人のわたしを貴男は気づかない

熱帯夜 天衣無縫へ月が出る

亦来ては困る客だがまた来てネ

別居してみたらどうやと要らぬ世話

ボランティア時にはそつと放つとい

藤村メ女

精霊の舟流れ行く月あかり

彼岸花炎えて亡父母思い出す

佛がほころび灯明が揺れる

星空に夏の名残りの遠火花

辞書を操り操り老年をカバーする

正本水客

善人の群れにまじつて見えずなり

幸せに遠く土産を売っている

腰ひもを貸してもろうて朝になる

思い出したように添書を出してくる

男子厨房を出て手を洗う

一人吟

秀句鑑賞

一前月号から

波多野 五楽庵

シヤガールの絵の中思慕が増すばかり

小西雄々

シヤガールの絵には吸い込まれそんな詩と幻想の世界がある。そのシヤガールを持ってきた感受性と思慕のもつ独特の情緒が素晴らしい。

試行錯誤五十の坂は昏れやすし

藤田泰子

大半の人生は試行錯誤の積み重ねの苦で、五十の坂と一気に読みおこせた手腕は並の試行錯誤ではありません。特に昏れやすしとおさめた下五字の大切さを教えてくれます。少し呆けて痛い話を聞き流す

石川侃流洞

少し呆けてがいいのです。しかも聞きたくない話に限って呆けるなんて最高で、むしろ円熟した人間性が伝わってきます。

「生きる寂しさ」お点頂戴しています

天正千梢

お手前をいただいている静の中の括弧で囲まれた生きる寂しさとは禅の言う悟りの世界

なのかもしれない。なにげない文中に底知れぬ深さを感じさせられる句である。

ほとけ樓亭主が無理を申します

岸野 あやめ

芭蕉の言葉に「云いおおせて何かある」とあります。言わない部分の中に本当の母娘以上に仲の良かった生活の余韻が、ほのぼのとした亭主への愛情と共に人の胸を打ちます。絵を買って心の窓がひとつふえ

越智 一水

心の窓、その窓から覗くと一水さんの素晴らしい知性が見えて参ります。窓とは知性であり、心の豊かさであると感じた時、絵の色の豊潤さが見えるような気がしました。

そりきわがとでもすてきな青りんご

野中御前

川柳は詩であることを見せてくれる青りんごでした。川柳という短文芸の中からこそ表現法が大切なのだという事を思い知らされる一句です。

髪を切るおとこひとり斬るために

木本朱夏

読んだ時ふと時実新子さんの顔を思いだした。髪を切る事によって葛藤がおさまる訳ではない、むしろ思慕を消すことの出来ない女の業を感じ、繊細な朱夏さんの神経にふれる思いもする。

口止めを洩らすタイプや気をつけや

井上喜醉

朱夏さんの句の後にこの句を選んだ努力を認めて欲しくなるような爽やかさだ。関西弁

のもつユーモアが後味のいい飲み心地を表わしてくれている。心配をしているようで他人行儀な人情が北方人である私には面白いのです。

うっかりと方向音痴のあとにつく

茂見 よ志子

うっかりついて行った御本人も方向音痴だったらついニヤリとしたくなる上手さである。川柳本来の三要素がしたくの中にすべて含有されている事を考えると、勿論個性という特質もあるだろうが、色と音に走りやすい革新川柳の再考もやむを得まい。

天気だったら元気があったらどっこいしょ

谷 信夫

信夫さんのお具合やお人柄を知るよしもないが、うんと元気のいい句を考えてどっこいしょを忘れて下さい。私に及びもつかない言葉の並べ方のうまさでした。

願わくば脳死にて打ち切り願ひ度く

栗谷 春子

今日の医学で話題の先端は脳死である。脳死とはあなたか死体の事であり、むしろ私だったらポックリをおすすめしたい。というのは冗談として、人間はだれしも死に対する恐怖を持って生きてきた。その結果の願わくばであり、脳死が出て来たのしようが、打ち切り願ひ度くと書かれた春子さんの感受性を賞賛申し上げたい。ただ中が八字ですので、できるだけ七字におさめて下さい。

川柳太平記 (124)

川柳の群像

増井不二也

東野大八

○盃の順 日本の祝いごと

○純情をかくしきれない紺紺

「川柳はわかり易く、明るく、愉しくなければなりません。これが私のモットーです」

昭和40年川柳大陸同窓会が生れたが、このときから悪友？大井正夫にひっぱられ、ほとんど毎回といってよいほど気楽にこの会に参加した不二也は、よくこの言葉を口にして、なんの屈托もない気楽なこの会が性に合つてとても好きなんだよ、と洩らしていた。この人の参加によって大陸川柳同窓会は会合毎に盛会になったといつても過言ではない。おかげでこの会は十九回も続いた。

不二也は本名増井勇一。明治38年9月25日神戸市有馬道商店街富士屋呉服店の若旦那に

不二也

生まれ育つた。柳号の不二也は生家ののれんからつけられた。稼業柄、和服と白足袋がよく似合う、一見ほんぼん育ちの、明るく奔放なその人柄は、昭和40年に出した彼の句集「不二」の各柳友の序文に一目瞭然だ。

「彼の句は彼独自のもので、不二也なる人生享楽派」(三条東洋樹)「その明るさのどこかに光の届かぬ一点がある」(鈴木九葉)「人間に良いばかり、悪いばかりは無いから、正直で無神経でないと世話役は続かない」(楳元紋太)「終着駅のない柳社の仕事に、呼吸の切れる心配のない太い神経の不二也がどっしり構えていくれる」(房川素生)

ホメているのか、ケナしているのかかわからない社内顔役連のこれが不二也評である。

これに応えてこの句集の後書がまことに彼らしくユニークである。不二也がつぶやく。

「不二」が何かぶつぶつ、つぶやいています。「不二」がひと息入れて又つぶやき始めました。「不二」が更につぶやきを続けています。「不二」のつぶやきはどこまで続くんでしょう。「不二」のつぶやきは果てしがありません。「不二」は又こんなことをつぶやいています。「不二」はまだ何かをつぶやいています。「不二」のつぶやきは熱を帯びてきました。

このけったいな後書を評して葵徳三いわく「著者不二也は、縷骨細心の自画像を懸命に描いているのである」

不二也の社内でのニックネームは「御前さま」である。評し得て妙という他はない。

「わたしたちが具えることのできなかつたおらかな判断力と、不敵ともいえる野放図な面を示した、生来のユーモリストが、その周囲を圧倒するような企画となり、実行を着実に進める形となった。その一つは亡き奥方の式服に、流し書ともいえる見事な筆勢で「盃の順 日本の祝いごと」の京染めは、現在も、そのアイデアの奇抜さと、美意識を巧みに織り交ぜた秀麗さで、こののちにも、多

くの人々のところに、ここを伝えていくこととしよう」(去来川巨城『博文』より)

こんな人柄の不二也も、人生と川柳においてはちゃんとけじめをつけて立派にその責任と闘っていたのである。

昭和19年企業整備で呉服商もできなくなつて三菱電機神戸製作所に徴用で入社。翌年神戸空襲で富士屋呉服店が焼け、五位池に移つた。五客荘という。三菱電機では昭和37年定年退職まで勤めた。一方、川柳の方は昭和11年1月ふあうすと句会に初めて出席し、同人になつたのはその三年後の昭和14年10月である。終戦後の昭和21年花菱川柳会を興し、ふあうすと句会の復刊にこぎつけ、その発行と編集人になる。

三菱電機在職中は、神戸・伊丹・名古屋・静岡に職場川柳の発芽を促し、川鉄・川重・阪神電鉄までその輪を拡げた。不二也は生れつきといつてよい程旅が好きで、川柳句会のあるところは片っ端から顔を出し、全国各地にその足跡は行きわたつた。これが、ふ社の渉外の役目を果たし、同社の実績を大いに発揚した。大陸川柳同窓会からも大井正夫と共に戦線を張り多数の同人獲得に成功している。

昭和10年ごろ、不二也の従兄で、やはり呉

服屋の息子で摂津明治という川柳人がいた。

この二人が地元句会に大いに活況を添え「ふあうすと社交会」というのを作つた。麻雀と将棋の集りである。不二也は、自称日本麻雀連盟公認五段、将棋は素人三段で、大陸同窓会の連中を煙に巻いたものである。

摂津明治は、初号山下我鬼、ある事情で家を勤当になり神戸の夜店で古本屋をやりながら川柳をひねつた。川上三太郎がこの我鬼の句を注目して、神戸に類をみない名作家とまで推賞していたという。勤当が解け我鬼を城児と改め、更に摂津明治に戻つたが、戦後は神戸ヤミ市の顔役となつた由だが消息不明。

○新所帯三組が揃う春の酒 不二也

昭和35年神戸観光ホテルで長男二女二男の三組同時の挙式を挙げ、不二也を知る人達を愕かせたが、この頃が彼の絶頂期だった。

また正月元旦になると近江砂大夫妻らと有馬温泉でくつろいだ数日を過すのを恒例としていたが、昭和54年喜美香夫人と死別してから、彼の体調も崩れはじめていたようだ。表向きは「胃潰瘍」と近親や柳友からいわれ、本人もそれをかたく信じていたようであったが、実は胃ガンであった。

「川柳をはじめ五十有余年、父の人生は

川柳と共にあつたといつても過言ではありません。有馬道というところは交通の便がよくここへ川柳仲間が毎日のようにきて談笑して

いました。応接間に大判の大福帖があり表紙に「五客荘」とかかれていました。これに立ち寄つた連中が川柳や絵をてんでに書き賑やかないたらずら書でした。子供心にもこれを見るのが楽しみでした。延原句沙弥さんは口を蛙のように閉じ(のどの病氣)いつもゲップをして、大山一狂(竹二)さんはうら声のようない笑い声でひょうひょうとして紋太さんもみえました。五客荘はいつも賑やかな雰囲気でした。しかし、こうした楽しい時代も過激な戦争へと移行して、ここに見えられた人々も今日までおあいすることなく時が過ぎました。」「ふあうすと」父の死を憶う。増井弘幸抄録)

昭和37年12月神戸新聞読者文芸川柳選者。

昭和40年9月句集「不二」発刊。昭和56年兵庫県ともしが賞受賞。昭和57年神戸市文化賞受賞。昭和59年7月14日死去。享年79。川柳院宗匠不二也居士。

★次回は「柿沼考人」

誹風柳多留廿六篇研究 (三十七丁)

小野真孝・本多正範・石田成佳
 大屋六郎・八木敬一・鈴木 黄
 石田晋一・南 得二・多田 光

故岡田 甫

636 丸いあたまかふたつある秋の暮

小野 本篇二丁に既出の三夕の句。同じ秋の夕暮でも定家とは異り西行と寂蓮は僧だから丸い頭が二つあるという事になる。

三人で言入り魚くふあきのくれ 二三三

石田成 贊。

ふたありやしやうじんものでさみしがり

多田 贊。

二三四〇

637 西海の波にたたよふ香包

小野 「香包」は、香を包む紙。句は壇の浦

における平家滅亡を詠んだもの。

一門はどぶりくとそうもんし 一七

とあるように、入水して果てたのだが、そのあとには香包がただよっていたであらうとのうがち。

大屋 贊。「香包」がいかにも平家らしい。

坂東の荒くれ武者の涙をさそつ。

多田 同右。

638 りんとうの會席書へ札か落

小野 これもはつきりしない句。詠史句らしく思われる。

本多 詠史句とは解しているが、よくわから

ない。

南 まったく御手あげ。

多田 まったくわからず。

639 貧学の灯りにたらぬ春の雪

小野 既出の孫康の故事を詠んだもの。春の淡雪であればとても書物を読むに足る程は積らず。

孫康が燈し吹き消ス春南

大屋 贊。

貧学の行燈蚊やの切レで張り

多田 贊。

七七二

九八五〇

640 甲の座に居るぬけかけの手習子

小野 山王祭、神田祭の折、一番の上席である甲の座にちやっかりと手習子が座っているといったよくある風景。

本多 礎という山王祭とは関係ないと思う。たんに寺子屋での場面を詠んだ句であろう。

「甲の座」は師匠の座をさす。

大屋 ほかの子より早く来て、いちばんいい席を占めたということではないでしょうか。

多田 予備校で前列にすわるため、朝早くから並ぶという。それに似たところで真面目なのが早く来て、いい場所にすわっている。

641 箸紙を細工はしめに塚こさへ

小野 来たばかりの花嫁は、家事はおろか半分お客扱いで、つい所作なさに折紙を折ったり箸紙を作り始める。そんな日常の風景である。

水引で結ぶ箸紙は嫁の作

明元梅 1

石田成 細工はじめからして、正月の雑煮箸を入れる箸紙を作ったものと解します。

口紅のほんのりぬの雑煮箸

一三二 18

南 石田成説通り花嫁の細工はじめが正月用の箸紙作りと解していました。

多田 同右。

642 姑か出ると手のぢぢむ歌かるた

小野 川柳では嫁はかるた取りの名手という事になっている。だが、おつかない姑が出て来て一座に加われれば、つい気兼ねして手もちぢもつというもの。言い得て妙。

読くらぬうちを取なと姑言、 五九 27

鈴木 賛、姑も昔の嫁さん。昔とつた杵柄で哥かるたは相当の巧者であろうし、又遠慮もあろう。

多田 同右。

643 またおたのしみたと杖で呼戻し

小野 判ったようで判らない句。

御隠居同士が甚でも闘わしながら欲談して帰ったところ、杖が忘れてあつた。未だそんなに遅くはない。「もう一番やりたいから呼び戻せ」との言葉に「おうい、杖々、ついでのことにもう一度戻ってお相手を願いたいそうです」といったような風景か。

本多 「また」は又か未だか。「又」とれば礎稿のような状況も考えられるが。状況よくわからない。

多田 同右。

644 一日ハ鹿相六日ハしつて付ヶ

小野 何ともなりません。御教示を待ちます。大屋 初潮ではないかと思ひます。なにも知らない娘が鹿相、二日目からは処置をする。

八木 私も当初大屋氏説を考えた。しかし「しつて付ヶ」がうまくつかない。

さて、「つける」から、鉄漿ではないかと考えてみた。一日ハ知らないでカネをつけてしまった。つけた後でメンスになったのかも知れない。あとの六日はいけなのを承知でつけたのかも知れない。人にそれと知られるのがいやだからか。

南 同右。補足すると、玄人筋の女性か。

多田 同右。

川柳塔柳箋

一冊 二一 百 円

送料 二 百 四 十 円

江戸川柳富籤志

(4)

阿達 義雄

(五) いろは茶屋と富

いろは茶屋は感応寺門前に軒を連ねていた娼家であった。いわゆる岡場所の一つで、谷中茶屋町の私娼窟の一つで、谷中感応寺の表門前にあった。

『寛天見聞記』の天保頃の記事に、「爰は今は天王寺といふも、前は感応寺といふ日蓮宗也。門前に昔よりいろは茶屋とて、五六軒の娼家あり。今は盛りにして家数も増し、娼婦の価は五六なり云々」とある。

右に価は五六なりとあるが、之は誤りで、量六百文、夜四百文の四六見世なのである。

此処は他の岡場所と趣が異なり、町人や武士よりも、僧侶を客として歓迎した。

江戸時代には谷中附近に寺院が九十余个寺もあり、又一方には東叡山の三十六坊を控えていたのであった。

梅本塵山氏は『古川柳研究』第一巻第五号に、いろは茶屋の起源に就いて、「谷中のいろは茶屋の濫觴は不明であるが、最初は感応寺表門前町にあった水茶屋が、此の寺に富籤が興行される事となり、此処に諸人が群集するを見て、茶屋に私娼を置くようになったのであらう」と述べておられる。

いろは茶屋が感応寺の門前町であったことは、次の句によっても知られるであらう。

もう突くか見て来いといふいろは茶屋

(明四・宮4)

富の札買ってとねだるいろは茶屋

(安永)

いろは茶屋客をねだつて富を付け

(初篇・27)

いろはの睡言当つたらほんにかへ

(五四・25)

——富が当たつたら、何か素晴らしい物を買

つてやるか、身受けでもしてやる約束でもして、喜ばせているのであらう。

中には当てにしていた富にはずれて、やけのやん八になって、いろは茶屋に上る者もあるが、一の富でなく花くじでも気分を良くして、いろは茶屋で遊ぶ者もあり、また茶屋でもそれを待ち構えているのであった。

一の富や突留のように大金が当るのでなく両袖と言って当り番号の左右の番号、又、袖と言って両袖の左右の番号、印違と言って、他の部の同番号に若干の金を呉れるものがある。

これ等は総称して「花」と言われていた。

いろは茶屋こう腹まぎれあがるとこ

(明六・智4)

富の花ちりぬるを待ついろは茶屋

(九二・11)

花くじに出るとそのまゝ、いろは茶屋

(宝一三・札3)

感応寺花をとりては身にならず

(五六・29)

要するに、いろは茶屋では人々が花くじをとることを喜んでいることにならう。

しつかりと握つて通るいろは茶屋

(宝一三・義一)

この句の前句を調べてみると、「こころよい

事くゝとあるから、富に当って受取った金を懐に入れ、しっかり握ったまま、いろは茶屋の前は素通りしたというのであろう。尤も富くじに当った金を受取るのは翌日である。しっかりと握って通るいろは茶屋

(宝一三・義一)

いろは茶屋あたわぬ福をいゝのとこ

(明和六・鶴三)

——万が一にも当らぬ一の富や突留の福を祈る。

客の年けんとくにするいろは茶屋

(宝一三・札5)

いろは茶屋の女達が、客の年と富札の番号に何とか縁起をつけて考えること。例えば客の年が二十四歳だとすると、富札の番号も富士(二四)なら良い前兆として喜ぶこと。けんとは見徳で前托、縁起である。

谷中道にこりにこりと十九日(五七・20)

『再校江戸砂子』巻二に感應寺に就ては、元禄年中天台宗に改る。本堂毘沙門天、毎月十八日富執行あり」と記されている。したがって、右の句は本クジに当りにこりくゝと翌日金を受け取りに行くのであろう。但し、次の句は富執行の日に漸く富の札が売れ切れることとなるから、思い違いの句ではあるまいか。

十九勿ち売れ切れる感應寺 (五九・34)

最後に参考のために江戸時代の富札を掲げておこう。これ等の写真は実物の二分の一で

ある。

富 札

各々実物の二分の一



(江戸)杉の森稲荷

(京都御室)

(大阪四天王寺)



黒川紫香選

浜田市 中尾 まゆみ

尼崎市 児玉 歌子

竜宮へ夢かたむけて乙女かな
優しさを楯に階段ふみしめる
句でつなぐ軽い鎖をはなすまい
杭いっぽんゆるめてからのラブレター
接点を信じて堰を切ってみる

佐賀県 寺 中 三枝子

小骨一本抜かれて風と去った君
加速つく恋が瞳の艶にでる
長電話にパントマイムで夫が招ぶ
飾り棚買って今度は欲しい壺
オマエのため楯になるよと言って呉れ

倉敷市 田 中 好 啓

敦煌の夢が覚めない兵馬俑
不孝者が帰ってこない屋根低し
赦すべきか否かに乳房戸惑えり
いつの日か山の仲間はきつと逢う
茄子漬けに四五本釘が要るそうな

発つ前の仕草女で揺れている
和解した顔が並んで夜が白む
蔑んだ言葉を仕舞いながら聞く
腹立てて居るのが読めるタバコの火
おしゃべりが何時もどこかで種を蒔く

熊本市 宇 野 昭 代

行列のうしろはみんなお人好し
だまされてひとつ利口になりました
定位置で父の威厳をとり戻す
まだ謎があつて夫婦の面白し
腹癒せに割った茶碗が惜しくなる

富山市 舟 渡 杏 花

笑うより泣く横顔に魅せられる
油断した影のシッポを掴まれる
一匹となつて荒野の長い影
人生という絵に埋めておく大志
補聴器の中まで飛んでくる吹き矢

熊本県 大川 幸子

どことなく空似の姿追っている
行水の風情は知らぬ子のシヤワー
人生を知り尽くして古靴
レントゲン写りましたか恋の胸
のんびりと餌待つ蜘蛛のハンモック

高槻市 笠 嶋 恵美子

殺されたわけが蜂にはわからない
方便の嘘ほとぼりのさめるまで
泣きごとを言えば九官鳥啞う
乳臭き夏のいちじく少年期
父母を見舞う炎天陰も無し

八尾市 高 杉 千 歩

子の城へ小石ひとつを積みに行く
筋道を通し済まぬとも思い
肩の荷の七分降ろして隙間風
正直に描けば手配の顔に似る
吾亦紅むかし話を聞きながら

名古屋市 藤 井 高 子

昼ざかりひらりと雲に乗ってみる
王様の手品に拍手してあげる
ふるさとの地図が枕をはなれない
蹴散らして小石の意地を聞きもらす
目の黒いうちに書くことたとある

広島市 流 奈 美 子

亡き父母と語りやさしい風になる

無器用な白歯で世辞がこなれない

方言を抱く故郷の屋根温し
自画像が西陽の中で褪せている
佇ちつくす迷路で亡母の鈴の音

静岡市 沢 田 き ん

すべらせた口の災い戻せない
今年又踊る浴衣を出しておく
打ち明けてやっとなが晴れてくる
大声が筒抜けになる夏の窓
自分史を他人になつて読み返す

鳥取市 小 谷 美 っ 千

サラダを盛ると涼しい風に逢えそうな
生きている金魚に今朝の餌すこし
渡された火種を消さぬ消しはせぬ
少年よ翔べ七彩の風の中
標的に向けスマッシュを決めている

今治市 野 村 京 子

しのぶ夜は胸に痛みの小糠雨
ジャスミンの香り画廊に少女の絵
あきらめの涙にしたくないピエロ
無位無冠白いエブロン母なりて
髪を梳く掌から少女に開く花

長岡京市 木 本 如 洲

石垣を積んで浮世に遠くいる
共感はそのが妥協に距離を置く
空席のシルバースーツに秋を病む

龍安寺のしぐれに石は語り出す
降る雨や藪の水車の音も初夏

米子市 新 正 子

立ち寄ってぬくもり捜す港町
背へ切り火海へ男を送り出す
野バラ咲く垣根のぞいて見たくなる
父母を泣かせぬ為に岸にいる
海鳴りを耳を澄まして聞く金魚

大阪市 上 田 柳 影

入歯外して百面相が出来上る
おばさんと呼ばれて歳を考える
重障者の目の涼しさに救われる
ご予算の都合で二度の斬られ役
瀬戸大橋別れ文句が言い出せぬ

尼崎市 森 安 夢之助

だんだんとパートの化粧派手になり
新調が出来て外出したくなり
定退をした靴あくびばかりする
それなりに景色が動く汽車の窓
野仏と二人で濡れる俄雨

静岡市 浅 子 まつゑ

逢いたいと言う追伸を抱きしめる
本音さえ吐けぬ女の胸の内
駅弁をたまには食べたくなる私
孫達と背くらべする老いの坂
夏盛り畑ますますバラエティ

久留米市 鶴 久 百万両

挙式日も決め真っ白に洗うシヤツ
わがままな俺だが妻よ子よ許せ
好きなひとのためならいくさ負けられぬ
洗濯は妻より俺が上手だよ
ウロコ一枚剥けて古参の愚を恥じる

静岡市 片 平 静 代

健康で薬の知識なくて生き
騙されてみたくて酒を呑んでみる
目も耳も役には立たず口達者
混浴という姦しい露天風呂
不意の客あわてた顔を覗かれる

和歌山市 田 中 輝 子

夾竹桃へ何の不足もない暑さ
仕事辞めたらなんて優しい母思い
だんだんに癒える疵あり花の数
それなりの力量なれど山椒の実
しまったと思う約束してしまふ

熊本県 高 野 宵 草

デパートでほとんど空になったバス
妻が居ぬ夕餉ゆっくり咀嚼する
早起きをしようと前夜思うだけ
水撒けばくちなし甘い香をくれる
肩衣を脱ぐ鈍行が旅の味

旭川市 朝 倉 大 柏

歳月の垢年輪を太らせる

帳尻を合わす母の手借りられる
蹟いてそれから視野が広くなり
まあ飲んでからにしようよその話
公用で話すとは愛想ない女

藤井寺市 高田 美代子

向うにはいい事がある丸木橋
小銭では済まない義理がたんとある
コーヒーが好きで珈琲屋でバイト
もうひとりの私に何時も叱られる

吹田市 井上 照子

針をのむ覚悟で逆へ走りだす
風便り抱きしめている影ひとつ
入浴の老母のシャワー若い音
タネ切れの料理へ思わぬ寿司とどく

尼崎市 野瀬 昌子

旅に出た夫の歩みを地図で見る
糞虫のゆらりと動く気の長さ
逃げられた男が唄う子守唄
石鹼を削って母のシャボン玉

出雲市 金村 青湖

姑もまだ女嬉しい紅を引き
老い二人かばい合つての梅雨のお茶
観光の水車が梅雨で目を覚ます
嘘一つかくすえくばに宿る露

京都市 木村 たけし

長生きの父をかこみて茶の間の灯

しあわせへ振りむくことがない二人
看護婦に起して貰う三分粥
決め球は持たぬ男の旅かばん

静岡県 蘭田 漢 杏

方言はふる里からの贈りもの
あれこれと花の名を聞く無職かな
連れ添うて貧乏神と言われてる
信号の赤で追いつく老いの足

西宮市 松本 一郎

自問自答何時も安易に妥協する
出不精の妻を誘った風五月
ちよっぴりとうしろめたさのあるデート
挨拶の言葉をさがす咳ばらい

岐阜市 渡辺 杏村

運動会隣の夫人おんぶする
切なさをわかつてくれたかりん糖
一人にはさせておけない新任地
紅葉に少し早いが露天風呂

東予市 小山 悠 泉

考えを直すと虹が見えてくる
気楽さが取得次男に嫁がせる
頑固さがちよっぴり折れて来た白髪
知恵貸してくれと上手に借りられる

尼崎市 山田 保 蔵

カネですむ話ついたが金がない
嫁さんにクリーム貰い塗ってみる

肩書が名刺の裏にも書いてある
姑を怒らす僅かな塩かげん

鳥取県 西浦小鹿

南極の氷で酒を飲むロマン
自分だけの花をみつめて生きてゆく
うっかりの好きなかあさん忙しい
縁台でスイカの種を数えてた

和歌山市 堀畑靖子

すだれ吊るわが家の夏のプロローグ
ポーナスは出ぬと銀行員に言う
あきらめの早さ救いになっている
茶目っ気が若さ保っている秘訣

寝屋川市 太田藍子

母さんが怒り出したら止まらない
虫干しの着物に母を思い出し
家中の傘が並んだ雨上り
風鈴が一人住いの身に浸みる

岡山市 松原鏡水

核心をつけば失うものばかり
風船の中はやさしい母の息
シャボン玉ふんわり空が広がる
百仏に点した百の灯が揺れる

尼崎市 鈴木良征

傷ついた桃とは知らず値踏みする
シャワー浴びる姿態に油断せぬ事だ
自画像の自信過剰に泣かされる

地獄耳がときどき怖い噂する

尼崎市の場 十四郎

愚痴聞いて母は笑ってお茶を出す
砂吐いた蛤明日を考えぬ
走る窓見送る里の母も古い
言い訳の嘘を聞いている金魚鉢

米子市 足立由美子

どしゃぶりが止めばスキップするつもり
いい話胃袋かるく軽くする
島に骨うめるつもりで住んでいる
海ばかり見つけて島は生きている

熊本市 黒田緑

この空に核許すまじ茜雲
自分にもある欠点をこきおろし
老境を無用の用で遊ばされ
激辛の後味が胃に収まらず

愛媛県 石手武

四季のある田舎に住んで居る自慢
神経の疲れる人と同じ席
落書きの傘に並んだ人と会う
気だるげにサンダルが行く夏の午後

西宮市 秋元てる

何の事ない裏話枝葉つけ
電話ベルとっくりセーター脱ぎにくし
はったりが頭を越える位置保つ
おばあちゃん力貸してと金のこと

尼崎市 吉 永 伊三郎

父の日の父は句会へ追いやられ

無人駅広くて白い午後影

逃げられた夏の思い出昆虫記

水枕ゆうべの美女は幻か

岡山県 清水 悠貴女

冷凍魚海の深さは語るまい

この歳でノラにもなれず歯を磨く

人生の表裏がよめぬ今日のウツ

こだわりが解けぬ白い日記帳

寝屋川市 宮崎 菜月

安らぎは傘の雨切る音をきく

父子だけの閑けさ青い風通る

満天の星に男科理の品揃い

竹藪のなびけば見ゆる父の墓

出雲市 金森 知恵子

不安定隠すチョビひげたくわえる

草いきれムンムン夏のエネルギー

青春を飾らなかつた彩を恋う

茴香の気を引いてみる金糸梅

酒田市 永沢 裕子

三文の徳で生き方少し変え

そこそこのくらして今日も幕を閉じ

鷹揚な人多過ぎるゴミの山

後少し生きるつもり家具を買い

和歌山市 山口 三千子

賛否両論そんな行事の役にされ

井勘定だからはらはらさせられる

子に大きく越され屁理屈こねはじめ

恙無く旅終えほっとする吾が家

和歌山県 森 三枝子

新築の報告をする墓まいり

弁当の色が淋しいママの風邪

野仏の顔半分は陽が当り

さい銭の小銭底つく観光地

大阪市 山田 妙子

アメリカ、カナダの旅(二句)

カメラからあふれ出そうカナダです

地球を半分廻ったそこも春

真っ白い嘘なら神も許すだろう

悲しみは顔に出せない靴の底

相生市 中塚 礎石

本当のことが聞きたい耳掃除

地下鉄に傘を忘れた倦怠期

運がない手相を洗って湯につかり

お互いに時効待ってる夫婦仲

熊本県 岩切 康子

玄関の犬がにらんだ留守模様

言わんでも分るだろうと夫叱る

戦争の話題になつたら泣けてくる

ほととぎす逢いに見たのに見あたらず

伊丹市 小熊 江美

逢える日はスリッパの音はしやいでる
一徹な父に意外な裏話
塾の子の鞆に夜食も入れてやる
教科書のような答えは聞きあきた

鳥取県 山根 八重

立葵上まで咲いて梅雨あがる
雨よ降れ悪い噂を消すように
虹の橋渡り極楽行けそうなの
苦労したことは言わない片えくぼ

滋賀県 安田 志津

種袋の大輪のはずヒソと咲き
七夕や逢えない人と逢わぬ人
目くばせして他人行儀に孫がゆく
一病を得て生かされるありがたさ

京都市 小林 英子

睦まじく余生を刻む万歩計
熱烈にラブコールです野鳩から
お馴染の顔おとなりに京の床
同じ事くり返し言う母卒寿

静岡市 柳 沢 たま

診察は五分で薬は七日分
子を叱る言葉につまる反抗期
お土産を貰って直ぐに値踏みする
タクシーは赤信号でメモを取る

羽曳野市 吉川 寿美

ほろほろと愛を煮こぼす片手鍋

限界を堪えておんなのしたたかに
ポケットベルに謀叛おこしているコーヒー
もう鳴らぬ鈴がわたしの胸底に

枚方市 森本 節子

悠久の昔とつながる飛鳥台
かたつむり亀と手合せしてみたい
車椅子いたましく拝す皇后様
万歩計買物とみに多くなり

尼崎市 尾宮 弘治

後を押す妻も乗せたい車椅子
松葉杖そつと外して見る廊下
猿回し集めた金を猿に見せ
脇役を忘れ喝采浴びたがる

尼崎市 明壁 敏之

誘われた方が大きな鯛を釣る
肩ぐるました子に夢をかけている
夕焼の砂丘私の影を追う
縁日にいつもの店でうどん食う

弘前市 小寺 華峰

迷惑をかけて隣とお付き合い
七夕のねぶたが夜に燃えて夏
ライバルでいるから酒も敗けられぬ
長男に押さえ込みされ起きる朝

静岡市 久保 きぬ

近道を覚えて遅刻多くなり
この先を考えている万歩計

アルバイト蝶ネクタイがよく似合う
学歴で人柄までは見抜けない

岡山県 後安 江山

玉葱にジャガ芋胡瓜達者です

百歳の母を労わる老夫婦

流行でなくても好きな服を着る

恋知って少女は淡い紅を引く

貝塚市 池田 寿美子

Tシャツのマークがファイトを盛上げる

冷や奴日曜の昼と決めている

始発駅グループの顔が動き出す

風林火山いずれゆつくり訪ねよう

岡山県 千原 理恵

大文字の焼け終る頃プロポーズ

咳ひとつしない会議で舟を漕ぐ

ホーホー螢私は辛い水が好き

嘘八百罷り通ったネオン街

大阪市 亀井 円女

平和が好きでいつも流れの外に居る

雑草にも花を下さる神の愛

たんぼの私語につかまる急ぎ足

自分史に少女のような夢の跡

静岡市 杉山 やす

アンテナが屋根で聞き耳立てている

神様の前では嘘が言えません

欲の面荷物の重さ感じない
雨上り植木にもある息遣い

静岡市 安本 孝平

女房も時には拗ねる演出家

末席で自己主張する影法師

出る幕はまだある仮面外せない

ぼけ気味の父と気が合う鳩時計

静岡市 三浦 つね

味噌汁の冷めぬ距離にいて平和

難しい話はよそう久しぶり

行儀よく帽子揃えた葱坊主

鼻唄で一つ覚えの目玉焼

唐津市 野田 旭恒

熱帯夜疲れ過ぎたかよく眠り

汗をかきつつファッションの秋を見る

ポケットベル大事な時に電池切れ

負けて勝つコツを覚えた古稀の貌

大阪狭山市 桜井 莊次

待ちぼうけなくさめている花時計

ちぐはぐな話の弾む老いの耳

ポケットのマッチ珈琲の旨い店

島根県 加本 義良

それからの話をするも夫婦なり

横書きに馴染み切れない老眼鏡

よく見ればルール守らぬ蟻も居る

鳥取県 田村 千絵
(高)

制服を着ると素直に人を見る

海鳴りの聞える村に住んでいる

赤ペンの先生花の文字を書き

和歌山市 田中 みね

以心伝心やっぱりポストにある手紙

心の支え失くし仏間に籠もる日々

噂より信じてあげる好きなのひと

和歌山市 森 茜

指先までしゃっちょこばって歯石とる

まちがって恋文を読む老眼鏡

まん丸く脱いだまんまの試着室

鳥取県 太田 幸枝

家宝の顔して古時計ぶらさがり

釣り場までポケットベルが従ってくる

人間らしく生きようと過疎にて生活

兵庫県 東浦 砥代

倅せを物干竿に白く干す

逢いに出るときの大空青かった

姿見の後ろに溜っている未練

西宮市 上 嶋 ふさ子

くつろいでメロンむいてる雨の午後

台所隙を見せない母の城

ころころと隙間に落ちた五円玉

京都市 森川 春子

病後なりせめて口紅念を入れ

自動ドア体重気にして強く踏み

祭りの日早退きをした記憶あり

高槻市 芦田 静江

変形ファッション老いの製図が悔ませる

街角賛歌老いの一人を和ませる

酒さげた友を迎える四畳半

広島県 森川 抜智

時たまに阿呆なことを言う賢明さ

本に載る私の活字が恥ずかしい

勘違いしてはならない手を握り

大阪市 吐田 純子

母となる夢へ一途な毛糸針

七夕へ少女の夢はとめどなく

夢ばかり追いつづけてる影法師

川西市 野村 静雄

友達がいるから医者へ行ってくる

寒い方がよいと真夏の立話

切られ役目立つ工夫をして切られ

静岡市 中川 みつ

焦げている鍋が知らせる長電話

犬と散歩出来る私の平和な日

老眼鏡掛けて正札確かめる

静岡市 大石 たき

亡き姑に供える好きな豆ごはん

毎日がプラン通りにならぬもの
何となく曾孫の電話待っている

岡山市 中 嶋 千恵子

歓声をあげて園児の水しぶき
台風の日となる孫も早や五歳
雑草のように生きたい時もある

茨木市 藤 井 正 雄

上役は男の道を通す顔
ご無沙汰がお珍しいと迎えられ
手初めは公園を掃くボランティア

兵庫県 森 脇 和 子

孫が来て子が来て涙もろくなる
肩を抱くロマンの好きなおぼろ月
旅が好き地図を真赤に塗り替える

寝屋川市 井 上 すみれ

組板のくぼみ三代恙なし
今日も又迷いの中の般若経
だんまりの父茶碗たたいて軍歌つづく

大阪市 山 北 三三三

外国の猫も日本でよく眠り
急ぐから廻ろう機雷が伏せてある
恐妻も孫にやさしい電話口

兵庫県 奥 野 テ ル

平凡な暮しでたくさん友がいる
紫の袂紗うれしい使者に立つ

朝一番蛇口をひねる母の音

熊本市 鶴 田 謹 爾

句会終え外はサンサン夏陽降る
釣る人と見ている人と湖に溶け
マナーなき人は減らないゴミの山

和歌山市 丸 岩 晏

残照に染まり歩幅の合う二人
欲しい花いつも流れの向う側
胸ばかり見とれて話聞いていず

豊中市 玉 井 房 子

赤烏帽子洋画が好きになりました
スリ痴漢仕事はじめは映画館
同病と思われたらし聞かされる

岡山市 土 居 みさえ

嫁がせてポツカリ穴のあく日記
フルムーン空飛ぶ旅を娘がくれる
細い紐つなぎつないで夫婦坂

豊中市 三 宅 つえ子

七夕に願うことなし六十歳
微笑を仁王にかえず車椅子
森の中を迷うて歩いてばかり

尼崎市 中 澤 向 西

人並みに走る我が子に拍手する
飾らないあれも年頃美しい
押し花に秘めた昔を思い出す

鳥取県 西川 和子

降っても照ってもミシンと暮す八時間

自動ドア哀しいまでに無口だな

赤とんぼジョギングの背について来る

鳥取市 松本 伊都子

本を読む暇は出来たが視力落ち

母の日を老母と並んで祝われる

親と子がばったり逢った喫茶店

堺市 神原 文

焼き芋がこんなにうまい散歩道

カンナ道静かに炎えている私

前に行く杖つく人に歩をゆるめ

今治市 渡邊 伊津志

アメンボのもてる魅力は長い脚

拾っては呉れない愚痴が墓参り

ジーパンで行けば宝石恐くない

羽曳野市 福田 満洲子

休暇とれぬ夫ありがたくうらめしく

立腹の兆しを見せる咳払い

体調の良さかくすりを飲み忘れ

奈良県 横井 都姫子

枝豆の緑に運ぶ中ジョッキ

お見舞いの花の名前を問うベッド

大胆にすいか切ってる子沢山

鳥取県 乾 隆風

おチンチンぶらさげて出る関の声
どたん場を煎じ薬にして生活
老人ホームに孫の手が置いてある

弘前市 登嶋 健治

おたがいにお国訛りのつりの宿

山上湖うぐいす三羽居るらしく

たんぼぼにポツンと添われ無縁塚

鳥取市 森山 豊子

ピーマンとトマトを嫌う舌を持ち

ランドセルに大物の芽がつまつてる

大物が出てふる里が息を吹く

岡山県 牧野 秀香

自販機は言葉無用で用が足り

花鉄迷わず一輪バラの花

カーテンが軽く泳いで蟬の声

岡山県 富坂 志重

気休めに私の一步介添える

古里を捨てたか目高の群れ見えす

中心の父さん少し押しされ気味

大和高田市 寺脇 三倉

しきたりを守る袱紗に家の紋

無駄足を運んで義理を置いてくる

過ちの事実認めた目がきれい

岡山県 江口 有一朗

野仏に頼すり寄せて野菊立つ

筆先が紙に食い入る息づかい
暁へ確か命のある目覚め

香川県 上藤多織

アメリカ西海岸観光

日本人ばかりに出会うホテル内
ステキーに隠れ梅干舐めている
アメリカに買いたいものがない不幸

鳥取県 黒田くに子

ひっそりと根強く生きる母子草
土地の値が上がるニュースへ耳が立ち
逆立ちへチャレンジしたい車椅子

京都市 渡辺圭坊

夏の花色とりどりに咲き競う
長雨にうなだれて咲く雪の下
何思い咲いたか古代の蓮の寺

久留米市 中垣米之

宝くじ抽籤までによく喋る
気に食わぬ汚れもあるう洗濯機
毎日が充電というビール飲む

和歌山市 前田美子

どの顔も頬笑みかけてる水子像
どしゃぶりに猫も濡れてる軒下で
とんでいる積りが足場ゆれている

堺市 近藤豊子

手から先に飛びこんで行く母の胸

眼の高さちようど同じの犬を撫で
顔よりも大きな毬を離さない

藤井寺市 楠昭子

改築でなじめぬ店にしてしまい
コンクリになれずみどりへ戻る母
構えると蠅が私を弄ぶ

鳥取県 木下芙葉

その内に長寿の税金とられそう
父の後継ぐという子に望みもち
皆んないい顔をして聞いている法話

竹原市 古田比呂子

嫁さんをもらって弟よくしゃべり
人知れず芽を出しているこぼれ種
機関銃のごとくに母は子を叱り

寝屋川市 北岡波留吉

化粧落し今日の戦さはやつとすむ
どん底へ落ちる覚悟で好きと言う
名物の由来を聞いて箸をつけ

河内長野市 大西文次

兵隊の位で言えば直ぐ解る
財テクの本嫁はんに頼まれる
見てくれる者もないのに床の軸

大阪市 堀口欣一

日本は広いと思う初夏の旅
天ぷらそばみんな働く顔ばかり

院長の部屋で見つけた柳多留

静岡市 小幡芳男

銀行でリッチな空気吸って来る

余生とはいえども命惜しくなり

定年を迎えたおやじに万歳

八尾市 椎尾公子

鴨川の流れにそうて小さい旅

うしろから目かくしの手はシャネルの5

川の字に寝られる部屋で二人寝る

青森県 福士トキ

巻貝の中で寝ている反抗期

お使いも花のきれいな道にする

梅雨寒の夜の布団が離せない

鳥取市 山田草人

百態を描き通して筆ちびる

水かさがふえて流れてみたくなる

化けて出てやると死にそうもない顔

十和田市 阿部進

子宝湯年寄りだけで混んで居る

逢ってきた眼の輝きはかくせない

脚線美見事に写す水鏡

大阪市 島路太郎

方丈の留守たのまれて写経する

ねらわれているあなたにも隙がある

ひまわりがぐるりまわって日が暮れる

病名はきめて診察待っている

五つ玉の五つ目に似て俺がいる

眠れない眠れないとてする昼寝

新潟県 高野不二

事故ニュース祖母は留守番まかされる

袷抜いて上布涼やか夏まつり

交戦国被爆日本を見てほしい

尼崎市 佐藤美代子

古里よ遠くにありて近い橋

ホームパーティーアメリカ式に友集い

袋だたきにされても我慢しろと言う

高槻市 木下越子

パイプも経もほぐして祖母にあり

プライドが本当の私を押しつける

偏差値の輪切りの下の子がやさし

岸和田市 三輪通彦

還暦になってあちこち綻びる

ぐれた子が今いちばんの親しい

週刊誌読んで雑学身につける

佐賀県 山口松枝

そう簡単に気安め言うて下さるな

体力の限界を知る床の中

人魂か闇夜に丸い光飛ぶ

奈良県 田中紀美代

湯あがりの夫があちこち追いやられ
喜寿祝う姑にマニキュア塗ってあげ
休憩の時間が好きでゆくパート

大阪市 榊 本 落 児

不器用な男で真結びさえ出来ぬ
竹とんぼやっぱり青い空が好き
事故現場お守り袋が落ちている

八戸市 島 田 昭 治

論語には金だ金だと書いてない
死ぬときは笑っていくよに鍛えねば
初孫の勘のいいとこ僕に似る

和歌山県 岩 崎 瑞 穂

昼下り長閑に猫と昼寝する
ナイトーへ妻も熱あげ夜更ける
思惑の杯回る無礼講

鳥取県 鈴 木 芙 美

裁ち切った絆無情の雨が降る
娘や孫を西瓜が待ってる夏休み
甘言に釣られてなるか鯛の意地

鳥取県 西 村 黙 光

モルモット替わりに新薬試供品
新しい明日を信じた深い皺
新しいページへいつもでかい虹

愛媛県 八 塚 三五島

二、三日心のなごむ無精髭

給食でサラダを食べる子に育ち
道草の無駄でなかった回り椅子

吹田市 西 岡 豊

妥協する気持はないと反り返る
親睦の輪に唄があり踊りあり
見栄はった後で財布に叱られる

流山市 神 田 治

倦怠期あれから妻の主導権
蚊取線香が好きで子供に嫌われる
和を以て貴しとする縄のれん

大阪市 松 永 すすむ

大広間 畳の縁がずうっとのび
プラットの別れがづらいから行かぬ
内緒事小さくたたんで呑みこんだ

静岡市 西 村 千 代

階段でつまずき庭で又転び
くじ運が強いが意志の弱い人
七人目名前をとめと付けました

奈良市 米 田 恭 昌

新興地祭囃子を風に聞く
病身の父支えてる細い腕
物価高手ばかり見ても始まらぬ

鳥取県 横 山 房 子

笹舟で足りる女の願いごと
派手を着る心がおんな若くする

鳥取県 横 山 房 子

俸せに見えてた隣今朝の音

大阪市 稲本 凡子

欲伏せてポックリ寺へ従いてゆき

練習不足自信ないから手が震え

寝屋川市 河合 時弘

耐えている言葉の刺が胃にささる

昼下がりに買物籠の立ち話

血統書に済まぬが犬の名が嫌い

唐津市 浜本 治幸

古い早し成すべき事の貴重さよ

コメントはすまい頭を下げておく

梅雨晴れ間暑さに負けて昼寝する

雑草の意地コンクリの裂け目から

睡蓮の上で蛙はさしむかい

伽藍にも浮世の風が忍び寄る

政治家の秘書の仕事は金集め

出雲市 岸桂子

あじさいの悩みを消した通り雨

どこ迄もどこ迄も翔べ竹トンボ

美しく老えとはむずかしい助言

美しく老えとはむずかしい助言

すこしリッチに華燭のフルコース

子を叱る言葉を選ぶ親となり

目覚めよい朝はコーヒーに株式欄

朝礼をすませば戦士の顔となり

寝て起きて一人の影を踊らせる

鳥取県 伊吹 富恵

寝屋川市 河合 時弘

コッコツと夜半に女の靴の音

コメントはすまい頭を下げておく

デパートの地階グルメを山盛りに

柿若葉友の便りはまだ来ない

悠々と一人占めする過疎のバス

五百羅漢の中の一人が亡父に似て

今日もまた昼食抜きにしたノルマ

悪びれず幸福駅の切符買う

御免ねとリンゴの口からほとばしる

塾という別のかばんが待っている

自分史に苦虫を噛む一ページ

真実に生きスランプに突き当たる

ハンドバッグの中に女が燃えている

雨三日降らねば雨を恋しがり

楽しみをひとつ貰うて生きのびる

岡山県 後安 ふさえ

岡山県 松本 聖子

岡山県 泉佐野市 真崎 浪速子

兵庫県 酒井 清子

岡山県 松本 元江

岡山県 松本 元江

岡山県 松本 元江

岡山県 松本 元江

岡山県 松本 元江

岡山県 松本 元江

岡山県 松本 元江

岡山県 松本 元江

岡山県 松本 元江

岡山県 松本 元江

岡山県 松本 元江

岡山県 松本 元江

岡山県 松本 元江

岡山県 松本 元江

岡山県 松本 元江

岡山県 松本 元江

岡山県 松本 元江

岡山県 松本 元江

岡山県 松本 元江

岡山県 松本 元江

岡山県 松本 元江

岡山県 松本 元江

終章はみんな許して天へ翔ぶ
孫が来て老いのリズムを狂わせる
米子市 大田 みさと

夕焼けの浜辺で解放感に満ち
チャンネルへ不満な妻が目を外らせ
吹田市 大沢 宙々

乾杯のグラスはや々と干せる下戸
財テクより余生大事の夫婦旅
羽曳野市 麻野 幽玄

あじさいの風へ布団は叩かずに
つゆ空にとぼけてみたらと鳩が言う
八尾市 向井 しづ子

肩書きが多いとボケを防げます
一言が言えた胸中日本晴れ
鳴門市 八木 芳水

何の服で行こうと迷うクラス会
阿呆にも馬鹿にもなつて平和です
岡山県 杉本 伊久栄

ほころびを縫うた心が軽くなり
集まれば農家に嫁のない話
兵庫県 倉垣 恵美

土俵では案外もういあんこ型
馬車馬のように走っても運つかず
大阪市 神保 拓生

鳥根県 菅田 かつ子

自転車で転んだ痛さは後まわし
弁当に今日も場所とる玉子焼き
佐賀市 古川 一徳

タテマエで逃げる主張にある卑怯
消費拡大グルメの旅は家族連れ
佐賀市 江口 万亀子

涼風へ蓮の葉ころぶ銀の露
老化現象かな古い話をくり返す
岡山県 大石 あすなろ

半端もの少々難あり百円市
難関を通った顔にある自信
岡山県 福原 悦子

転勤へ子の単身が気にかかる
洗うても土の香匂う母の腕
静岡県 三井 三津子

解禁日鮎より竿が多過ぎる
双生児かわりばんこに祖母の肩
倉吉市 青砥 菊枝

不器用で舌は益々よく回り
逃げる逃げるレポーター女がやって来る
唐津市 入江 喜久夫

失恋をして佐用姫の心知り
亡妻に似た日傘の女と摺れ違ふ
八尾市 片上 英一

さざんかの宿で天下の撫をかこつ

カスミ草八方美人でいたいのか

島根県 星野昌子

古時計親子二代へ時を打つ

話はずんで決まらぬままに婦人会

島根県 児玉幸子

暑かろうカンナの花の炎えている

夕涼み夜店で西瓜うまそうに

静岡県 青柳金吾

勉強は中位なり俺に似る

能のない身軽い余生もてあまし

岡山県 土居ひでの

五時からの女の紐がたぐられず

咳ひとつ流れを変えるテクニツク

出雲市 高橋きよし

馴れもせぬサンダル履いて痛む足

逢いたくて母は施設へ廻り道

島根県 小田川昭子

雨晴れて長持ち唄で出す調度(娘の結婚)

嫁がせてふたりになった夜の膳

熊本県 増田一乗

うちの嫁どこかと探す踊りの輪

巧まない絵入りの手紙で近況知り

奈良市 井上大

アジサイの花影にある水子仏

番組に雨の場合のないドーム

年老いて野鳥囀り聞く暮し

この頃は猫までママに甘えてる

京都市 山脇正之

孫の手をひいて玩具屋さけて行く

知らぬ間に親の陰口孫得意

大阪市 平山和多留

雑草でいいさきれいな空がある

ちよっぴりと膨らむ胸はよく笑う

鳥取県 久野野草

蜂打の本意がわかる親の遺書

ラムネ瓶栓は二銭の頃の音

大阪市 川原章久

田舎バスの便利何処でも乗せてくれ

おだやかな海です世紀の橋渡る

岡山県 伏見すみれ

七夕に乙女の願い書いてある

嫁ぐ朝母の泪を背に受けて

富田林市 加藤ミツエ

あご髭の画家おつとりと京ことば

相撲部屋軒が凄い昼下り

藤井寺市 中島志洋

カルガモの移動も済んで夏がくる

水遊び無心の幼女にある笑顔

島根県 今川三津江

黒石市 相馬英三

孫までが入歯を外す真似をする
学歴は不要と叫ぶ学識者

鳥取市 武田帆雀

実力で詰碁を解いて外へ出る
生れ付き曲った意地を張る胡瓜

伊丹市 猪原石莊

門跡寺亨保嘉永と石が佇ち
ゴルフ場猫背ごっこをしてるよう

青森県 永沢招人

なけなしの相続に税が待っていた
釈明を聞くほど核燃怖くなり

豊中市 村上とく子

老いたかな真直ぐ押せぬ乳母車
ラーメンの出前が帰る外科病棟

橿原市 西本保夫

絵ハガキで安否気づかう程の仲
無意識に祈る姿が怖くなる

豊中市 小林一夫

爪赤くまた騙されている女
ぼんぼんの冗談自分だけ笑い

青森県 波ただお

一輪のバラでも部屋が香しく
友の訃報カラスが飛んで持つて来る

熊本県 立道善太郎

盆僧の白足袋かるくかけ回り

名人と同じ名前をもてあまし

藤井寺市 武部敦子

新聞の裏白ビラは孫が待つ
梅雨晴間庭師の缺リズミカル

大和郡山市 渡部トキワ

邦楽器年甲斐もなく買うてみる
老いて尚センスの良さに見とれる

静岡市 小木久子

屋根の下人さまさま暮し向き
ためらってかけた電話へ主は留守

神戸市 岩田信義

老いの目に真紅のバラは重過ぎる
淋しさを口には出さず髪を噛む

東大阪市 大平太一郎

亡き友と楽しいことのみ今も生き
名前より先ず手が先にクラス会

大阪市 平井露芳

飲んで食って八十五年に悔いはなし
ローン未だ済まぬに泥棒覗きに来

岡山市 福原辰江

矢印はいらぬ僕は僕の道
昏睡状態せめて痛いと言っとくれ

川西市 田中喜俊

北港でテトラポットに腰おろし

潮焼けで茶筌持つ手が恥ずかしい

兵庫 西脇 富美

和歌山 田中 隆積

闇に舞う螢に酔うて終い風呂

太陽へ向日葵柄の帽子買う

唐津 中村 順子

日置川の選挙結果に注目す
能力と愛は別だと悟り切る

呉市 岡田 寿美礼

今年こそ体よけれと梅漬ける

母心切々綴るペンの跡

静岡 丹羽 定次

石仏のさわやか笑みに心和み
家の宝孫のマスコットいとし猫

泉佐野市 大工 静子

寝かせてる寝ている子の育ち

悲しみの分る男と煽てられ

高知 山崎 一求

花心今日の迷いはどんな色
喜寿過ぎて文通楽し怪我の事

大阪 平山 登代

小企業餞別という袖の下

炎天下栄転はない駐車番

島根 高橋 武衛

嫁達と思ひ遣り合う氣を捨てず
安い筈ブランド品はニセでした

岡山 平田 たけよ

さわやかに挨拶交わす登校児

無人駅人も無口で降りて行く

島根 岩田 三和

娘の電話一寸待ってとガスをとめ
昼寝する孫にうちわの風送る

豊中市 額田 明吉

いろいろな形のナスの乙な味

草をぬく指がおぼえていてくれる

寝屋川 豊福 路子

宝惠籠にミス愛染のしおらしさ
バカチョンで祭のギャルをみぎひだり

◆ジュニアの部
尼崎市 新井 朋子
(中三)

寄り道は禁じられてる浮世旅

スタミナは充分です夾竹桃

大阪 喜多 佐津乃

いつもより長い眠りにつきたくて
幽霊も怖い怖いとニュース聞く

大阪 福西 のり子
(小五)

押花の小箱も反らす土用干し

梅雨明けの宣言を待つカモメール

朝顔は朝だけ元氣さびしいな
朝顔よぐんぐんのびろ元氣よく

大阪 福西 のり子
(小五)

—水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から

西出楓楽

右を向いても、左を向いても、ストレスの種だらけの世の中。ユーモアにあふれる句に出会うと、一瞬オアシスの風に触れたように身も心も和みます。

タイミンク金のない日が雨になり

猪原 石 莊

作者のほっとした気持が、すんなり伝わってきます。上五「タイミンク」という言葉がよくきいていると思います。

落書の当字の方がおもしろい

大西 文 次

ふと目についた落書の当て字に、作者の顔が微笑みにゆるんでくる様子が、目に浮かびます。下五ではつきり心を言い尽したことが効果的です。まさか、訂正の落書をされたのではないでしょうね。

水虫よ見て居れ新薬買って来る

麻野 幽 玄

水虫を長年飼っている者が身近に居ますの

で、心境が手に取るように理解できます。水虫は時には戦友に、時には仇に、またかさぶたがテレビ見物の手の無聊を慰めてくれたりしているようです。こんな楽しい句に会うと完治薬の発明はずっと先の方がいいとも思います。

ポイ捨ての缶がつぶやくひとりの言

中嶋 千恵子

すべてを語らずに、余韻の中に多くを語らせ、うまくまとめてあります。どんな「ひとりの言」であるか、耳を澄ますまでもなくよく聞こえます。

日本たばこにお義理はないがやめなさいぞ

中垣 米 之

嫌煙権が姦しい昨今、ひとり気を吐いて居られる作者を、駄々っ子を見るように眺めています。理屈でいえば、義理がないから「やめなさいぞ」、義理があつて「やめられない」となるのでしようが、この理不尽が、なにがなんでもやめない気持を強めています。

モナリザの微笑確かめ火傷する

岩 田 信 義

まさしく男性の句。深く追及しないのが華々というものでしょうが、世の男性が等しくあこがれる火傷であることには間違いありません。作者の鼻がヒクヒクうごめいたのをしっかりと見届けました。

さて、オアシスの風に吹かれてばかりも居られません。家事の電化が進んでも、主婦は相変わらず忙しいのです。自分と同じ立場の機

微を詠んだ句は、身につまされてしまいます。

ゴミ捨てに行くのにのぞく姫鏡

宇野 昭 代

「姫鏡」の中に主婦の自負を見ました。いくつになっても、どんな時にも、作者のよつに鏡を忘れないでいたいと思います。

いちにちの避暑に汗かく旅をする

井上 照 子

出発まぎわまで家事を片付け、旅に出れば見物、買物にフル回転。帰ればまたまた家事が山積。それでも小さな旅は、主婦にとって何よりのストレス解消なのです。当人にとつてこの汗は、キラキラ輝いています。

紙皿を洗ってしまふ主婦である

新井 泰 子

「もったいない」が死語になりそうなのこの頃、この様な主婦が日本の繁栄のため寄与してきたと言つても、過言ではないでしよう。

掃除洗濯出掛けもしたい梅雨晴れ間

高田 美代子

傷つけた指に日ごろの札を言う

喜 多 佐津乃

指のけがは、台所仕事にとりわけ不自由をきたします。指のけがをうらまず、札を言うところに作者の人柄を見ました。

これ以外の秀句は川柳塔賞選者に選んでもらうことにし、今月私が「水煙抄」を楽しませていただきました。ありがとうございました。

63 年 度

路 郎 賞

川 柳 塔 賞

候補作品中間発表

自 63 年 5 月号
至 63 年 8 月号

路郎賞候補作品

正 本 水 客

考えてなお考えている振り子
家古く夫婦も古くなっている
葛の葉が嘘だ嘘だと裏返る
殺伐な活字で埋まるスポーツ紙
罰として人間の子に生れしか
二度と言いませんと幾度言うことか

高杉 鬼遊
宮口 笛生
岸本あやめ
岸本豊平次
新家 完司

西山 幸
辻 白漢子
高橋千万里
野坂 なみ

江城 修史

都倉 求芽
青戸 田鶴

平凡な暮し続くとまだ思い

肩車見せたいものは見ておらず 有働 芳仙
ポットの湯いっぱいにして友を待つ
魔法くださいカボチャ大きめなのを買う
本間満津子

野 村 太 茂 津

銃眼からのぞくと人は敵に見え 春城武庫坊
へソを見てこわい顔する人はない
二度と言いませんと幾度言うことか

谷垣 史好
西山 幸

死に神が下手で色いろ患らわせ 土居 耕花
外人のおっしやるのが腑におちる
柏手の残りひとつを妻のため
タムの村漬物石が溺れてる
短かすぎる紐を必死に結んでる
投げられた小石だいいじにとつてある

遠山 可住
牛尾 緑良
林 荒介
神夏磯典子

中原みさ子
史好

西 田 柳 宏 子

種切れの夫婦がまんが読んでいる
こっそりと逢って度胸をきめている
じゃんけんばん妻は時効にしてくれぬ
きついこと言うて女が飢えている
音無しの構えだんだん眠くなる
果てしなく女が愛を煮るところ火

福本 英子
波多野五楽庵
有働 芳仙
辻 文平

抱きしめてやったり蹴ったり猫と住む
湯豆腐の湯気で埋めたい隙間風
来世も貴方相手じゃ肩が凝る
バラ寿司の愛だんらんの灯がぬくい

寺田 裕美
岸野あやめ
吉岡 美房

小野 克枝
内芝登志代
松尾柳右子
遠山 可住
井戸を出た蛙弱気になつてくる
江口 度

頼りがいあると言われてサロンパス

古川美津枝

七味たっぷりかけて人間不信の日

嘉数兆代賀

清貧に耐えぬく父の浪花節

津守 柳伸

しあわせは妻と喧嘩の出来る日々

松本 忠三

エイエイオー畑一面のネギ坊主

宮尾あいき

生涯をB面のまま枯れてゆく

川島風云児

蟻の列陣方を信じてついてゆく

鍛原 千里

父と子の対話塩辛なめながら

森田 熊生

さからってばかり一生左利き

土居 耕花

黒川紫香

青畳 椿一輪極まれり

西口いわゑ

早よ逝かな亡夫に浮気の虫がつく

福本 英子

おまわりさんそつと口笛ふいて行く

新家 完司

小遣いをやつても貯金はばかりする

森川まさお

一年生の帽子よ小さい旅人よ

小島 蘭幸

やつと春 椿の落ちる音しきり

野坂 なみ

空調の音がすかなり美術展

奥田みつ子

満天の星にわたしを見て貰う

林 荒介

右足を病んで左がよろけだし

春城 年代

風邪ひいても後のことなど考える

本間満津子

人妻の髪はいつでも火の匂い

中原みさ子

一人となった時を考えている二人

林野 麴光

気楽とは思っていない独り者

津守 柳伸

雨三日犬もだんだん不機嫌に

内芝登志代

音痴でも唄えば孫は寝てくれる

島崎富志子

独乙語で笑う猥談かも知れぬ

波多野五楽庵

花吹雪避けて通れぬ霊柩車

若宮 武雄

職持たぬうしろ姿は隙だらけ

松下たつみ

珈琲と筆は揺れてる方がよい

小島 蘭幸

六十の浮気は色でなかりけり

板東 倫子

病窓に若草山が芽ぶく色

宮口 笛生

幾つある叙勲者たちの踏台よ

時末 一灯

本に名前書けと長男もつ言わぬ

森井 菁居

学長の式辞メモして父帰りに

仁部 四郎

ネックレスだけはサッチャーさんみたい

岸野あやめ

博学と浅学妙にうまが合い

本田恵二郎

ナメクジが塩に溶けゆく恍惚よ

谷垣 史好

足軽のルーツを今に紋所

久保 正敏

ビジネスのお面が外れなくなった

江原とおお

靖国へ二人お上をまだ信じ

大矢 十郎

川柳塔賞候補作品

小出智子

装うてまだ紫陽花に負けられぬ

流 奈美子

子は命土囊を高く積み直す

笠嶋恵美子

背景を一寸ずらして生きてみる

大川 幸子

年中無休軍手の穴から覗く指

舟渡 杏花

我が胸の中なる鬼をいとおしむ

東浦 砥代

袖口の綻び妻よ心せよ

寺中三枝子

同じこと考えて居た僕と妻

松本 一郎

空想は十六歳にこだわらぬ

田村 千絵

自画像のしみを消したら嘘になる

金森知恵子

美しいまま標本になっている

小林 一夫

稲光り師の伝言を聞きもらす

岸 桂子

薪能燃えているのは胸のうち

池田寿美子

衣食足りて我慢の本が売れている

新 正子

おでん屋の馴染互いに名は知らず

渡邊伊津志

数珠を持つ片方の手で子を叱る

蘭田 猿沓

いちにちの避暑に汗かく旅をする

井上 照子

居れば邪魔居て重宝な姑にされ

諏訪 志げ

年金を十二で割った暮らし向き

東浦 砥代

世の中をさかさまに見るナマケモノ

片上 英一

頂けるものならなんでも母の実家

山田 里子

あばら家へ健康器具のおきどころ

松本 聖子

高杉鬼遊

見返してやりたくて買う宝くじ
友だちのうしろでお辞儀して帰る

山北三三三

嬉しくも淋しくもあり無料パス
義理と見栄のせて粗品でございます

流 奈美子
平山和多留

一生を一行ほどにワサビ漬け
古呆けた時計で変な時に鳴り
オッチョコチョイに苦勞をします

吉川 寿美
岩田 三和
沢田 きん
影法師

森安夢之助
思い通りになるのも恐い狂い咲き

森 茜
高杉 千歩

ふと夜半目覚めて音のなかりけり

板尾岳人

言いつ分はわたしにもある冬毒
時々は笑って下さる弥陀如来
騙し絵の中に笑えぬ嘘がある

吉川 寿美
藤井 高子

人情の涙が好きなきらくらんぼ
王様の呉れた言葉に畏がある

宮武まつ女
山根 八重
木村たけし

墨を濃くふくませて書く愛と書く

追伸がずつしり重いしだれ梅
貧弱な喜劇に終る影法師

太田 幸枝
野村 京子

福寿草対でしぼんでゆく嫉妬
たんぼはよ母を見舞ってくれないか

舟渡 杏花
安田 志津

善人が多くて鬼がよく肥る

笠嶋恵美子
河合 時弘

流れ矢に当って消える影法師
女難の相妻に話そかやめとこか
母の日に父が包丁砥いでいる
石ひとつ投げる流れを変えたくて

渡邊伊津志
大西 文次
久保 きぬ
高田美代子

谷垣史好

蝶ふたつひらひら舞って好きと書く
ストレスを溜めております松のコブ

山根 八重

友達のお辞儀して帰る
皿の数に負けてしまった皿まわし

岩田 三和
流 奈美子

風も私も同じ轍を踏んでいる
逢ってきてまた人に逢う髪を梳く

藤井 高子
根本 実

思いきり眠ってみたいぬむり草
まな板の鯉といえども一度跳ね

土居ひでの
福島 紀一

美しいまま標本になっている
オッチョコチョイに苦勞をします

小林 一夫
影法師
森安夢之助

方言を可愛く思う恋かしら
おじさんがおじさんと呼ぶ屋台酒

新 正子

人間も布団も裏を干すがいい
栄転で机の向きが逆になる

大西 文次
新井 泰子

紙皿を洗ってしまう主婦である

河内天笑

守備範囲広い男で恐妻家
石ひとつ投げる流れを変えたくて

秋元 てる
高田美代子

自画像に省略出来ぬほくろなり
单身赴任という赤紙が来てしまふ

楠 昭子

年金を十二で割った暮らし向き
褒められて今更本音言いくらい

大西 文次
東浦 砥代
小木 久子

手も足もあつて出来ない事ばかり

松本 元江

ねじ少しゆるめなさいと春の風
隣りから貰った花に気をつかい

永田 俊子
朝倉 大柏

走っても歩いても良し夫婦道
台風の窓いっぱい木が動く

神田 治
山口 松枝

重い荷は夫が持つと決めてる
へその緒にひよっこり出会うさがしもの

宇野 昭代

善人が多くて鬼がよく肥る
恋人のように父娘で歩く古寺

上藤 多織
河合 時弘
宮田 純一

匿名子より
金一封拝受いたしました
川柳塔社

愛染帖

橘高薫風選

富田林市 藤田泰子
世に慣れてお伽噺の嘘・真
その下は見ず睡蓮の美しさ
倉敷市 田中好啓
片箆落として命ながらえり
飛行機雲帰らぬひとを憶うなり
唐津市 久保正敏
褒貶にかかわり持たぬ酒を飲む
ノーヒットノーランノーエラーのハイミス
鳥取県 土橋はるお
反省の色がまだらになっている
小便小僧が釣竿もっている
鳥取市 武田帆雀
言うなかれ問うなかれ菊五十鉢
ボロボロの鎧睨みは残してゐる
和泉市 岡井やすお
保険屋に素通りされる年になり
千年後発掘すれば放射能
青森県 相馬英三
混浴を出る時だけは身構える
借金の担保にならぬ妻の胸

静岡市 涯美弧秀
死を厭い生を懼れる古希越えて
昇る陽へ詩と音楽のある暮し
今治市 月原宵明
マネキンの指がさしてゐる海の画布
寝屋川市 堀江光子
立ち止ること許されぬ傘の波
火祭りを見たい一途の暗い道
鳥取県 新家完司
草笛の他はなんにも持つてない
姉さんの墓に草笛吹いてやる
米子市 川上より子
許す気の縄目だ力ふりしほれ
古井戸か落し穴かは決められぬ
和歌山市 山田高夫
忘れ物思い出すから憶けてない
地獄見た僕の戦後は拾いもの
茨木市 堀良江
猫人間人と思つてゐる猫と
手の温みだけで終つた彼のこと
香川県 上藤多織
競争はむなしキリンと象の首
青森市 工藤甲吉
鬼が頑張る村の入口
大阪市 小出智子
母背負う力を少し残しとく
名古屋市中 越村桔梢
夏のおんなの乾物生臭し
米子市 新正子
火の色を潜つて美しき喪服
守口市 森川まさお
反骨の人も駅へは急ぐなり
鳥取県 江原とみお
虹の橋に通せんぼうがしてあつた
米子市 八木千代
疵のある笛だ優しく吹きましよう
米子市 石垣花子
少し紐ゆるめ袋にしゃべらせる
鳥取県 土橋 螢
大地からこみあげてくる熱い息
岡山県 土居耕花
巢作りのように布団を二枚敷く
豊中市 滝北博史
たとえばなが夫婦喧嘩のもとになる
大阪市 榎本路児
暗闇の方が見やすいこともある
箕面市 椎江清芳
音痴にも一人の時の唄がある
枚方市 森本節子
六月は色を味わうさくらんぼ
熊本県 高野宵草
政治家の勲章の裏うす汚れ
広島県 森川抜智
電車賃出してうどんを食べに行き
岡山県 小林妻子
大ジョッキ髭の伸びてゐるの分る
和歌山市 神平狂虎
飛行雲ばやけてさむい夏である
北海道 府栄野香京
この郷の風より知らぬ葱坊主
和歌山市 後藤正子

小梅ころころおんなを少しだけ零す

寢屋川市

平松 かすみ

五万田宝石よりも旅選ぶ

大阪市

今西 静子

三猿を描いて父の自画自賛

岸和田市

古野 ひで

屋根瓦飛んだ私の誕生日

和歌山市

酒井 純子

子のいない夫婦が見てるおもちや箱

奈良県

横井 都姫子

遠吠えの犬よおまえも孤独だな

東京都

吉川 一郎

見下ろしてばかりで死角気がつかず

鳥取県

松 下 たつみ

骨張った妻のヒップに敷かれ居り

伊丹市

榎谷 寿馬

死にたいという瞳は生を希う瞳か

唐津市

浜本 義美

思想持たぬコマいつまでも廻ってる

西宮市

松本 一郎

羽二重よりも羽二重罌粟の花

鳥根県

小砂 白汀

死にたいという瞳は生を希う瞳か

唐津市

浜本 ちよ

左遷地の風は冷たい方がよい

和歌山市

牛尾 緑良

肝つ玉母さんと言つハイヒール

寢屋川市

岸野 あやめ

反れ弾に当る他人と決めている

今治市

越智 一水

野良犬の耳はますます尖りだす

堺市

高橋 千万里

夕焼と一緒に沈む小さい島

米子市

青戸 田鶴

日本人借りたる核の傘にいる

米子市

岡 日枝子

見事な別れ捨てられたのか捨てたのか

今治市

渡邊 伊津志

ひしと抱く手はどれだろうう千手仏

高槻市

小松 良

こだます同じ高さには妻がいる

守口市

結城 君子

シャボン玉の中に這入つてみたい僕

豊中市

三宅 つえ子

待たされる応接間には大振子

高槻市

小松 良

梅雨のあめ竜舌蘭のおこがまし

吹田市

栗谷 春子

すすり泣く声が聞こえた石地蔵

西宮市

瀬尾 六郎太

思い出し笑いも六十歳の視野

岡山県

荻野 鮫虎狼

教育費カサカサになるパート妻

千葉県

神田 治

風鐸のチリンチリンは悠久か

川西市

野村 静雄

数多く基地を抱えて平和です

大阪市

上田 かつみ

自画自賛なんとすてきなピエロなり

広島市

流 奈美子

励ました言葉通りに励まされ

大阪市

島路 太郎

シャッターチャンス孫はとうとう泣き出した

大阪市

神夏磯 典子

哀しみを知ってか鳩は夜に来る

米子市

茂理 高代

赤シャツを着て炎天を行くことに

吹田市

園田 文子

情念をかくせばゆるれる丸木橋

岡山県

山本 玉恵

好きなひと好きだと言えた事がない

伊丹市

猪原 石荘

立ちばなし雀たちから遠くいる

寢屋川市

江口 度

遠景に核の基地見ゆ蕎麦畑

弘前市

斉藤 劔

迎え火に昔むかしの話する

豊中市

辻川 慶子

帰らん方がいいよと祖母が言うてくる

和歌山市

西山 幸

夕焼けにコスモス白く白く揺れ

鳥取市

小谷 美つ千

無知なのは悪だと知った悔いしきり

寢屋川市

河合 時弘

句読点たしかめなおす昨日今日

大阪市

川原 章久

終戦忌純情だった若かった

唐津市

田口 虹汀

おたがいに触れぬ話をひとつ持ち

和歌山市

森 茜

供御米によもや減反あるまいて

島根県 堀江 正朗
恐ろしいニュース蜜柑を剥きながら

大阪府 亀井 円女
雑草にしか歌えぬ詩もあるだろう

弘前市 波多野 五楽庵
レクイエム仏法僧と泣くだろう

高槻市 笠嶋 恵美子
うぬぼれの鏡へ飛んでくる磔

堺市 井上 たかし
左遷地へ向う荷物に妻の見栄

河内長野市 植村 喜代
殺される話ばかりを聞くテレビ

堺市 神原 文
病院に通ったのしい回復期

茨木市 井上 森生
乾杯は一句の好きなママの店

唐津市 入江 喜久夫
石炭の港も佗びしがスタック

唐津市 野田 旭恒
信教の自由靖国もてあまし

奈良市 井上 大
雨傘もファッションの中シルク博

相生市 中塚 礎石
コーヒーがさめて無言があほらしい

唐津市 山口 高明
弱い者ばかりを狙う税負担

八尾市 片上 英一
自分史が出来たらあとはどうなるの

倉吉市 青砥 菊枝
紅つけぬ中国孤児の皆老けて

岡山県 松本 元江

ばあちゃんは偉いな虫の名知っている

和歌山市 桜井 千秀
白雲悠悠駆けたらどうにか勝てそう

和歌山市 丸岩 晏
黙秘権妻の戦力倍増し

和歌山市 木本 朱夏
ぬるま湯に恋の脱け殻浮いている

和歌山市 田中 みね
恋をして猛暑の中を歩く二十歳

和歌山県 三宅 保
掘り過ぎて出るにでられぬ落とし穴

和歌山市 古久保 和子
鼻ぐりを取られて困る鮎になる

名古屋 藤井 高子
やさしい声で脅迫電話かけて来る

宝塚市 丸山 よし津
投げられた矢を励ましの鞭とする

尼崎市 春城 年代
出世する話は耳に快き

尼崎市 春城 武庫坊
炎ふく胸の乳房がおさえてる

鳥取県 さえき やえ
初盆へ手作りの花添えてゆく

米子市 金山 夕子
雲の峰に眠ってみたいチンドン屋

笠岡市 松本 忠三
わたしにも経験がある腹をわり

島根県 榑原 秀子
青柿が落ちるわびしささぞう音

西宮市 奥田 みつ子
束の間を重ねしあわせ色の齡

大阪府 板東 倫子
繁栄へいくさの話したくなる

愛媛県 石手 武
ゆるやかな曲線僕の性に合う

羽咋市 三宅 ろ亭
面従腹背という会議ぶり

和歌山市 青枝 鉄治
脱税のバツジに高い歳費出し

藤井寺市 福元 稔
偶然の出会い計らいかも知れぬ

有田市 松井 かなめ
花道もなく職退いて病む夫

富田林市 山原 昭水
還暦であとは世間に恩がえし

豊中市 中桜塚 三丁目13-15
投句先 千560 * 橋高薫風宛(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題「洗う」 選者 森中恵美子

締切 9月10日

(ハガキに三句以内)

投句先 大阪市東区馬場町3-43

NHK大阪放送局「ふれあいラ

ジオセンター」川柳係

発表 9月25日(日)ラジオ第一放送

午前11時5分から

尚香のむ

八木千代選

満月が軌道修正した夜更け

大阪 津守 柳伸

月は地球のたった一つの衛星。あの美しい月の光。あの不思議な満ち欠けの姿にどれほど人間たちは優しくなれることか。その月を見ながらみつめつげながら、このような心の深い句を書いて下さった作者にお礼を言いたくなります。月の軌道は変わる筈がなく、それを見ている地球の軸が、つまり自分が振り動いているだけなのに。いいえ、月も軌道の幅ぎりぎりに修正を続けているのに違いありません。それも満月です。自省の心情が月影のように沁みとおってきます。

裏切つてはならぬ車の後を押す

吹田 園田 文字

わかりやすくして誠実なこの句は「車を押す」という作業の姿勢がしつかり捉えてあるために、読むほうにとつては、それまでの苦勞を積まれた過程やお互いの信頼からにじむ情などが心に通ってきて、それが自分のことへも拡がりながら作者の心の奥にまで届いてゆけそうな親しみを貰うことが出来る。こちらが素直に入ってゆける幅のあるあたたかい句風が、私は好きです。

心ぼそい日暮れを愛撫してしまふ

和歌山 後藤 正子

ベストセラー乾いて狂いだすだろう

寝屋川 稲葉 冬葉

意地悪になつてわたしが見たものは

松原 佐藤 藤子

日がのぼる日が沈む 地球は律義

和歌山 桜井 千秀

みの虫の更衣なら手を貸そう

鳥取 羽津川公乃

優しさに溶けてそれから鬱を切る

和歌山 松原 寿子

仲間と同じ帽子かぶつてついでいく

米子 政岡日枝子

割箸をきれいに割っているト書

羽曳野 吉川 寿美

私を許して鬼の輪の中へ

富田林 藤田 泰子

詫びごとが一つ 針の上つづく

八尾 宮西 弥生

峰ばかり気にしていると眠れない

米子 大塚 恵子

目を開けて笑えば許すこと多き

松江 竹内寿美子

相性が吉で油断をしてみましょう

大阪 西出 楓楽

仮縫いの糸あざやかに自己主張

堺 神原 文

夜明けの橋へ渡る袋はまだ軽い

米子 金山 夕子

ベルが鳴つてる見切り発車だとしても

藤井寺 高田美代子

沈黙の森にいつしか出合うだろう

大阪 田中 弘子

うとうととあの世へ参る沙羅の花

寝屋川 宮崎 菜月

流れねばわたしを残す花笈

米子 林 瑞枝

隣席の傍若無人聞いている

堺 山本 半銭

結論を直ぐ出したがる女文字

富田林 田形 美緒

もう妻でなくなる女と荷を縛る

尼崎 春城 年代

美しい言葉を終の日にためる

岡山 矢内寿恵子

左手のいとしき何時も荷を提げて

西宮 秋元 てる

さまざまの悲喜へ冠婚葬祭屋

和歌山 西山 幸

大波小波 兄ちゃんが好きみんな跳ぶ

米子 川上より子

淋しいと父の背中に書いてある

西宮 奥田みつ子

うぬぼれが消えたらきつと生きられぬ

高槻 河瀬 芳子

ラインを中に騙しごっこを飽きもせず

和歌山 福本 英子

この島を出ようとしなないおじいさん

米子 青戸 田鶴

飽食の世の漬物が甘すぎる

寝屋川 岸野あやめ

Ｃ席からバラ一輪をステージへ

同居だったら嫌がられることして

暑い日は恐いはなしをして上げる

自己流を通しいびつな壺を焼く

ファイナーレは軽い踊りで締めくくる

悪女にはなれそうもない水中花

鬼よりも白紙委任の恐ろしさ

客降りて忽ち老けるバスガイド

今はただ神とわたしで鶴を折る

幸せに浸ってしまふしあわせ

逃げ水と知るさよならは早くする

ブランドのバッグ中身は見せられぬ

幾万の鶏泣かせたか朝のパン

人一人許して枕高く寝る

減っていたふたりでキーアしたボトル

ユニークな泳ぎにかえて魚になる

丸太橋 父の泪で渡りきる

とおの昔の話になって亡夫のこと

もう二度とかえって来ぬ燕の子

さらし葱 愚かな心きざんでる

亡母がときどき香辛料を貸してくれ

縄電車のリズムにはずれそうになる

思いきり腹を立てたらかなしから

スパイスの利き目はばらく逢えません

貝塚 池田寿美子

大阪 神夏磯典子

和歌山 木本 朱夏

米子 石垣 花子

高槻 笠嶋恵美子

米子 寺沢みどり

倉敷 小野 克枝

大阪 古川美津枝

大阪 島村美津子

米子 茂理 高代

米子 野坂 なみ

岡山 清水悠貴女

大阪 本間満津子

岡山 新 正子

岡山 灰原 泰子

和歌山 山川 克子

米子 服部 朗子

鳥取 さえきやえ

岡山 山本 玉恵

鳥取 川崎 秋女

兵庫 倉垣 恵美

大阪 鈴木 節子

米子 沢田 千春

和歌山 森 茜
和歌山 田中 輝子

思いきりかくれて泣ける場所は何処

どうしよう迷いく度風は秋

ぬかずけばもう何もかもお見通し

夢半分覚めて反すうしてる闇

針箱に古いボタンが増えてゆく

妥協してふっと横切る別な顔

石楠花の花よ愛など言うでない

来し方の正誤を今日も自問する

ドライフラワー火種一つが揉み消せぬ

目ざめてもやっぱり見えぬ私の目

吉凶は平均にある窓明り

病む猫へ道草せずには帰ります

濡れてくるくるおどけて回る傘車

子と孫と私ですよ仏間の灯

星屑の一つに息子いる夜空

ねじり草 母の強さを見せつける

雨降れば雨の想い出つきまとう

慌てんぼの亀が詫状書いている

掴んだら抱きなおしたい青い鳥

よろけ癖がついてしまった独楽の芯

月下美人 一夜で想い伝えたか

巢立たせて風吹きぬける縄電車

摂津 もちづき遊美

佐賀 寺中三枝子

吹田 栗谷 春子

西宮 西口いわゑ

和歌山 古久保和子

堺 高橋千万子

出雲 石倉芙佐子

広島 流 奈美子

西宮 林 はつ絵

米子 三好寿々子

宝塚 丸山よし津

茨木 堀 良江

岡山 松本 元江

岡山 富坂 志重

河内長野 植村 喜代

和泉 中川 楓

岡山 千原 理恵

羽曳野 福田満洲子

米子 大田みさと

米子 光井 玲子

姫路 都里 遊光

岡山 土居みさえ

ハガキに雑詠3句 毎月10日切

投句先 千683 米子市花園町14 八木 千代

老いてますます

冴えるユーモア

土居 耕花

高橋 千房子

司会 橘 高 薫風

アシスタント 八木 千代

小林 妻子

河内 天笑

薫風 きのこの塚の夜市川柳に岡山から来

られました土居耕花さんをお招きして座談会を計画しました。お相手は高橋千房子さんです。昨年相ついで「やっこ凧」と「絵皿」の句集を出版された御両所ですから、お二人ともすぐれたユーモアの味で注目されたことはご承知の通りです。この七月号の川柳塔を見ますと、耕花さんは「胃を切って五臓五・五腑

となる」という句をつくっておられますが、

お体の方は如何ですか。

耕花 今のところ小康を保っております。

だいたい、胃にしとりますが、切ったのは胆のうで、その後の余後が良うのうてまだ通院しとります。体調はずい分よくなりました。

薫風 まあ、暑い時節ですから……

耕花 ご心配かけまして、どうも。

薫風 さて、個性の確立ということをや、今

やかましく言われています。えてして新しい傾向のものが個性のように思われがちですけど、お二人の作品を見ると、個の確立というのは、決してそういう力んだものではないと思われれます。耕花さんはお百姓なさっているんですね。

耕花 ええ、小さいのやってますんで。

薫風 で、そういう生活の中からユーモアの句をお作りになって、自分の色をちゃんと出しておられます。何といえますか、底抜けに笑いを誘うという句柄と申すのです。それに、奥さん孝行ですね。喜寿に建てられた句碑にも「次の世があつたら妻よまた逢おう」と、奥さん思いのお姿をわれわれに認識させられました。他にも「妻が手を握り返した事がない」とか、「五十年前は妻かてクイアナ妃」というふうな句で、ぬけぬけとのろけていらっしやる。

耕花 お互いにひのえうま同士で、貧しい中をつれ添うて来ましたんで……。最初は照れましたが、まあいちはん妻の句が多いんじゃないかと思えます。課題が出ましても、先ず妻のことから考えていくようなことになってしまっています。

薫風 耕花さんのことをもう少し詳しく、



右から千代・薫風・妻子・耕花・千万子・月子

岡山から一緒に来られた小林妻子さん、お聞かせ下さい。

妻子 アノネ、僕もしよっちゅうここへ行くんですわ。一番に目につくのはいつも奥さんの句を書いておられるんです。そして僕が彫っているように、竹に句を彫られるのです。

「酌ぎこぼす妻の近視をいとおしむ」

薫風 さて、片や千万子さんの方に移りますが、女性に叙情に偏る傾向があり、ユーモ

アとか批判の句が非常に少ないのです。千万子さんの句は、ユーモアの底に批判の目が光っているのです。これは、千万子さんがはじめて川柳の手引きをして貰った松江梅里さんの影響が多分にあると思うのです。句集にも書いてありましたが、大萬川柳からお入りになられたのですね。

千万子 そうですすねん。主人の友達やった梅里さんに、紙と鉛筆あつたら出来るんやからしなはれしなはれと言われて……

薫風 大萬川柳の選者だった麻生路郎先生の「盃」という題で、いきなり天位を取られた句というのは。

千万子 「盃を持ってよろめく喜の祝」で、その時梅里さんがニコニコして鯛を持って祝いに来てくれたはったんです。

薫風 千万子さんの個性のよく出た句は、「封筒の色に似合わぬきつい文」「駄目という言葉は大も知っており」「立ち話マンションは今全自動」「化粧品値切らず鯛値切るなり」と次々に浮ぶのですが、田辺聖子先生も「でんでん太鼓」という本で随分取り上げて下さっていましたね。アピールするものがあるので一流の方が認めて下さるのです。

耕花 私も読ませて頂きました。私の句はやっぱりこしらえた句で、千万子さんの生

まれて来た句です。

薫風 耕花さんは謙遜されてますけれど、昨日の句会でも、題に即してご自分の境涯や生活、心を詠んでおられるので、披露されたら耕花さんの句だと分かるのです。千代さんそう思いますね。

千代 耕花さんの句は、いつも一本だけ姿勢があるみたい。川柳だけじゃなく、何を見られても何をされても、ちゃんと自分がそれと溶け込むように温かいのです。そして、千万子さんの場合は、折りにふれたその時に、「ハッ」とする感受性が強い。「すてたのに拾えば強い風当り」、あの句大好きです。だから、一つの事に対して、自分をパッと合わせられるみたい。耕花さんの、しっかりと書えないけれど、それは男かなあ、もつ、天地自由自在の感じね。

耕花 性格がそうなつとるのでしようか。真つ直ぐ見ずに横から見、斜めから見するよくな癖になつとるみたいです。川柳塔の仲間になった頃、「封筒のように平たくなって死に」千万子さんご存知ないですか。ああいう句に感心し、教えられました。

薫風 それ千万子さんの句ですか。

耕花 へえ。

千万子 ちょっとと責任感じるわ。

薫風 耕花さんは岡山の田舎で奥さんと一緒に田畑を耕す生活をなさっている。それを思はず句も当然のこと多くて、「手術した事をカラスは知っている」。今でも朝早くからほぼつなざっているのですか。

耕花 仕事ですか。近頃は手伝いも若い人もやるようになったんですが。青春時代から、こっち大阪の方で苦労してね。今言えば、おしん以上の男ですがな。それで大体人の心の裏まで分かるとる言や、えらい鳥滯がましいのですけど、そういう事から真つ直ぐに物を言えんようになってしまったと思います。

薫風 それでユーモアに救いを見つけられたのでしょうか。修羅というか、厳しい生活を経験なさっての「揚句の果て」なのですな。

私 思いますのに、ユーモア作家の代表で六大家の一人の椋紋太先生、路郎門下の須崎豆秋さんも普段は決して洒落を言ったり、おどけたりする方ではなくて、実直真面目な方でしたが、それにユーモアをたっぷり句になさるというのが一寸不思議なのです。

千代 私もそう思うんですよ。お二方見るとね、ユーモア作家の名前を付けるのがふさわしくないみたいで、何でもに一生懸命なのね。それだからこそ、そういう芽が育つのではないのかしら。

天笑 洒落とユーモアとは、おのずから性格の違うものでしょう。深い悲しみや人の痛みが分かって初めてユーモアの句が生まれると思うのです。耕花さんも千万里さんも、そんな体験をものにしておられる。またそれ以上に私が感心するのは、言葉の選び方がとても巧い。

千代 わざと笑わそうとして作った句は、どこか甘いでしょ。昨日も千万里さんは、句会の句を作らずに、団扇（ちぎり絵をあしらったうちわで、天位の賞品になった）を作り、天笑さん主宰の会に、自分なりに手助けしようとなさっている。

天笑 みんな喜んでくれたよ。

千代 ちぎり絵にも心にも夢があります。

薫風 千万里さん夢を持ってはると仰言った千代さんに同感します。それは、千万里さんには、時にドキツとするような恋の句があつて。女性に年を聞くのも何ですけれど、おいしくつになられますか。

千万里 八十に近いのです。七十六も八十も同じやさかい、恥ずかし思わんと八十と云うてます。若く見て欲しかったのは五十年代六十代です。ここまで来たらかえつて八十やと言つて、八十より若く見えるやろと言いたい気分です。ある人が「千万里さんええ人ある

んと違つか」と言いはるんですけど、残念ながらありません。経験ないかいうとそうでもない。それら川柳しててねえ……。

天笑 「絵皿」編集する時もそう感じました。こらひよつとしたらええ人居やはるでとね。現実にはなくても、心の何処かにそういう人が棲んでいるのでしょうか。

薫風 それが作品の出来る原点ですから。

千代 わたし好きな人がない時はお月さんに恋してるわ。

薫風 お二人は八十歳ということですが、耕花さんの句に「福寿草よ八十歳になりました」この句、新年傘寿を迎えたという感慨ですな。

耕花 ええ、そうです。福寿を願う意味合いを込めて、まあ考えて出た句です。

薫風 妻子さんは耕花さんの句の中で、これが一番だと思われるのを披露下さい。

妻子 全部がそれだと思つて、どれがいかなどと言えず、発表になつた句が皆僕達の道しるべになっています。

薫風 「按摩機よお前はハイと言つてくれ」という句は、奥さんの造反も垣間見えて……。

妻子 呼びかける形は「天井よさよなら僕は退院す」「こおよきよお前も一句考えろ」という展開ね。

耕花 あんな句でも、みんな良う言うてくれまじな。

千代 「痛くないとこを押さえて医者が去りに。そこ痛くないから、ここだと言えはいいのにね。好き勝手に押さえておこうといつた。」

薫風 お医者さんとの句も多いです。「急患へ一服つける医者の癖」「好きなもの言わせて医者がみな禁じ」。

千万子 ドキッとした句があります。「老婆にととき足に触れて寝る」。主人の居た時そういうことあったんです。また、「子沢山しまいの方はこぼれ種」。出来んでもええのに出来てしもつた。

天笑 僕は八人兄弟の末っ子やから、こぼれ種やろな。

千万子 そらこぼれ種や。(爆笑)

薫風 長男長女は試作品。

千万子 「お多福の面は要らない家に居る」こういう風に、表から持って行かず裏からぬけぬけ言うてはるのが面白い。

千代 それとね、奥様のことあんなに書いてらっしゃるのに、「にこりともせぬ女房と家族風呂」というのがあるでしょ。それに「半分と少うし食べて妻に置く」というのも好き。

薫風 そうそう、「半分と少うし」が作者

の温かい人間味です。

千代 女だったら好きな人には、ほんに少うし余計に残すのよね。

耕花 句会でも、ちーとたのしい句が出ると思う私の顔見てな。

千代 そうそう、ご期待にそうて耕花と呼名なさる。

天笑 もてなしの心やね。芯から笑ってもらえる句は、先程千代さんが仰言ったように常に一本芯を持っているんやね。楽しませてあげようという。

千代 それでわざとらしくないのね。皆が期待してるときに、スーと出してくれて。

薫風 やさしさと謙虚さが、すばり批判が命の川柳という文芸にも必要だということですね。いい話を聞きました。

妻子 耕花さんは、今度の夜市川柳に、死んでもよいかから連れて行ってくれと言われたんですよ。(一同しんみり)

薫風 ところで、予定の時間も少なくなりましたが、耕花さんがお年を召して大きな手術をなさり、これは本当に大事だと思っんですけれど、「香奩は親父がすぐに取り返す」「巾の鉦を注筒に七拍子」「骨壺に消える手品を知っている」などと淋しい句が増えて

いますが、これは反面で、そういう句を作っ

ておられるうちは、くたばるものかとの覚悟だと見ています。私の句に「八十になったら恋をしてみよう」があります。千万子さんも若い句をこれからも作り続け、ユーモアの境地を深めて下さい。ありがとうございました。

耕花 本当にありがとうございました。
千万子 ありがとうございました。

言いまわしの個性 (四)

——先輩作品の分析 (続き)

竹 内 紫 鏞

1 集計兼鑑賞も楽し

毎月十句以内の句を並べて、人に見せている間は、題材もさまざままで視野が広そうに見えるが、月が変わると同じテーマの繰返しになる。ある年百句ほどを刷つたら、似た句想を捨ててないし、「鼻につく」と人に言われそうな字句も自分にはあるらしい。

材料の種切れはお互い様であるが、癖は得意な表現が表にあらわれたものもあり、自選百句の二頁は、そういう点が調べやすい。癖を見ると意地悪に聞えるかも知れないが、文章を観察して「学びとる」ことと似ている。

この二頁分を複写して折り畳み、豆句集にしたもの(萬的氏に習う)は、趣味の違う人

にも面白がられ、川柳のPRになった。「ずいぶん優雅な暮しをする人もいるもんだね」と期待外れを言う友人もあれば、違和感を告げる短歌愛好家もいた。しかし俳人がこんな作品にいちばん関心をもってくれた。

それはそうと、今は統計の時代である。野球の放映にはすぐ集計値が出て、高低を問わず打率や無安打連続が幾つといった字幕を出す「算え人」がいる。直球とカーブの割合がどのとが、七色の変化球などと言っては解説を飾る。マジックという数字まである。

数字のない世界が文芸誌だ、と読者は思っていたであろうが、このところ紫鏞が算え人になり、何千行かの縦書きの間から数字をはじき出したのだから、本誌の読者も呆れているに相違ない。

この種の集計は、文章についてはここ二十年、国立国語研究所の作業から生れた記録が多数ある。筆者は工学系の人間だから集計には慣れていないが、大量の印刷物の内容がこうなっているというデータから研究が始まるのだから、先が長い。

ただし、作者別の数値の差があっても、それがバラツキ幅の中の差だったら何もならない。だから、作風の違いが何となく分かる同人を十人ぐらい組上に出し、数字で違いを示し、大きな差が知れたら作句に取入れたい——という気持である。それには、漢語派を自認した筆者にとつて、早いところ「和語派」の代表格の人(作品)に出会いたい。

句頭の字句に目をつけて、分類するのは手つとり早いので、前々稿の流儀で先輩諸氏の作品を分析してみよう。

品詞や、和漢の語彙を区別するには「新潮国語辞典」(昭57)が便利であった。もつとも、俳句・川柳は省略の局限をねらっているので、散文の文法どおりにはいかない。俳句の構造については、切れ字や文語的語法を分析した大木葉末氏の著書を参考にした。上五ばかりでなく、下五までの全句の品詞を今後区分していくわけだが、筆者に強力な支援者、松井栄一氏が今年から付いた。

2 句頭語の分析

今回、八人の同人の自選百句（昭60）から前の要領で集計したものが表1である。川柳では、体言（名詞・代名詞）で始まる句が、百句中約70から90あることがまず分かる。その名詞に和漢の比率の差があることは、これまでと同じで、表の両端の人ほど対照的である。名詞七割の人は、残りの三割の品詞が、動詞・形容詞・副詞など（それらも殆ど和語）であるが、そういう語句で始まる句は和歌のように響きが柔らかで、主題が後から現れるという感じである。千翁、ゞ女の句を読み下していくと、もちろん句の中ほどに名詞は出てくるが、それも漢語は少ない。両氏は作者の身辺から取材し、千翁氏のいう「無形の心情」を主に詠じていて、多数の用言を効果的に使っている様子がある。

漢語派と思われる小林由多香氏は、紫錆と似ているが、中七・下五になると構成が違ってくる。従って各句の全体を通じて眺めてみたい。表の中程の三氏は上五の品詞構成がほぼ似ていて、中間派といえそうである。

気が付いた点を簡単に書いてみる。

まず外来語。これが多いのは紫錆、ついで由多香だが、有形の物を読み、新しい句材を

表1 自選百句の句頭語の分類

掲載年月	作者名	名詞					動詞 (複合動詞)	その他	和語計 / 漢語計
		和語	漢語	外来語	混種語	固有名詞			
60. 4	水粉 千翁	43	20	2	2	1	24(9)	8	74/21
60. 7	岩本雀踊子	55	22	1	9	0	6(1)	7	68/22
60.10	藤村 ゝ女	43	22	6	0	0	12(1)	17*	71/23
60. 5	藤井 明朗	46	33	2	5	0	6(1)	8	60/33
60.12	阿部 柳太	38	28	7	14	2	7(1)	4	49/28
60. 7	金井 文秋	36	33	7	6	0	11(1)	7	54/33
60. 6	小林由多香	27	46	9	6	0	5(2)	7	36/47
60. 6	竹内 紫錆	15	57	13	6	1	5(2)	3	23/57

- [注] 1. 代名詞（和・漢）はそれぞれ名詞の欄に入れた。
 2. その他の項は6品詞を合せて記入した。例えば*印の内容は、形容詞5、形容動詞4、副詞5、連体詞2、接続詞0、感動詞1である。形容動詞には語幹が漢語のもの（例：平凡な、風流な、等）があるし、副詞にも漢語（例：一番）があるので、漢語計の中に入れてある。
 3. 複合動詞（例：思い出す、打ち解ける）は1つの動詞と数える。これを動詞の内数として記入してある。

探すうちに数が増えていったらしく、難語はないように思う。女性も、手回り品を含めて外来語をある程度使はずである。

次の混種語は興味深い。辞書にない言葉も思いついた結果だという場合がある。俳句には多いので例を集めつつある。和漢を複合した名詞がこのうち大部分だが、柳太氏の場合、定着した日本語である。外来語との複合などは、やがて増えていくものと思う。

固有名詞——これは「使わぬ主義」の作者もありそうだ。今回は八人とも少ないが、前に述べたように、使う人は盛んに使う。遠隔地の読者が当惑することが無いでもない。人名や地名がよく出たのは、野村太茂津氏や東野大八氏の作だと思うが、それも観光の句でなく、人世遍歴の重味を感じさせる作品である。分析はしにくかった。

カタカナ言葉は目につきやすいが、上五に多い人は、中七以下にも多い。人名・地名も同じような傾向がある。しかし、事務的な文章や解説に慣れた人は、先ず最初に名詞を挙げて「提題」することが多い（抽象でも具象でも）。一句を任立てる過程では、上五から下五に名詞を移したりするが、この配置替えの手順は、阿萬氏の「教室」などで学びたい。俳句では、上五と下五の両方が名詞の句を

「キセル」と呼び、稚拙な言いまわしの例とされている。筆者は、それを知っているくらいであって、下五の中にいぜん名詞が多いことは、数字で比べれば認めるほかはない。ここから集計が急に面倒になるが、上五の二番目の言葉も含め、中七・下五にわたって小さな単位に分けてみる。例句を挙げる。

〔例句〕

- 1 肘鉄（形動外）へクル（和名）な顔（動）でまた口説き（動）
 - 2 表彰（和名）へ妻（和名）ひかえ目（和名）な位置（動）にいる（由）
 - 3 なに（和名）ごと（形）もな（和名）かった風（和名）の音（動）を聞く（動）
 - 4 少（動）し（動）ず（動）つ（動）母（和名）に似（補助動詞）て来（動）たほろ苦（和名）さ（動）
 - 5 なんと（和名）なく（和名）父（和名）が好（形動和）き仁（和名）義（和名）礼（和名）智（和名）信（和名）
 - 6 生き（和名）さま（動複合動詞）へ見（動）果（和名）てぬ夢（和名）の長（和名）さ（動）かな（和名）
 - 7 定年（和名）のそれ（接統詞）から妻（和名）が強（形）く（動）なり（動）
- 〔付記〕比較的多く使われた形容詞は、口語体でいえば、な（無、亡）い／美しい／よい等。副詞は、少し／まだ／もう／とても等で

3 句全体の品詞分析

例句は、国文法のおさらいを兼ねて、品詞を傍記したものである。以下の集計では、助詞、助動詞、補助動詞は数えないことにする。試験台には八人中、数字上も作品の印象の点でも違いがある四人を選んだ。

各人の百句全部について、例句の要領を決めていった品詞を別々に合計した結果が表2である。作者によって数字に大差のある個所がある。作品の活字面でも漢語の密集に気がつく。

さてこの話、人口統計のような報告に終るわけにはゆくまい。全くの第三者は「それがどうした」と言いそうだし、筆者も算えただけの収穫は得たい。だが今のところ、集計結果は論じても句評めいたことは述べない。

さて、このデータを分析する際、一番考えやすいのは、動詞の使い方である。そこで、表3のように、各自の動詞の按分をみた。由多香は、紫鏑と同様上五に動詞は少いが下五では動詞が断然多い（動詞だけ、又は名+動の形である）。これは川柳の正統的叙法と思われる。紫鏑の方は、下五に來ても動詞が少ないのが癖であり、これは少年期以來洗脳されてきた体験（後述）と符合する。他の作者の動

表2 自選百句（各句全体）の品詞別集計

作者名 語種	水粉千翁	藤村メ女	小林由多香	竹内紫鏑
名詞	247	285	276	299
和語	188	202	102	101
漢語	49	67	141	144
外来語	4	10	21	35
混種語	3	4	12	19
人名・地名	3	2	0	1
代名詞	7	5	6	6
動詞	147	130	151	109
（複合動詞）	(22)	(7)	(7)	(9)
形容詞	20	24	20	14
形容動詞	6	9	10	4
副詞	13	20	5	11
その他	9	4	2	1
和語計 漢語計	389/50	391/70	290/147	243/146

表3 百句全体中の動詞の数

作者 区分	千翁	メ女	由多香	紫鏑
上五	42	19	13	12
中七	39	47	53	38
下五	66	64	85	59
計	147	130	151	109

詞には、「抱く」「確める」がよく見られた。動詞以外で十七音中に割り込ませた二、三の語彙にも気が付いた。副詞―「ふと」だけで「ふと思つ」の意味を持たせる。「するする（と）」ほか同音反復は調子がよい。感動詞―「ああ」「あわれ」が目につく。連体詞―「そのときは」で始まる句がある。接続詞―中七に「それから」を入れた句がある。「かつ」も使えるが、これらは五七五

のリズム作りにあずかっている。形容詞―「雨でよし」「父でよし」、上五にも「〇やよし」という言い方がある。動詞は中七にもあり、各人の使い方の特色を述べ切れない。「愛す」「信じる」などの混種語動詞は少数あるが、今回の作品の動詞は和語がほとんど。新聞の報道にある漢語調（〇〇する）は陰をひそめている。動詞は、下五に来て一段とふえる傾向にあ

4 下五の構成

るので、事のついでに下五の構成を確かめてみた。各川柳作家も、この点に気がかりだろうし、個性が出る場所といえそう。下五の仕立てを少し考えてみた結果が表4である。形容動詞の処理（例えば「波静か」「日々新た」など）を考えると、十項目以上に区分されそうだが、この程度にする。俳句の文法解説書中の百人の句を表4にあ

表4 百句の各下五の構成

品詞順	作者				俳句の例
	千翁	メ女	由多香	紫鑄	
①名・(助)	16	22	8	29	37
②名・(助)・名	4	8	1	9	8
③動・(助動)	42	15	37	16	26
④名・動	22	33	42	24	23
⑤動・名	2	8	3	10	2
⑥副・動	2	6	1	2	1
⑦形	1	4	3	1	3
⑧名・形	7	1	2	3	0
⑨その他	4	3	3	6	0

てはめたら右端の欄のようになった。唯一回の集計に過ぎないが「名詞+切れ字」の形や五音名詞や助動詞(けり、たり等)がかなり多いのが俳句の特徴である。川柳ではそういう二音分が他の姿に変えられるのであろう。

表2、表4で数字のめだつ作品を味読した。千翁は動詞(複合動詞も)の使い方が実に多彩である。メ女は形容詞・副詞をよく用いており、ブッキラボーな男性の会話では略され

る字句がある。肉身(母妻などの二音語)が主題で、それと用言の組合せが特色らしい。

誰かの作品に「卒業す」があつた。これは集計時に、漢名+動詞とした。「○○をする」という文章と同義だからである。「就職」もそうだが、四音漢語は時代と共にふえる傾向にあり、それを「業を了え」とか「職につく」と言換えられればいいが、意味がずれる恐れがある。三音の熟語を

類語辞典で探し(例えば入社)、そのほか五音名詞(入社式など)を使えば形が整うこともある。カメラ記者が集めてくる情報には、集まった若者の表情まで含めた一つの連想源があるの、捨て難いと思う。

次回は、複合語の話に入りたい。ちょうど夏料理に飽き、彼岸花が咲き、読みつづけていただける季節だろうから……。

(続く)

金井文秋

喜寿祝賀句会

とき 9月15日(祝)午後1時

ところ 高松会館

JR環状線寺田町下車3分

おはなし

橘高 薫風

兼題

長生き

宮尾あいき選

足る

小川 恒明選

雑誌

阿萬 萬的選

カネ(銭)

黒川 紫香選

秋

謝選 金井 文秋

席題 なし

会費 千円

南大阪川柳会

残暑お見舞い

サークル檸檬

残暑御見舞い申し上げます

いずも川柳会

事務局 千六九三 出雲市大津町大曲二〇九七

金村 青湖方

岸	小白	小園	石倉	園山	吉岡	金村	板垣	板垣	原
桂	金房	山満	芙良	山多	岡き	村青	垣草	垣夢	独
子	子	江	子	子	みえ	湖	丘	醉	仙
堀	堀	石	高	山	藤	島	久	竹	大
江	江	飛	橋	本	原	重	谷	治	野
芳	正	水	き	朱	河	昭	ま	ち	し
子	朗	煙	よし	紅	南		こと	かし	ま
久	小	村	藤	浜	佐	中	小	西	藤
家	西	尾	田	野	々	川	砂	村	井
代	雄	孝	軒		木	幸	白	早	明
仕	々	太郎	太	肇	裕	一	汀	苗	朗
男			楼						子
									美
									子

残暑御見舞い申し上げます

東大阪川柳同好会

会員一同

消える渡辺町

布施 幸子

大阪市の住居表示変更で、『渡辺町』が消えることになり、由緒ある地名をのこしてほしいと、異議を申し立てる運動が話題をよんだ。

渡辺町は、渡辺綱の住んだところだといふ。綱は、本名を源綱みなもとつなといい、嵯峨源氏の流れをくんでいる。

嵯峨天皇のみことので、八一四年に臣籍降下した皇子たちは源姓をなおり、名前は一字にして嵯峨源氏がはじまった。

神話はべつにして、歴代帝のうちで最も子どもが嵯峨天皇、お子さまの合計が五十人を超えた。皇族がふえると支出もふえる。蝦夷とのいくさや、平安京造営で財政ピンチの当時、支出をへらすべく考えだされたのが臣籍降下だった。

光源氏のモデルといわれる源融みなもとも、親王号をのぞかれた一人である。が、『河原左大臣』とよばれて華やかな暮らしぶりだった。けれど、皇族ならばさらに多くの費用がいったのだらう。

渡辺綱は、嵯峨源氏六代目にあたり、九五三年に生まれている。源頼光の四天王の一人として有名で、そのころとしては長寿に恵まれ、七十歳の生涯をおくっている。

頼光は、おなじ源氏ながら清和天皇から出た清和源氏で、摂津源氏の祖となり、四天王の協力で鬼をやっつけて勇名をとどろかせた。

四天王、とはもともと伝語で、帝釈天をたすけて四方を守った『持国天』、『增長天』、『広目天』、『多聞天』をさす。天界の王、帝釈天にしても、四天王あればこそ佛法を守るつとめがはたせた。同様に頼光も、渡辺綱、坂田金時、碓井貞光、卜部季武の献身あつてこそその働きだったといえよう。

当時の京都には鬼があふれていた。赤鬼や青鬼のほか、当時は権力者にたてつく者は全て『鬼』だった。

鬼征伐で名をあげた頼光だがやはり生身の人間、ある年の夏、体調をくずして寝こんでしまった。高い熱が出ていつこころに引かない。唐伝来の薬をのみ、お坊さまに祈禱をたのみ、四天王は水ごりをとったが利き目はなかった。そのはずで、頼光を苦しめたのは並の病気で

はなかったのである。

加害者は、ついに姿を現した。深夜の頼光の枕元に立ちふさがったその怪物は、土色の顔に真赤な口を開いた大入道で、手には何本の縄をもつて頼光を縛ろうとした。

衰弱していてもそこは剛気の武士。頼光は

かたわらの太刀をかまえ、したたかに斬りつけた。怪物はギャッと悲鳴をあげ、倒れるかに見えたが、ふっとかき消すように姿を消した。

夜明けを待つて、四天王は怪物を探した。点々と続く血のあとが、北野の森の大きな塚の前でとぎれ、渡辺綱が太刀でその塚を掘ると、体長一メートルもの血だらけの土蜘蛛がひそんでいた。大入道の正体は土蜘蛛だったのである。

（北野天満宮のそばの東向観音寺の墓地に、この土蜘蛛塚からの出土品が置いてある。苦むした石灯籠の火袋のよつなもので、先入観を持つせいか、いかにも陰気にみえる。発掘当時、ある人が庭においたところ崇りがあり、あわてて寺に納めたと伝えられている）

さて、土蜘蛛をやっつけて主君の病気をなおした忠勇無双の綱にもゆだんはあった。あ

る日の夕方、一条戻橋を通つて、目のさめるような美女を見かけたのが迷いのものである。その辺は御所の鬼門にあたり、鬼の出入口になっていた。鬼に関する事件数ナンパーワンの場所、昼間でも人通りはまばら。まして日暮れどきに、ミス・京都に選ばれそうない女性が一人で立っているのは妙である。が、こと美人をまのあたりにすれば疑いも吹つとぶのが殿方というものであろう。

五条まで送つてほしいという美女に、綱は「いいですとも。さあ、馬にどうぞ。こんな

所にぐずぐずしていると鬼にさらわれますよ」と愛想のよいこと。その美女こそが自分をさらうにきた鬼とは気づかない。

だが、川面にうつる影を見て、やっと鬼の正体を見破った綱は、手むくじやらの腕を切り落として難を逃れるが、後日、乳母に化け

■句集鑑賞

柳楽鶴丸句画集「自然点火」

恒松 叮紅

去る六月五日、柳楽鶴丸句画集「自然点火」の発刊記念川柳大会を松江市殿町のむらくも会館で開催した。県内はもとより、鳥取県や山陽路から、又、大阪から川柳塔社黒川紫香副理事長、橘高薫風編集長をはじめ多数の方々をお迎えして盛大に催すことが出来た。当日は申し分のない好天気にも恵まれ、六十余名の出席者で埋められた会場は最高の雰囲気におつまれ、鶴丸君をはじめスタッフ一同もこの温かい友情に新たな感激を覚えていた。

句画集発刊の動機は、川柳三十五年と俳画歴十年、それに還暦、定年、銀婚とをふくめた人生の節目を自分史として記録に残したい

て訪ねてきた鬼に又うっかりとその腕を見せしてしまう。英雄も美女と乳母に弱いことを、鬼は承知して作戦をこらしたようだ。

渡辺一族の本拠地だった渡辺は、昔は淀川川口あたり一帯を占めて広がったが、今は坐摩神社の境内だけが渡辺町で、住人は渡辺清

一念からだと聞いている。書名は彼の句の「結婚しました自然点火です」から引用した。動機にふさわしい書名だと思っている。書名の版下は拙い筆だが隸書まがいの字で私が染筆した。序文は一行もない。それは「あとがき」の「死ぬるまで恥かく男にて候」の句から伺われるように、未完成の作品に対する彼の偽らない謙虚な心情でもあろう。所収の川柳もさる事ながら、六十点に及ぶ俳画（この場合川柳画と言わせてもらう）が一層この句画集を引立てている。俳画を志して十年、ひたむきに描きつづけてきた努力は称賛すべきものがある。ぶっつけ本番で色紙と取り組んできたその熱心さが、ここまでに描きあげる成果を生んだのではなからうか。

句の鑑賞に移ろう。鶴丸の川柳は、難解句ではないけれど、破調的な作品である。自由奔放というか、勝負気儘というか、それが彼の作風かも知れない。番傘の柴田午朗氏が「松江番傘」六月号に「自然点火」の鑑賞文を寄稿されて「昔の雪は白かった」の句をあ

音宮司と奥さんだけという。だが、ここをルーツとする渡辺氏、渡部氏は全国に百四十万人もいて、「全国渡辺会」や「地名を守る会」の人たちが保存運動をおこなったので、町名は消えたが、街区符号（久太郎町四丁目渡辺三号）として残る事になった。

げ、これは「川柳」ではなく「詩」ではないかと思うと評されているが私も同感である。ただ初心者には真似て貰っては困ると私は思っている。彼の詩的川柳は沢山あるが割愛して、私の好きな句をあげてみよう。作品には世相を斬る句の多いのも彼の反骨さからか。又、特に愛妻家としての作品も多い。

神様の軍配にもある差し違ひ
日本語で洋食皿の割れる音
凶鑑にない動物が自然を壊す
玉碎の島で派手な甲羅干し
生前に満足する戒名付けておく
何時までも妻の止り木でいてやろう
妻が左に寝ていてよくぬむれ
東京の三味に合わない安米節
最後に私の一番好きな句――

ブリツ娘の足に噛みつく宿の下駄
私はこの句が一番いい。これが本格的な川柳ではないだろうか。下駄など履き馴れない新人類への鋭い川柳眼である。限られた紙面なのでこの句をもって鑑賞のしめくりとする。

玄宗と楊貴妃と李白と

渡 辺 圭 坊

今、奈良公園を中心に「なら・シルクロード博」が開かれており、川柳塔社ではこの九月、「洛陽・西安吟行の旅」を舉行される。この吟行に私も参加するので、目的地についての予備知識をまとめるつもりで手持ちの本をあれこれ拾い読みする中に、洛陽・西安にちなむ漢詩や古川柳が目にとまったので紹介しておきたい。

昭和十五年ごろに発行された日本放送出版協会のラチオ新書の一冊に、宮原民平著『支那の口語文学』があり、「演劇に就て」の一章に次のような記述がある。

「南北朝時代には、北朝と西域地方との交通が頻繁でしたから、自然外国の音楽なども輸入され、歌舞音曲は頗る進歩して来ました。唐においては、玄宗皇帝が特に歌舞演劇を好み、従来からあった教坊（歌舞練習所）の外に内教坊を蓬萊宮の側に設け、京都には左右教坊を置いて俳優雑伎をつかさどらしめ、また坐部伎の子弟三百人を選び、梨園において

玄宗親しく教師となり、音楽を教へました。現今でも劇界のことを梨園と称するのは此事に因るものであります。当時は詩人に文豪李白あり、音楽家に天才李龜年あり、舞踊には美人楊貴妃ありで、玄宗も時に驪山の華清宮に幸し、大いに豪華な演舞会を催したことでありませう。

しつっこい笛の音する驪山宮

などと昔の川柳子は皮肉を飛ばしてゐます」

この楊貴妃は、講談社発行『中国の歴史』

4 隋唐帝国（布目潮風／栗原益男著）には、

「楊貴妃は、はじめ玄宗の寵愛した武惠妃

の産んだ寿王瑁の妃となつた（七三五年、十

七歳の時）。この絶世無双の美人が、武惠妃を

失つて代わる妃がなかつた色好みの玄宗の目

にとまつた。自分の子の妃をすぐさま自分の

妃にするのは、中国人の道德にはずれた行為

であるので、いちど女冠（道教の尼）とし、改めて七四〇年、後宮にいられた。その年、楊貴妃は玄宗にとまなわれて驪山の温泉宮に行

幸している。

春寒くして浴を賜う華清の池

温泉の水滑らかにして凝脂を洗う

と白楽天の『長恨歌』に詠まれたのはこの時のことである。温泉宮は七四七年、華清宮と改められた。以来、玄宗の華清宮行幸は回数が増え、七四七年以後、十月から十二月末まではここで過ごし、七四九年からは新年の朝賀も一年おきに華清宮で行われることになつた。玄宗はこのころ在位三十年をこえ政務にあき、政治は李林甫（佞臣の代表ともいわれる宰相）にまかせきりになつた。一方、知略にすぐれ、歌舞をよくし、音律にも通ずる楊貴妃は芸術家肌の玄宗にはびつたりで、玄宗はひたすら楊貴妃への愛情に溺れていった」とある。

李白に関しては、東京のカルチャーセンタ

ー川柳講座テキスト3の歴史編を執筆している尾藤三柳氏は、菅子の句として

四日目に明き樽を売る李太白

を掲げている。また、岩波書店の中国詩人選集『李白』上には、註者の武部利男氏が次の

ような解説を書いている。

「自由な山の生活もたのしいが、花の都、

長安こそ、李白のあこがれの的であつた。か

れの詩才が時の天子、玄宗にみとめられて側

近に仕える身となつたのは四十二歳の時であり、足かけ三年、都の生活を送る。……さて宮廷詩人になつたものの、李白はおとなしく天子のお側に仕えていない。いつも民家の酒場で遊んでいる。後輩の杜甫が「飲中八仙歌」の中でうたっている。

李白は一斗 詩百篇

長安市上 酒家に眠る

天子呼びに来れども船に上らず

自ら称す臣は是れ酒中の仙と

宮廷の沈香亭で牡丹の花が満開になり、玄宗が愛人の楊貴妃をつれて宴会を開いた時、李白は二日酔いで寝ていた。美しい牡丹の花とあでやかな楊貴妃を前にしては、どうしても李白の新しい詩が必要だと玄宗が言い、李白はかたづけ出されたが、泥酔していた李白は宦官の高力士の目の前に足をつき出して靴を脱がすという一幕があり、宮中に隠然たる勢力をもつ高力士のうらみを買う。……李白の生涯は、この場を転機として幸福だった前半生から不幸な後半生へと移っている。

さて、長安の西市にはイラン人が多く住み、胡商（胡は唐代ではおもにイラン人を指す）・胡食・胡餅・胡酒など、イラン風の飲食物を売り、サービスする胡姬もいたことが、次の李白の詩「少年行」によって明らかだ。

五陵の年少 金市の東

銀鞍白馬 春風を渡る

落花踏み尽して何れの処にか遊ぶ

笑つて入る 胡姬の酒肆の中

さらに前掲の川柳講座テキスト4の鑑賞篇では、古川柳の中から観察の行き届いた大佳句として、

美しい顔で楊貴妃ぶたを食い

を挙げ、「この当時の日本では、豚を飼つたり、豚肉を食べたりする習慣はまだなかったのに、中国人の常食が豚肉であり、その豚の生態が醜悪だとか、不潔だとかのイメージに繋がることは識っていたようです。それを高貴で美人の典型ともいふべき楊貴妃に取り合わせたもので、改めて考えれば、貴妃が豚を食べたところで少しも不思議はないのですが、不意を衝かれると、美・醜の両端であるこの二つの概念に「思いがけなさ」がはたらいてある種の矛盾にとらわれます。楊貴妃という概念と豚を食うという実体の不調和が笑いのモメントになります。これも、古川柳を代表する機智的発想、つまりウィットによる作品です」と書いている。

ところで、今度の「なら・シルクロード博」や洛陽・西安吟行で、どのような現代川柳がつけられるか楽しみである。

都大路川柳社

創立10周年記念川柳大会

とき 昭和63年11月6日(日)10時開場
ところ ホテル本能寺会館F5大ホール

京都市中京区御池通河原西入ル南側

講演 「鬼の話」

中村 光行氏

宿題 途中 天根 夢草選

結ぶ 橘高 薫風選

樹 小松原爽介選

炎 保木 寿選

析り 森中恵美子選

特別課題 色 山本 磔選

各題2句 締切11時 会費千円

事前投句 都 奥山晴生 共選

本田笑子

事前投句は出席者葉書に2句連記

投句締切 10月5日(欠席投句拝辞)

送り先 〒616京都市右京区太秦垣内町9

井上 信子宛

電話〇七五—八六一—一二二五

懇親宴 ホテル本能寺大宴会場・四千円

事前投句と一緒に申し込んで下さい。

主催 都大路川柳社

★7月号掲載の日時が間違っていました。

初歩教室

題一蜘蛛

阿萬萬的

今月の「蜘蛛」は本当にむずかしかったようです。それは連想される範囲が限られていて、心に訴えるものが少ないせいでしょうか。先ず芥川竜之助の「蜘蛛の糸」を題材にしたものが多かったのですが、

或る本に盲者も紐つた蜘蛛の糸 円 女
お釈迦様に見せた邪心の蜘蛛の糸 ちず子
煩惱の重さに蜘蛛の糸耐えず 喜与志
生臭く生きて登れぬ蜘蛛の糸 和 子
蜘蛛の糸生きた望みにすがりつく 正 子
蜘蛛の糸釈迦もいけずをなさいます 多 織
何れにしても一寸ばかり舌足らずのよう
単独にこれらの句を見せられたとき、ピンと来ないものがあるのでは。

つきは巢を張って獲物待つ姿の句で
網を張りじつと待機の蜘蛛の知恵 一 耕
かかるまで待とう暢気な蜘蛛の網 芳 水
かかるまで暢気に見える蜘蛛の網
獲物待つ蜘蛛の思惑聞いて見る 繁 男
進む世へ気長に構える蜘蛛の性 喜 園

蜘蛛一生餌を待つ身の根気よき 正 之
待つ事に耐える習性蜘蛛に似る ちず子
獲物待つ蜘蛛に根気を教えられ 多 織
耐えて待つ蜘蛛の一念教えられ 由 梨
蜘蛛の糸やっぱり僕にはない強さ ダン吉
蜘蛛の巢を見る度学ぶ生きたる知恵 太一郎
蜘蛛の巢は見方によっては見事な芸術品に
も似ている。

蜘蛛の巢は一夜に出来た芸術品 三津江
蜘蛛の巢の造形正に神秘的 一 耕
コンピュータ以上に蜘蛛の見事な巢 晏
蜘蛛の糸コンピュータはないけれど
蜘蛛の巢の何と不思議なメカニズム 円 女
設計図のないに見事に蜘蛛の巣よ 勝 美
空中芸蜘蛛は見事な巣をつくる 美恵子
蜘蛛見事幾何学的な巣をつくる
だが巣作りも大変なよつてして
蜘蛛だつて必死で張った巣だけれど
生きたため張っていますよ蜘蛛の糸
巣作りの蜘蛛へ無情の俄雨 由 梨
夕立ちが来るのか蜘蛛の逃げ支度 勝 美
蜘蛛の糸突貫工事の芸術家 都姫子
（雨近く巣作り急ぐ蜘蛛の糸）
粘っこい糸でもつれもせで蜘蛛の しんじ
蜘蛛の足纏れず見事な巣をつくる
だがその蜘蛛の巣にも……
よく見れば蜘蛛にも巣作り上手下手 義 重
どの蜘蛛も分相応の巣を作り 志 重
そこで私の昔の句を思い出しました。

夕焼小やけ大蜘蛛小ぐも巣を作る
蜘蛛の巣と夕陽はメルヘンの世界です。
蜘蛛の巣に枯葉一枚揺れている 美 子
下五を「陽が落ちる」としてみては。
蜘蛛の巣をじつと見つめる幼な顔 喜代子
蜘蛛の巣に幼ない頃をふと思つ
遠足へ昨日は天気と蜘蛛が言う
蜘蛛の子が青天井と会話する 小 倉
蜘蛛の子と夕陽の会話へ明日も晴
風鈴と蜘蛛の巣窓で語り合う 三津江
退屈な目に蜘蛛の巣が張り上り
旅の宿日暮れの蜘蛛を見てあかす
朝露の蜘蛛の巣お伽噺めく 保 夫
（メルヘンの世界蜘蛛の巣朝の露）
蜘蛛の巣が朝日に光るみかん畑 芙美子
山門くぐる朝一番へ蜘蛛の糸 喜与子
（山門の朝日に蜘蛛の巣が光る）
軒先の蜘蛛の動きは風まかせ 金 吾
街灯に蜘蛛の巣があり薄あかり 喜代子
私なら下五を「黄昏れる」とする処だが
進む世へ蜘蛛の巣作り進歩せず 喜 園
蜘蛛の巣が張って静かに眠ってる 小 鹿
そんな蜘蛛にも敵はいろいろと。
運悪い蜘蛛腕白の目にとまり 静 子
消毒が効いておぞまし蜘蛛いない しづ子
蜘蛛だつて不満でしようねスミチオン
人間の本音が怖い蜘蛛と住む 遊 光
蜘蛛は蜘蛛で人間こわいと言っている
蜘蛛の巣も埃と吸いこむ年の暮れ 遊 峰

(埃と一緒に蜘蛛掃除器に吸い込まれ)

蜘蛛よ蜘蛛安眠出来るここに住め 菊枝

土蜘蛛も雀の雛の離乳食 方子

だが敵は仲間の中にも居るらしく...

黄金蜘蛛聞いながら落ちて行く 登代

蜘蛛喧嘩敵打ち落す鮮やかさ 正之

(喧嘩に負けた蜘蛛が落ちてく糸光る)

長患いの病窓に見る蜘蛛も一つの楽しみか

も知れません。 義

長患い蜘蛛の一生見とどけた 病窓に獲物日ねもす蜘蛛と待ち 金吾

病臥窓ひねもす蜘蛛とねんごろに 章久

(病窓からひねもす蜘蛛を見てあかす)

蜘蛛の巣にかかった虫に自分の身をあては

めてみて...

蜘蛛の糸がんじがらめで目が覚める 美子

もがく程がんじがらめの蜘蛛の糸 志洋

蜘蛛の巣のとんぼ或る日の我が身かも 方子

蜘蛛の巣にかかると我が身を親る 明吉

(蜘蛛の巣の蝶に我が身をふと思ふ)

蜘蛛の巣の真ん中にある独占欲 隆雄

(独占欲の真ん中に蜘蛛がいる)

夜の街には男を漁る女郎蜘蛛がいて...

からだ中精気精気の夜の蜘蛛 すみれ

濡れ乍ら今日も待つてる女郎蜘蛛 つえ子

かかっても見たたくて女郎蜘蛛の巣に 晏

ネオンの灯網を張ってる女郎蜘蛛 富恵

逃げるのも翔ぶのも駄目な女郎蜘蛛 章久

細い眉ネオンに蜘蛛の巣の如く 数彦

蜘蛛ばかりではなく世の中には巧妙な手口で私達を脅やかすものもあります。

蜘蛛の巣に追いつくような詐欺の罟 時広

黒幕は蜘蛛の巣のよな網を張り 時広

(黒幕は蜘蛛の巣に似た網を張り)

蜘蛛の巣を張りて買物客を待つ 和多留

(蜘蛛の巣を張るようバーゲン客を待つ)

一寸の虫にも五分の魂、蜘蛛にだって...

弱るのをじっと待つてる蜘蛛の智恵 志洋

大物がかかれば逃げる蜘蛛の知恵 治

驚いた蜘蛛は団子になって落ち 遊峰

叩かれて死んだ振りする蜘蛛の知恵 つえ子

ふっと私は豆秋さんの句を思い出しました。

夜の蜘蛛死んだまねしたままで死に 豆秋

ではここらでもらもの蜘蛛たちを...

蜘蛛の巣に平和を見た無精髭 数彦

(蜘蛛の巣に平和な村は夕焼ける)

あばら家のセツト蜘蛛の巣本物が 登代

(蜘蛛の巣もつけてセツトの陀住い)

辻堂の蜘蛛の巣越しに慈顔仏 サワ子

下五慈顔仏は固過ぎて仏さま位にしては

根性むき出し蜘蛛だと嫌われる 治

(根性むき出し蜘蛛のようだと嫌われる)

蠅を取る蜘蛛が天井で待機する とく子

蠅とり蜘蛛とぼけた姿で餌を待つ

情報の役目を糸に蜘蛛は待つ 繁男

蜘蛛は巣で世界のニュースひとり聞き 成明

(蜘蛛は巣で風のニュースを聞く如く) 大阪の町蜘蛛の巣のようなど人は言うミツエ

(蜘蛛の巣に似てる都会の道があり)

蜘蛛の巣の糸乱れぬ日のこわさ とく子

(蜘蛛の糸乱れず雨の近い山)

蜘蛛の子の利巧は八方散って逃げ しんじ

(蜘蛛の子の知恵は四方に散って逃げ)

さて最後は添削なしで...

蜘蛛の子を散らして夕日寂しそう トキ

隣家との伸をとり持つ蜘蛛の糸 みね

夜の蜘蛛老いの言葉に助けられ 三倉

朝蜘蛛に今日の何かを期待する 芙美子

不機嫌な顔に蜘蛛の巣ひっかかり 都姫子

蜘蛛の巣に顔撫でられたかくれんぼ トキ

ルーベには何と怖ろし蜘蛛の貌 サワ子

蜘蛛の糸手繰れば祈り深くなる 富恵

蜘蛛も又生かされ生きて朝迎え 太一郎

箒手に蜘蛛の動きに口を開け 志重

強かに見えて悲しい蜘蛛の性 遊光

ファッションにまで蜘蛛とり入れて蜘蛛マニア

六十九コツコツ張った蜘蛛の糸 隆雄

廃屋の時間を止める蜘蛛の糸 和子

蜘蛛の巣が同じ所に旅戻る 多織

課題「蜘蛛」はむずかし過ぎた様ですね。

では又来月を期待しています。

題「台詞」 9月10日締切(11月号発表)

ハガキに5句以内

「結ぶ」 10月10日締切(12月号発表)

宛先 〒598 泉佐野市中庄一〇八一—九九

阿萬 萬的

力

渡辺善句選

力入れ力抜くコツ筆の生き 秀峰
 力瘤ギリシヤの男になるポーズ どんたく
 国曳きの神にもあつた力ずく 美代子
 何よりの力達者な母が居る 典子
 なんだつて金の力が物を言い みね
 やんわりと真綿でくるんでる力 太郎
 持久戦なら負けはせぬ力こぶ 知恵子
 スクラムを組んだ力に負けている 寿恵子
 その中に力自慢の蟻もいる しげお
 どたん場の力が出した事はない 白溪子
 握り飯日本の力支えてる 多賀子
 力ある限り尽くすと候補言ひ 抜智
 過疎の地へ急行停める政治力 鉄治
 金もなく力も無くて隅に居る 敏之
 力には力が似合うかぶと虫 ただし
 票明けて金の力を知りました 明水
 桃太郎さんこの世は金の力です 恵美
 戦力はないたてまえの自衛力 正坊
 力なら奴センスなら俺と決め 次男
 力瘤見せて大漁の網を引き 早苗
 わたしこの頃瞬発力がなくなつた 螢
 力にもなれず涙を拭いて聞く 玉恵

コーヒ一杯サラリーマンの力水 章久
 くたびれませんか仁王の力こぶ 倫子
 金力はないが愛情なら負けぬ 夢酔
 金・力無くても二世を誓う仲 サワ子
 力こぶ出来てにきびも出始めて 新造
 捉えたら放さぬ力豆の蔓 宵明
 庄屋の庭に力だめしの石がある はるお
 お守りが内ポケットにある力 通彦
 難病に神も仏も無力なり やすお
 馬力とはどんな力と孫が聞く 良江
 聞くだけで力にならぬ私です 博子
 力ではもう勝てません子の育ち ちかし
 伸びるなら伸ばしてやろう子の力 正敏
 力んでもおんなの力しれている 克子
 芸人を殺す力を持つ欠伸 正敏
 胎動へ母となる日の力湧く 純子
 力学を梃子一本に教えられ 勝美
 点滴へなんの力も貸せずいる 京子
 職安で力瘤など見てもらい 京子
 実力を出せたらみんな校長です 保
 人
 力んでる間まだまだ青二才 公一
 地
 尻尾振るそれも一つの演技力 大柏
 天
 馬鹿力出し一匹の蚊を叩く ちよ
 軸
 運命線変えるこの僕この力

隙

仲 どんたく選

隙見せぬ女独りのティーカップ 奈美子
 五時からの男の顔の隙だらけ 白光子
 二世代の笑顔を抜ける隙間風 高子
 隙のない「はん」の納める舞い扇 遊峰
 隙のない姑も焼き芋好きである 多織
 易の灯へ急ぐ或る日の隙間風 達子
 奉加帳の隙間へ世相浮いている 三枝子
 ときめきの隙間にピンクの蝶の舞う 三五島
 後取りの隙を狙うた白い風 ただし
 白昼夢隙ある女に風抜ける 洛醉
 脳細胞に隙き間のできる冬木立 枯梢
 無意識の言葉が生んだ隙間風 志重
 隙一つ見せぬ猿には餌も投げぬ 虹江
 独り寝の隙間も風衣重ね 旭恒
 人間の涙科学の隙を埋め 四郎
 生け垣の隙から貰う隠し味 正敏
 人間味生きる旅路の隙間風 朴竜
 隙間から還って行ったか亡妻の霊 喜久夫
 あれからの兎と亀に隙がない 保
 父と子の隙間に妻の温い風 ちかし
 さそいの隙とは知らぬヤジロペー 雀踊子
 どさくさの隙に紛れるおちよば口 豊

記 憶

曾我部 裕 選

毒花の誘いの隙に乗って見る
隙間から月をながめている独り
教育ママの居ぬ間は下ろす縄梯子
母さんの後ろ姿に隙がなく
背と背合わせで防ぐ隙間風
隙間から暮らし覗いているネズミ
叱る子へ逃げる隙間はあけておく
カーテンの隙間女を自覚する
隙間の誤算ドミンがピタリ休止する
隙のない男の肩にフケが落ち
幸せを逃がしてならぬ指の隙
偏差値の隙間にあった人間味
追憶の糸が揺れてる隙間風
同じ輪の中で夫婦にある隙間

抱きしめる隙から毬は飛んで行く
割込める隙を熟女の目が探す
夫婦の絵色褪せて行くすき間風
蛸壺に寝ていた隙を責められる
隙間風それから男と女なり

無精髭知性の隙をためらわず
隙のある女で明日の米を研ぐ

鍵っ子の隙間を埋める母のメモ
黙秘権夫婦は隙をもてあまし

喜与志 章久
はるお 秀峰
玉恵 佳雲
純子 寿美
理恵 素身郎
悦子 緑良
老平 明水
よし津 草人
京子 雄々
露児 勝美
砥代 美
恵子 子

ふたしかな記憶どっちも出てこない
ふる里のことはすっきりする記憶
姑さんの記憶が良くて嫌われる
アルバムの記憶が一つ一つ消え
記憶してくれる機械に譲る椅子
肩車父のない子にない記憶
記憶にも尾びれが付いて回顧録
憶測を誤る罪な記憶力
結び目がゆるめば記憶がしゃべり出す
武運長久を神はずっぱかした記憶
せめて三日なりたい記憶喪失症
自然破壊自然はちゃんと記憶する
記憶から赤いリングがまだ消えぬ
フロッピーにも入れたから大丈夫
思い出のメロディどこかで脱線し
シベリヤの根雪が記憶から消えぬ
二日酔い昨日の記憶点減し
救急車の音まで知っていた記憶
毒舌で補いきれぬ記憶力
倅せに馴れて記憶が薄れゆき
コンピューター愛の記憶ができますか
パパは忘れた私との初キッス

暁明 京子
秀峰 明水
どんたく 章久
鮫虎狼 孝平
玉恵 可住
枯梢 亭
佳雲 やすお
明吉 重人
正坊 悠泉
奈美子 悠泉
ただし 悠泉

記憶の端の端にも残っていない僕
ちぎれ雲つなぎ合わせている記憶
孤児にした記憶を辿る赤い糸
二度童子遠い記憶の中で住む
原点に還る汚れない記憶
特攻の記憶が消えぬ飛行雲
破調の生徒記憶の中でとび廻る
記憶の隅で生れた家が揺れている
記憶から外しておこうきのこ雲
忘れ上手な妻の記憶が耳うらに
夕やけの唄の記憶は貧しい日
孤児の記憶に紙ヒコウキが舞う
記憶喪失のままが仕合せかも知れず
少年の日の記憶には雨がな
恍惚の老母の記憶にある故郷

素身郎 寿恵子
公一 高夫
鉄治 晏
喜与志 虹汀
雀踊子 雀踊子
洛醉 三枝子
白漢子 白漢子
露児 露児
元江 元江
砥代 砥代
静子 静子
弘朗 弘朗
白光子 白光子
宵明 宵明

川人も清く流れていた記憶
零歳の記憶へ英才教育を入れる
苦勞した記憶楽しそう誇る
還らない僚機を待っていた記憶

規不風 兼治郎

柳 界 展 望

集録一敏・武庫坊

★「犬吠」誌7月号は、「豆秋五〇句」と題し、須崎豆秋の作品と経歴を紹介。

★NHK学園川柳講座会誌「川柳春秋」10号に石原伯峯氏が「酒と川柳」と題し、麻生路郎師や浜田久米雄氏、大森風来子氏等と出会った初心時代を執筆。

★はびきの市民川柳会は、七月二十一日〜二十四日開催の第5回非核・平和展に作品を展示。

★塩満敏氏（羽曳野市・常任理事）は、「ねぶた」誌七月号のすいせん句抄に執筆。

★大阪市淀川区のコミュニテイ新聞「ザ・淀川」が、「川柳泉尾」の句を連載中。

★河内天笑氏（堺市・常任理事）は、「ねぶた」誌七月号のすいせん句抄に執筆。

★小樽川柳社・北海道川柳連盟は昭和六十二年度の各賞を発表。

★河内天笑氏（堺市・常任理事）は、「ねぶた」誌七月号のすいせん句抄に執筆。

★塩満敏氏（羽曳野市・常任理事）は、「ねぶた」誌七月号のすいせん句抄に執筆。

・北海道川柳年度賞
高橋 蘭

★塩満敏氏（羽曳野市・常任理事）は、「ねぶた」誌七月号のすいせん句抄に執筆。

★塩満敏氏（羽曳野市・常任理事）は、「ねぶた」誌七月号のすいせん句抄に執筆。

北出 郁子
進藤 一車

★堀江正朗、中川幸一、園山多賀子三氏の喜寿祝賀句会が7月24日いずも川柳会主催で開催された。益々の御健康と御健吟をお祈り致します。

★中原颯人氏（鳥取県・同人）は、「川柳春秋」誌10号わたしの川柳作法欄に、「真・情・美をもとめて」と題し執筆。

★七月二十三日〜三十一日
新世界・通天閣で開催された「平和のための大阪戦争展」に川柳作家三十三名の作品が展示。この期間、同展參觀者は十九万名。

★東野大八氏（美濃加茂市相談役）は、「柳宴」誌7月号に「あははの三太郎」と題し執筆。

★竹内寿美子氏（松江市・同人）は、「川柳東京」誌8月号に「おもちゃ美術館」と題し執筆。

★吉永川柳社は、七月十七日、恒例の「うどん祭り」句会を金剛荘で開催。

同誌8月号には、「終戦秘話・天皇の裁断」、また、「き

★山本規不風氏（京都市・本社理事）は、「川柳京がみ」誌62号の作品鑑賞欄

同誌8月号には、「終戦秘話・天皇の裁断」、また、「き

★山本規不風氏（京都市・本社理事）は、「川柳京がみ」誌62号の作品鑑賞欄

★山城武庫坊氏（尼崎市・常任理事）は、もくせい川

同誌8月号には、「終戦秘話・天皇の裁断」、また、「き

★山城武庫坊氏（尼崎市・常任理事）は、もくせい川

★山城武庫坊氏（尼崎市・常任理事）は、もくせい川

大原川柳300号発刊記念川柳大会

とき 昭和63年9月25日(日)午前9時開場
ところ 大原町総合センター(町役場内)
電話〇八六八七七八一三七五

お 兼 会
話 題 費
一、五〇〇円(軽食・発表誌恵)

「慌てる」 本田 恵二朗
「続く」 河内 天笑選
「流身」 遠藤 枯葉選
「変れ」 岡本緑風子選
「育つ」 富永 邦坊選
「足跡」 森田 熊生選
「見事」 神原日出夫選
小林 妻子選

投 句 五〇〇円 締切9月20日左記へ
岡山県英田郡大原町下庄町
電話〇八六八七(8)2607

小林 妻子
主催 大原川柳社

三面鏡に執筆。

★小林由多香氏（鳥取市・本社参事）の句が「ますか」と八月号の「川柳女心」と男心(4)に。
表彰へ妻ひかえ目な位置にいる 由多香
★新谷笑痴氏（堺市・本社理事）は8月4日、堺労災病院でガンのため逝去、69歳。告別式は5日、鳳西町

★岩本雀踊子氏（桜井市・常任理事）は、小松市のわかまつ川柳社の客員第一号に推薦された。

会館で行われ、栗主幹はし

め天笑、月子、岳人、一二
三、千万子氏らが列席した。

▽お便り△

★栗主幹より

グループ旅行で始めて佐渡
の地をふみました。

レットルのマツチの柄も

島踊り

★林荒介氏（米子市同人）

七月十三日きやらばく勉強
会を島根半島の海の見える

民宿（平田市河下港）で開

催。貝の五目飯を賞味し、

よい句が沢山生まれました。

★波多野五楽庵氏（弘前市

同人）

七月三日工藤甲吉氏（青森
市・参事）をはじめ十二名

参集、川柳塔あおもりの総

会を開催し、甲吉氏が相談

役、叶氏が事務局長、私

が代表で発足致しました。

★児島与呂志氏（和歌山県

参事）

根来の里で蟬の声を聞いて

おります。皆様によろしく。

★石曾根民郎氏（しなの川

柳社主宰）

五五〇号記念特別課題募集

についてご協力ありがとうございました。

★波多野五楽庵氏（弘前市

新同人紹介

相馬一花

小寺花峯

以上 栗・薫風・甲吉・五楽庵推薦

援をお待ちしております。

★朝山千世子氏（西宮市・
同人）

私も平均年齢を越して早や

五年、川柳と謡曲に支えら

れて日を送っております。

平均寿命越して張りある

声の艶

▽新刊△

★噴煙叢書第五集

迫口矢城「幾山河」

B6判・一四〇頁・五百円

発行所—熊本市南熊本四の

二の五 吉岡茂緒方 川柳

噴煙吟社

★保木寿第三句集

『寿苑』

A6変型判・千五百円

著者住所—京都市中京区西

ノ京上平町

▽訂正△

★本誌七月号92頁下段の都

大路川柳社創立10周年記念

川柳大会の開催日は11月6

日（日）です。

★本誌七月号4頁下段、倉

敷市小野克枝さんのお名前

が間違っております。

本社 八月旬会

八月八日(月) 午後六時
メンスフアツションセンター

スペースがないのでお話の要旨は省略(スミマセン)。月間賞は墨作二郎氏が獲得

(進行)敏・天笑 (受付)年代・藤子
(記録)射月芳・月子

出席者―笛生・作二郎・悦郎・芳子・柳影
眉水・英壬子・武庫坊・年代・恭昌・東雲・
寿美子・藤子・満津子・典子・白溪子・颯云
児・達子・三男・萬的・福本英子・重人・勝
美・一高・柳宏子・朱夏・みね・千秀・靖子
幸・太茂津・栞・紫香・美智子・小林英子・
しげお・形水・勝晴・凡九郎・章久・章・頂
留子・狸村・正坊・庸佑・喜風・薫風・史好
浩一郎・英一・外吉・タン吉・女・智子・
泰子・冬葉・岳人・柳伸・敏・柳右子・憲太
郎・文秋・洋敏・幹斎・楓楽・光代・度・は
つ絵・いわゑ・みつ子・小路・吸江・昭子・
美代子・寿美・規不風・美房・雀踊子・元紀
射月芳・天笑・月子・吐来・鬼遊・寿子・亜
成・良子

席題「うなぎ」

久保田 元紀 選

台湾の鰻は残すつちの猫
ベトナムのうなぎはもやの味になり
キューバのうなぎはほんにアロポース
流暢な英語で食べているうなぎ
うなぎにも東の味に西の味
うなぎさえ棲むのを嫌う大和川
災難のうなぎに二度の土用丑
土用丑二度ある年は二度喰べる
丑の日のうなぎ買わないことにする
腹切はえんぎが悪い背びらき
お隣りも蒲焼きらしい換気扇
お人好しの大坂弁で喰うまむし
うなぎで吐かすつもりでいる刑事
満たされた暮し土用の皮は口にせず
ライバルは昼にうなぎ喰っている
スーパの鰻は値段だけの味
雨漏りのころのうなぎは旨かった
あの頃ははんすけばかり食べていた
おさしみかうなぎでもめている夫婦
一匹分のうなぎを食べたことがない
組員の資金にされている鰻
丑の日に張り合う鰻屋牛肉屋
航空便うなぎに南十字星
半助となつてウナギも意地を見せ
エリートで四万十川に棲むうなぎ
墓参り帰りはまむし食べてくる

一高 笛生 幹斎 浩一郎 庸佑 一高 笛生 満津子 東雲 風云児 萬香 紫香 柳右子 射月芳 武庫坊 はつ絵 外吉 いわゑ 眉水 天笑 正坊 章 丹吉 泰子 美代子

炎天を来ていづも屋に誘われる
うなぎ泣く声聞いてから食べられず
いつもやへいこうと女よく粘る
養殖のうなぎでみんな太つてる
鰻丼が大阪が好き人が好き
鰻さく手付見とれた少年期
スーパのうなぎが少し痩せている
ママの手にかかるとおとなしい鰻
うなぎ焼く匂いけだるくなつて
柴藤の裏で鰻はだだをこね
うなぎみたないお人でっせと人の口
うなぎ重にさしてびっくりせぬ平和
うなぎ食べる日に家に居たことがない
身籠つて嫌いなうなぎ食べてみる
ふるさとを決して告げぬめそである

作二郎 柳影 良子 洋敏 靖子 武庫坊 英一 一高 作二郎 小路 冬葉 月子 元紀

席題「化ける」

田頭 良子 選

どう化けてみても人間には負ける
化けすぎた女を嫌う自動ドア
何に化けても残つてしまふ国訛
化けてまで出てくる程の未練なし
地上げ屋がお化け屋敷に手を染める
化ける程生きて女は紅を塗る
まだ狸化ける自信を持っている
化けの皮剥くのは少し待ってやろ
お化け屋敷のバイト人間臭い汗
化けて出る程のお方やおまへんねん
すこしずつ自分を化かす風の中
化かされてあげているのを御存知か

美房 寿子 藤子 みる 吐来 東雲 女 光代 英一 柳伸 柳伸 泰子

お化けよりこわい都会の真昼間
化けてこれかいたと鏡手敵しい

兼題「波」

福本英子選

よめはんがなんぼ化けても知れてる
化けて出るほどの未練はもつてない

島の絵を描いたら波が唄いだす
穏やかな波に人間欺される

美代子
洋敏

化けるのは止めて動物園に住む

愛という砂文字波に攫われる

勝晴

ポルシェに乗るとええしの娘に見える

あすなろう波の高さを見て飽きず

美代子

化け方が下手で白洲に呼び出され

望郷は波の音きく流人墓

雀踊子

途中まで化けて尻尾をつかまれる

潜水艦の波がうやむやに消える

英一

四、五歳はいつも化けてる定期入れ

波の音やっと結婚できました

重人

血税がひよんなものへと化けてゆく

押し寄せる波へもう生まれるか生まれるか

亜成

化けてやるなどと嬉しいいやがらせ

花束を投げると波がすすり泣く

千秀

まだ化けてないお隣りが目をそらし

テトラポットの辺りへ消えた波の私語

芳子

化かされて上げる小皺がふえるから

権力の波に逆らう原稿紙

柳宏子

自分まで化かしてどないしやはる

平凡を操り返しての波の音

典子

化けるのが下手で冷や飯組にいる

小波を侮りテート沖へ出る

形水

ほんとうにうちの妻なら化けて出る

波風をたてに娘のUターン

柳影

人間やったんかとびっくりした狸

貧政を叱るジョッキが波立てる

耕花

化け損なったと出連う遊園地の便所

波枕背中合せのフルムーン

章久

三分で化ける母ちゃん待っている

遠い日のさざ波がある日記帳

幸

輪の中で化けているのは俺だけか

打ちよせる波が多情にしてしまい

吸江

化けるのがうまくなったら別れよう

人恋しひねもす波を聞く孤独

三男

よほどの恨みお昼に化けて出る

領土でも南島島見え隠れ

東雲

化ける程生きているのに医者に行く

波ひとつ無いから石を投げてみる

緑良

お化屋敷の切符を売っているお化け

龍宮へ行ける波なら乗ってみる

泰子

化けるのが下手で男を下げてくる

ラストシーン波は静かに過去を消す

寿美子

死に際に化ける余力をとっておく

波のある人で機嫌が取りにくい

諷云児

どう化けてみても神経痛がでる

失言の余波のお返し強く来る

昭子

わたしならサンバ鳴らして化けて出る

大波小波笑い話にして夫婦

重人

川柳塔鹿野みか月

結成満8周年記念大会

日時 昭和63年10月16日(日)9時半

会場 鹿野町農業者トレーニングセン

ター(JR浜村駅下車バス15分)

鳥取県気高郡鹿野町鹿野

電話 0857(84)2131

お話

「天」 高杉 鬼遊
「巻く」 西田柳宏子選
「奥」 土居 耕花選
「似る」 岩本雀踊子選
「紋」 寺尾百合子選
「粒」 塩満 敏選
「太い」 両川 洋々選
林 荒介選
江原とみお選

会費

一、五〇〇円(軽食・発表誌呈)

懇親宴

一、五〇〇円(10月8日までに投

句先へ予約のこと)

各題2句・締切11時

投句

一、〇〇〇円(10月3日消印まで

小為替希望)

宛先 〒689-04 鳥取県気高郡

鹿野町鹿野1279

中原諷人方

川柳塔鹿野みか月事務局

電話 0857(84)2100

波の立つ噂を撒いて蝶になる

波乗りの巧さが見落す沖の雲

ひと夏の恋をさらっていった波

ポーカークフェイス波を恐れているらしい

波の音一期一会の別れ唄

恋捨てた海とも知らず波しずか

彩のある噂を波が運んでる

兎とワニの神話を波が言うている

八月の波よすこしお静かに

波もろにかぶつてしまふ雑魚の群れ

流行の波に呑まれてゆく個性

波頭あしたは逢えるかもしれぬ

政変の波で停電しています

波に乗った頃は人材揃うてた

少年と波長が合っている少女

八月の風波に恨み溜めている

兼題「競う」

板尾岳人選

競うてるうちに手の内読めてくる

お隣りと競い合ってる疲れてる

お隣に負けるな妻の鞭が鳴る

無器用で競い合うこと避けている

イミテーション同士競っている愚か

世間並の中流意識が爪を研ぐ

ライバルとしての意識を持ちつづけ

旅人となってわんこ蕎麦競う

山彦と競う言葉は河内弁

折り返すゆとりは敵の息づかい

遊んでも競い合う癖抜けられず

規不風

千秀

朱夏

楓楽

美房

いわゑ

武庫坊

早苗

月子

度

満津子

美智子

英壬子

文秋

岳人

福本英子

競うてるのはアンタやわてらは応援や

競う日の決意へ血潮わいてくる

競うてるママへしようことなしに塾

隣より百円高い肉を買う

うちとこと隣の柱見競べる

競うてもかなわぬすみれ野を出ない

父と子の或る日昼競い合う

競う花あくまで白く光らせる

お隣はアナゴうちのは鰻寿司

世間はなししながら指輪比べてる

向う岸へ競うて渡る泥の舟

競争は苦手みどりの風が好き

菊作り競い秘密が増えてゆく

一流が競うと絵になり詩になる

お隣はもう買いはったと妻が言う

競い合う薔薇コスモスのみな憎し

シャンデリアと競うあなたの美しき

競わせる教育ママからぐれ始め

競うことなどは知らない水ぐるま

競い勝つおんなゴム長洗ってる

競うてもどんぐりたちの群の中

ページ数だけを競うて軽い美女

横一線並ぶと競うてくせが出る

衣装競べになるのが嫌で欠と書く

恋の数五月みどりと競い合う

競う日の女同じ鏡見る

ちよっとしたお喋り競う湯のけむり

父と背を競う男になりたくて

グランドを風と走ったこともある

凡九郎

寿子

小路

柳宏子

満津子

典子

形水

悦郎

耕花

外吉

いわゑ

みつ子

年代

洋敏

吐来

藤子

史好

柳右子

幸

小路

小楽

楓

良子

昭子

文秋

泰子

悦郎

瑞枝

荒介

イントロの前から二人とも走る

人間哀しや死ぬまで競い合い

競う気はないが地震きつと来る

ロボットは競わぬ事に決めている

競うのはとても嫌いなねぎ坊主

トップの座競う男が読むマンガ

競わねばならぬ宿命バラの棘

倅せを競うてトマト赤くなる

紅一点だったところへ一人来た

幻の樹に登らんと男たち

哲学を競う味噌汁食べている

かたつむりお前と競うことにする

美男美女競うて候夫婦にて候

兼題「取引」

飯田悦郎選

取引きを一つまとめたたばこの輪

取引きの場から始まるミステリー

取引のやじろうべいが揺れ止まず

馬喰さんの取引牛も涙ぐむ

取引きに疲れて渡る長い橋

取引の皿で暗示をかけられる

取引は裏ですませて本会議

取引が下手で嫁さんもらえない

取引きにまず現金の顔を見せ

悪くない取引なのに気がのらぬ

取引はもう済んでいる舞台裏

取引に裏も表もない誠意

自由化へ下手な取引強いられる

取引が終わった後のうまい酒

千代

天笑

小路

耕花

正坊

寿子

典子

楓

外吉

荒介

幹

みつ子

岳人

いわゑ

美房

はつ絵

幹

みつ子

射月

眉水

勝

藤子

正坊

重人

笛生

吸江

神様は誰とも取引なさらない
 取引に水際立ったのが敵に
 取引が見もの息子の初仕事
 六法を読んで取引考える
 欲出した取引お金戻らない
 与野党の取引民は棚上げて
 取引をまるく包んだ二枚舌
 取引の種にされてるかすり傷
 それとなく取引相手へけん制球
 取引が無かったから考える金の事
 取引のことには触れず呑みにゆく
 嫁姑裏取引して平和
 見通しが甘く取引棒に振る
 甘く見た女のペースにはめられる
 役人の取引汚職の匂いする
 取引に知らない人がついてくる
 敗色が濃く取引をせまられる
 取引にいつも個性を捨ててない
 取引きに行く靴下を履き替える
 取引のためのジョークをたくわえる
 商談成立姐さん酒持ってこい
 取引に負けて地下鉄まで歩く
 取引と言いつ途のさぐりあい
 取引は秘書先生の知らぬこと
 損得が絡み取引宙に浮く
 涙を吞んで取引先の無理をのむ
 絵馬ゆれて取引出来る橋となる
 暗号で取引きをする裏帳簿
 背伸びなどせぬ取引きにあるゆとり

満津子 眉水 早苗 雀踊子 昭子 三男 寿美子 泰子 形水 綾珠 いわゑ 恭昌 諷云児 柳宏子 三男 洋敏 ダン吉 凡九郎 福本英子 幸 勝晴 作一郎 頂留子 千秀 諷云児 年代 瑞枝 浩一郎 寿子

旨すぎるはなし取引見送ろう
 損のない取引だよとさそい水
 朝市のおばさん海老を跳ねさせる
 取引きへ狐うどんを食べさせ
 兼題「都会」 大坂形水選
 大都会のめし屋に僕の午後がある
 一握りの土で朝顔の咲く都会
 腹立てていたら都会で暮らせない
 そばする窓で都会を切り離す
 あこがれた都会でやけどの飯を食い
 高層ビルの谷間で豆腐屋待っている
 島の夢ばかり見ている都会の灯
 都会では山の清水を売っている
 故郷の母便利な都会に居すわる気
 情報を吸収都会の二十五時
 都会には背を向けているやじろへえ
 ビルの上田舎をのせてある都会
 提灯が朝まで灯いている都会
 霊迎え都会の路地にある暮し
 都会の場末に善人だけの酒がある
 都会にはやっぱり鬼が棲んでいた
 都会には毒も薬も邪も正も
 大都会酸欠味のプラタナス
 都会の裏で住み馴れている鳳仙花
 都会から大八車遠ざかり
 ツインビル都会は少しずつ沈む
 視野にまだ都会を残すUターン
 陰と陽都会の夜を纏うて更け

天笑 頂留子 英一 悦郎 幹齊 重成 史好 作一郎 美代子 鬼遊 天笑 昭子 幸 度 かげお 元紀 敏 章久 靖子 年代 岳人 度 緑良 どんたく

物音が無いと不安な都会人
 出稼ぎの父が帰らぬ灯の巷
 ターミナル都会が吐息ついている
 都会は乾いてひどく咳きこむ猫がいる
 処生術熟で覚えた都会っ子
 都会から美人になって孫帰る
 都会から美人になって孫帰る
 お祭りの寄付が都会に夏を呼ぶ
 蛇の出る村から街へ通てます
 いい服は都会で買ったことにする
 恐ろしい都会の隣わからぬ
 ガラスの森で今日も傷つく人がいる
 ご都合主義のまなごが都会の隅にいる
 くだびれんうちに都会を抜け出そう
 いけにえの羊都会の闇で死ぬ
 八月の都会でにぎりめしを食う
 都会から嘘をとときき書いてくる
 小便小僧が居るから都会なつかしい
 都会での余生をダンスなど習い
 (清記・楓楽)

満津子 荒介 満津子 千代 恭昌 諷云児 白浜子 天笑 妻子 東雲 亜成 良子 天笑 英一 早苗 作一郎 形水

近畿文字放送作品集 選
 題「顔」 橋高薫風選
 3句 締切 9月15日
 ハガキに明記の上、左記へご投句下さい
 〒540 大阪市東区谷町2丁目36
 大手前ウサミビル3階
 近畿文字放送 川柳係



締切毎月25日。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。
担当・玉置重人

川柳後楽

井上柳五郎報

大正の音で開いた蛇の目傘
春雨に特価の傘を妻とさし
初恋の人によく似た傘の人
老いぼれに入れて貰えぬ傘がある
母の味カレーへ煮込んで旅三日
梅雨を越すカレーに汗を吹き出させ
あやまろう冷えたカレー食べながら
剝製の辛さ涙も流さない
剝製の驚も夢見る飛翔の日
剝製に昔を語る詩がある
牛肉オレンジ済めば米まで議事にされ
五大峰女性パワ―に最敬礼
騒音へ聞く耳持たぬ時刻表
健康を聞けば老いとお酒と米寿言ひ
一升は軽いと老いのまだ達者
百薬を大事に飲んで古稀迎え
健康な家族汲み取り料かさみ
健康がひとり勝手に散歩する
健康でよく食べよく飲み少しほけ
我がままが言える大きな傘の下

鮫虎狼 青銅 哲郎 美智子 照路 草風 番茶 柳五郎 桃風 博友 義進 佐加恵 吟平 金吾 文平 拓治 秋月 玉水

過疎の里日の丸出して村平和
川柳藤井寺 赤木 和子報

紫峰 志洋 ときお 三郎 スミ

梅雨晴れて銀翼まぶし練習機
宿下駄で干物の土産主婦となる
縁結び神様お留守一人者
心まで売らないつもり一票は
結ばれて纏れもしたが切れもせず
心から話せる友が欲しいだけ
小説は美男と美女が結ばれる
盃へ両家を結ぶ酒を注ぐ
灰皿にまだくすぶっている主張

初枝 敦子 好太郎 秀伸 清心 幾

未だ飲む気屋台を覗く千鳥足
失敗が恐くて渡れぬ虹の橋
老妻の心の底に有る謀反
お天気屋今日はちよつぱり低気圧
人間の無駄でなかった廻り道
人生の弱さみくじに覗かれる
絵の具皿今日の心を混ぜ合わせる
聞く度に老化ですよと医者が言う
難民の地獄覗いて来たカメラ
ゆつたりと命味わい花しほむ
大手術すませた医師の仏顔
値上がりを待ってる畑瘦せている
一步だけ引くと女が女らし
王冠も小石も宝子のポツケ
女名前の病室ちよつと覗かれる
覗きたい机の上の娘の日記
手の内を覗いた鬼が笑ってる
天気予報狂って茶の間の握り飯
受け皿があるから絶えぬ天降り
父の日のビールは妻が買ったもの
覗き込む子に芋一つ呉れてやる
肩揉んで呉れる孫にも下心
受け皿がなくて万年係長

美房 繁男 昭子 与呂志 伴子 つやこ 婦美枝 美佐 喜道 風来坊 末一 祐二 和美美 雅美 ふゆ 作秀 正枝 政代

三幸川柳教室 桜井 千秀報
ふる里はねんね根来の子守唄
オリンピックク出してやりたい仁王様
僧兵もかくやとばかり仁王立ち
奥の院さい銭箱もさすがなり
新緑の薄日がもれて水子塚
ふり向けば負けとこらえている背中
縄飛びの縄を預けた地藏さん
山脈が続く明日を疑わず
万緑やお不動さんは厨子の中
根来寺のつまずく石にもある歴史
かね一つ響いて百円空に消え
ラッシュアワー羊の群れに逆らわず
揺れ動く愛の弱さを見透かされ
親ゆずりの大根足が歩きよい
名刺で作務衣の僧に声をかけ
世の動き老いの命が流される
鯉の餌を一番のりで撒く勇氣
頭より先に情性の手が動き
時よ止まれ根来の緑ほしいまま
ひとくちめのビールに動くのど仏
借りに来て愚痴長々と聞かされる

正秋 可笑 孝子 重次 当代 和子 千万子 桂香 薫風 幸子 公子 慧梢 小雪 楓 半銭 春香 敬子 かりん 茜 天笑 重延

抜けようかまだ粘ろうか長い列
 ライバルと長さを競う棒グラフ
 長のつくポスト知らない父の靴
 待ちわびる時の重さよ砂時計
 靖国の戦友へ長寿の気が重い
 長すぎた春が絆を強くする
 拘りを捨てれば長所見えてくる
 長いトンネル抜けて日差しが柔らかい
 釣り合いの長さで揃う夫婦箸
 長針のリズムに決断迫られる
 訴えた割りに短く書くカルテ
 野いばらが香る短い旅に出る
 メンデルの法則短気は親ゆずり
 葬列に短さだけが悼まれる
 短い地球の裏からくる電話
 宮仕え終えて短い日が暮れる
 短気だが怒ったあととの優しい目
 愛された日から短い日々になり
 二度の職履歴短く縦に書き
 結婚三年停せでした通夜の席
 幸せと一行添えてハネムーン

川柳東大阪

森下

カツミ 正好 鉄治 朱夏 金一 澄子 育子 高夫 千秀 保 靖子 芳三 隆行 正二 かなめ 利子 治代 計四郎 みね 智水庵 雅風 晋吾 滋啓 庸佑 松山 頂留子 俊一 慶三 柳宏子

幸せすぎて古傷痛む時がある
 胃の痛む話が続く会議室
 痛いところ突かれて悪い予感する
 大ききなまだ叩かれて居ぬに声
 仲裁の顔を立てとく痛み分け
 うれしさが包みきれない国なまり
 ふるさとの匂い包んで母の便
 パン抱いて眠りこけて紅葉の手
 それからも恥じない旗を誇る古い
 川柳化粧槽
 植村客遊子報
 過去未来かかわりもなく桜散る
 世界中共通恋の物語
 職離れ久しネクタイ結ぶ夢
 もう花が咲く頃蝶が訪れる
 組板が妻の機嫌を知るリズム
 通り雨それで金婚まで続く
 地に潜む山芋蔓で見つけられ
 病院の屋上で見るわが家
 帰る土花いっぱいにしておこう
 晴れやかなお地藏さんの今日の顔
 無意識に罪を重ねて老いの坂
 要らんこと聞くなと耳が遠くなり
 父の日へ一升提げて娘が訪ね
 鍵かけて尚気になって電話する
 師の糸に相済まぬのは小唄会
 朝の蜘蛛今日は貴方は是非逢える
 聞き上手嫁に余命を預けた身
 有り合せ上手にグルメ母の腕
 古時計納屋で老爺に刻告げる
 八十の姑が強気なバスポート

英一 美子 喜一郎 しんじ 文秋 孤舟 妙女 喜久 喜風 岳詩 紅葉 秋月 葉香 越山 白李 大鷹 礎石 悲子 あさ はる子 一楽 五幸 瑞穂 遊峰 遊光 サワ子 輝月 永楽 客遊子

明日は散る花に別れの蝶が舞い
 宿題に親がテストをされてます
 褒めようか叱ろか旨い子の漫画
 言い訳をして疑いを深くする
 ランドセル親の期待を背負い行く
 初夏の着声たり脱いだりしまったり
 初孫のいとこみんな我が血すじ
 お茶の間に世界の動き見るテレビ
 描かれた顔にほくろを付けてやり
 頑固さのままではいて欲し喜寿の父
 病みつつけししみ知った夫の愛
 苦勞した事は言わない川の石
 優しさにふれてペタルの軽い掃路
 連休をまだ母の居る有難さ
 便利万能これ程の世に嫁がない
 うぬぼれて顔が並んだ人生黄昏
 うぬぼれて顔が並んでと批判され
 うぬぼれてしゃべってはみたがやはり年
 うぬぼれて明日の軌道踏みはずし
 足下の罌へうぬぼれ気が付かず
 大卒といううぬぼれに職がない
 百薬の長の気休め間接税
 気休めに飛んだが矢張り気がつかれ
 気休めに言う愚痴だから聞いてあげ
 脚本も近道もない子を育て
 気休めが花のささやきそと聞き

富柳会

池

行つてきます言葉最後にならうとは
 災難を受けない日々の神だのみ
 美味しさに満腹苦しい災難だ

伊久栄 乐山 半仙 江山 志重 つゆ草 明子 禅心 種子 さわゑ ふさえ 吟平 やす代 千代女 甫正 静香 秀香 美恵子 ひろこ 光水 つた子 保恒 虞人 英子 知代子 賀山 山平 市雄 花子 静枝

最後だと言つては金を借りにくる
災難がむき出しにするお人柄
大安の日にも各地の事故を聞く
日本刀研いだ話はせぬ研ぎ屋
居合せたばかりに事情聴取され
猿知恵と見抜かされていた有頂天
妻よりも猿を上手に飼育する
猿まわし猿役は芋をもろただけ
母の手に流石古木がよみがえる
母達者流石に美味しいにぎりめし
静寂の中で最後を考える

岸和田川柳會

植山

武助報

昭水 田中 勇 富久一 曲ん手 伊庭 勇 莊次 文次 美房 花梢 岳人 森子
地球儀が核だいている夏が来る
腹立ちを笑顔で包みこまも摺る
煩悩を捨てた尼僧の生きる顔
糠床を貰つて明日が甦える
ビール追加父の日ちよつとした威厳
土壇場で確かに聞いた亡父の声
音痴でも唄えば孫はスヤスヤと
合格をすれば神様用はない
積載違反まだ蜜蜂が花を追い
手腕家でないが会社の生字引
檻の中で生きてまある爪になる
建て前と本音でうまく生きている
他人から情をもらつ旅行先
相部屋の他人同士が同じ趣味
他人から見ると何でもない事で
生きぬ仲他人の目くばり気にします
ワンタッチ人間不精に慣らされる
同情の涙他人がもり上げる
雨降れば逢いたい人を語り出す

傷心を包んでくれた男に嫁ぐ
好き嫌いやわれない祖父として好かれ
あじさいの雨は情けを抱いて咲く
もうあかんあかんというて生き伸びる

倉吉川柳會

渡辺

善吾報

幸代 白光子 甘平 操子 柳風 秋人 松女 とめ子 碧水 康志 洋 ともお みなと ひろ子 満春 千春 京子 登 是るお 亜弥 次男 次男 よしえ 瑞枝 さつき 御前 やえ 荒介 石花菜

ノイローゼ目をあけて見よ大自然
生半可医学書覚えノイローゼ
明日の風不安でならぬノイローゼ
よろこびの二人に長い橋がある
虹の橋渡れば菓子子の国がある
勉強が嫌になったら野球しろ
政治家はひまわりバツツけましよう
敗戦は向日葵の下で聞いていた
向日葵は婚期なんかを気にしない
三べんも飯は食うてのノイローゼ
勉強も仕事も投げつけて旅したい
向日葵がジャンボに咲いて威圧する
いつか見た山あいの橋落ちていた
橋の上から小便がしたくなる
猫背にはひまわり模様似合わない
札束を見せると治るノイローゼ
自分ではわかつていますノイローゼ
後学の為にヌードも髪が白くなる
ノイローゼカラスの見えるがよい
風鈴が昼寝の唄をよく歌う
風鈴も賑やか好きで女好き
大勉強しますと結構儲ける
橋のない川で与作が待つている
ひまわりの下で蒸発したくなる
金さんと朴さんが居た橋の下
ノイローゼ妻は引き算ばかりする

佳句地10選 (前月号から)

吉川寿美選

丁寧に折つているのは騙し舟 智子
飾らないことばにきらり光るもの 天笑
叱られてこのぬくもりは何だろう 度
神様にだんだん遠くなる大人 吐来
煙突がまつすぐ伸びる父の胸 緑良
月見草憎いと思う人を持つ 操子
度の合わぬ老眼鏡でみる世相 倫子
男の価値をパーセンテージで測られる 武助
一所不在湖の満ち干に飯を喰う 荒介
たけのこがでてくるようなあめがふる 小一步美

完 秋女 千代 独歩 苦句 綾珠 輝子 敏子 市郎 テルミ 純子 ふさ子 トキワ

寄せつけずオロオロさせる黙秘権
 憔悴の喪服のひとつのうすい胸
 野の花が笑りを見ずにもぎ取られ
 顧みて古希のあと味ほろ苦く
 喜寿祝う話してたら訃報来る
 水泳の上手な兄と海に出る
 神様の手の鳴る方へついて行く
 生かされていると気がつく寺の鐘
 自我と欲特効薬は見当らず
 煩惱を羅漢と語る小半日
 丸い背に老母は明治の気骨見せ
 我が子には買えぬ玩具も孫に買い
 現代つ子動く玩具へ万がつき
 飼主の落目を知らず錦鯉
 おろおろを見せずコスモスバラの横
 たそがれを音なく告げる花時計
 ゆらゆらと泳ぐ金魚の昼下り
 風穴をあけても一度考える
 ささやきに大きく揺れるイヤリング
 完走して菊の香りに埋もれたし
 郷土玩具一つ残った亡母の部屋
 冷凍魚水に入れたら泳ぎそう
 新緑に税のつかぬ空気が吸う
 水槽で泳ぐハマチのひとり言
 拗ねた枝重宝がらけ鉢で生き

温子 静子 正之 新一郎 ふみ 寿美礼 静歩 静歩 佐津乃 達子 きくゑ きみ子 午郎 秀夫 典子 よし子 八重子 倫子 白峰 満津子 公一 右近 文子 笑笑 風

春城武庫坊報

先頭を走る狐独に勝つために
 グルメ旅腹の薬も入れておく
 この先は聞かぬ三猿腹のうち
 腹巻にいざ鎌倉を入れておく
 腹立てて見ても所詮は孫の事
 御立腹ですよと秘書の脅しよう
 蟬の声鳴き出すとたん暮夏知る
 パレットも明るく彩で梅雨明ける
 役得がばれて前途を棒に振り
 喜寿でなお神輿にジツとしておれず
 都合が悪くなると補聴器はずして
 ピカソ等に誘い込まれた美術館
 減塩をすすめる医師も太り気味

尼崎いくしま川柳会 春城 年代報

武庫坊 敏之 十四郎 向西 江美 歌子 義嗣 美智子 真吉 寅之助 すみ 美代子 昌子 園歩 萬歩 園芳子 ときお 白溪子 紫香 かね子 しげお 静夢 作二郎 美代子 伊三郎 嘉矩 美智子 春子 みち子

ふる里に知らない家がふえてゆく
 本名は知らぬ雅号のお付き合
 酒煙草やめて電池が切れた顔
 有力な候補の油断待っている
 静岡市川柳塔同好会 永倉 僕川報
 孝行を親の強い独りっ子
 孝行を悔みながらに脱ぐ喪服
 餅を背に軽く押しても重い印
 金借りて軒く押ししても重い印
 銀行でリツチな空気が吸って来る
 屋根の上カラスが鳴いて落ち着かず
 神様の力に縛る入試の子
 アンテナが屋根で聞き耳立てている
 神様はお神酒が好きでいつも呑み
 鉢の花うまそうに呑むじよろの水
 風船に夢を托して花の種
 おっとりとしているよって根は短気
 勉強と脳の歯車かみ合わず
 自分史を他人になって読み返す
 人間の弱さが神に触れたがる
 老眼鏡掛けて正札確かめる
 付き合えば見掛けに寄らず好きな人
 不吉感屋根のカラスがまだ騒ぐ
 風格のある字と言つて褒めておく
 孝行の真似が芝居につれて行き
 結ばれた縁が茂居の五十年
 成績がよいと親馬鹿子の自慢
 川柳ささやま茶の花合同句会 脇田米朝報
 主婦らしい仕草が匂う返し針
 軽薄な女が主婦を裁き出す
 主婦の座に馴れて空気のよつな妻

定人 文夫 散步 年代 僕川報 孤秀 金吾 紀代次 定次 よしお 庚子郎 孝平 やす たま たき 志代 千代 つね きん みつ まつゑ 三津子 久江 房江 静代 僕川 和子 とみ子 さかゑ

主婦の座の居心地がよい大あくび
子に残す木を真直ぐに植えておく
萌える木々それより濃くひとを恋う
百年の古木朽ちずに花咲かせ
積木積む後から崩す子の学資
反対の中に進歩のある台詞
反対の隅をつついて居る頑固
辻褄があわぬぞ反旗振り続け
いつか子にゆずる柱にみがきかけ
イヤリング柱にした人にゆれ
歳月をきざむ柱に母は老い
こつこつと柱築いた夫婦独楽
川柳塔きやらばく
政岡日枝子報

正純 文平 ゆうや やよい 金の助 エキオ 法 齊 越 山 貞 子 富 美 百合子 千代子
恵 子 荒 介 朗 子 千 春 な み 玲 子 田 鶴 日 枝 子 時 子 瑞 枝 とも子 千 代 正 子 夕 子 富 枝 花 子
種火まだ消させぬ父の一徹さ
川柳高知
花買えば女の心とり戻し
三人の友情だれか我慢する
友情に今日も甘えた千鳥足
伸びてきた手を友情とみた誤算
友情のままで終った手話の恋
旅なれて気軽な服に馴れた靴
近道をして橋がない遠廻り
幸せを顔に書いてる若夫婦
夫婦茶碗取り替えもなく五十年
切り札を握りつぶした町の声
黒幕が握りつぶした町の声
旧姓でまだ呼んでいる新世帯
階級が呼び捨てにする宮仕え
青空が呼ぶ古里のお茶を摘む
口笛で呼ぶ出す娘にも紐が出来
古里はよし山彦を呼んでみる
川柳塔唐津支部
久保 正敏報
聞き上手喧嘩相手を封じきる
三年も先の話は夢の夢
落しても割れぬ茶碗で飯を食い
父の日のゴロ寝を医博ほめそやし
自転車で駆けて五輪の出番待つ
信玄公旅してテレビ見たくなり
昇仙峡緑の雨に濡れて撒り
人間を磨く額の玉の汗
生真面目な寡婦生真面目にタイエット
川柳塔からつ佐志教室 浜本 義美報
保険屋が終着駅の切符呉れ
灰皿に吸殻満ちて匂が生まれ
八重子 淳枝 佳風 和坊 恒子 幸 義 功 菊野 節子 幸 泉 竹 萌 春 童 松 風 旭 恒 虹 汀 高明 朴 童 夕 夫 幸 善 正 敏 一 徳 喜 久 夫

63年度

『川柳塔唐津支部』秋季大会

日 時 昭和63年10月9日(日)

11時40分開会

場 所 唐津市東城内「城内閣」

柳 話 橘高 薫風

兼 題 (事前投句・各題2句)

「釘」 筒井 朴竜選

「灰」 寺中三枝子選

「棚」 西村 正紘選

「札(ふだ)」 山本規不風選

「盃」 河内 天笑選

席 題 当日一題 締切13時

会 費 二、〇〇〇円(昼食・会誌)

★兼題の事前投句は会費同封の上、

9月25日必着、左記へ

〈投句並に連絡先〉

〒847 唐津市栄町二五七〇の四

川柳塔唐津支部 久保正敏

夫通院車椅子押すことも幸
竹の子を又煮て戻すお付きあい
竹垣を造り隣を遠くする
しきたりの精霊流し今いずこ
叱られて日焼防止の孫愛し
外出の日焼防止の厚化粧
飽食の夫が喜ぶ茄子漬
J R 語尾も笑顔も丸くなる
五百羅漢の呪文を若葉聞いてやる
老兵の硬骨漢が蛇怖れ

高槻川柳サークル卯の花 河瀬芳子報
出刃買って鱈の頭はねてみる
金返します包丁を見せずとも
包丁が止って母が聞いている
原発の安い電気の恐いつけ
文明が電気故障で音をあげる
電気釜おこげの味を忘れかけ
ライバルの電気が消える迄ねばり
人間を操る心算はない電気
あかあかと電気をつけて明日嫁ぐ
電源を切ればロボット殺せませす
電気孵化ヒヨコに走る道がない
豆球で照らして秘仏になる電気
綴帳があがると魔性になる電気
四人顔揃えば卓を囲む仲

上役のタクトに揃っている野心
美人ではないが綺麗に揃った歯
揃いすぎの釣書ちよつと思案する
家系図が見事に揃う通夜の席
涙いろの花が揃って指先に
メンバーが揃つと多弁になる雀

百恵 万亀子 茂坊 冬子 ちよ 順子 治幸 三枝子 百万両 義美 節子 八重野 房子 景治 あきらら しげお 白浮子 凡九郎 越子 佐代子 紅葉 紅葉 静江 崇 俊子 ふみ 栄 美智子 作二郎 百合子

老夫婦揃って忘れ易くなり
足並が並うやっぱりお金です
ライバルを送る拍手が揃わない
死の影をみてきて手術無事に済み
逃げてゆく鬼の姿に影がない
歩道橋影も曲つて降りてくる
面影はやはり似てきた血の絆
自立する子へ親の影邪魔をする
残業を終えた最後の影法師
追う影も曲つたままで出て来ない
向い風影折れそうについてくる
ひと休みしてはと影が言うている
一足ずつ影と一緒に坂上る
クチナシの白さが浮ぶ庭の中
吉報と悲報花道すれ違い
宅配の荷のよう母を送っていき
全身でいのちを吐いている蚕
裕ちゃんの夜霧しみじみ魅せられる
乳房からして泣けぬ女の日記帳
明石沖走って地中海料理出る
同窓会瀬戸大橋と言うてくる
こない話はないよと二度二度
執拗に聞きにくるから嘘を言う
ハイレッグ我が娘だけに着せられぬ
古稀近く前頭葉に儼がくる
水虫の薬は効かず夏に入る
花博の夢ベコニヤを育てます
敗北感枇杷の葉裏の暗いこと
効けば良い効かねば悪い医者にされぬ

萬的 外吉 惠美子 草木 如洲 正志 彰一 紫香 散歩 年代 眉水 主坊 武茂 俊作 芳子 英子 冬葉 榮子 春風 暢子 スミ子 京童 多賀子 豊子 泰弘 真笑 信子 芳子

紫陽花の嘘のつけない彩で咲き
草野球親の期待を背負わされ
川柳塔まつえ七月例会 恒松
奔放に女は夏を謳歌する
手摘み茶の香る病舎も夏の朝
甘く見た水に命をおとす夏
はちまける若さを夏は賛美する
ソーメンの好きなお方に夏がくる
夏本番入道雲が威張りだす
痒み止め欠かせぬ夏の小抽斗
夏バテにならぬ梅干耐えて食う
落武者の村で短か夏終る
足音に膝の崩せぬ夏座敷
善人の顔してるから道を聞く
善人が隣に住んでややこしい
善人が老いて呆けて泣き笑い
善人と区別のつかぬ面がある
善人の魂買いにきたいくさ
善人の窓につばめが巣をかける
爪ばかり伸びて病窓今日も暮れ
善人に重い袋が残される
あけすつて語り善人だと思つ
善人がとつても好きな貧乏神
旅の宿窓から見た蜷舟
トンネルをすくとんと抜けた汽車の窓
くちなしの薫りが窓を閉めさせぬ
団地窓思い思いの灯が和む
ご馳走をサッシ窓から覗む蠅
病床の窓に祈願の花一輪
窓枠を通し絵になる部屋にいる

陽露子 鬼遊 芳子 ノブ 由郎 満江 登美也 きみえ 瑞枝 翠星 貢範 市雄 遊美 雄々 清志 小鹿 秀丸 鶴子 操子 房人 代仕男 蒼流 妻介 荒介 友子 多賀子 静翁 小生 愚童

威勢よい声が飛びこむ路地の窓
窓際に置かれ人形日焼けする
窓叩く雨やお前も淋しいか
うなき屋の隣で窓があげられぬ
善人は信念曲げず平社員

目立たない友が意外な出世する
いい友で俺の前途へ灯をともし
友達と思う器にひびきが入り
友だちとお互い皺を数え合う
珍しい近頃みせぬ紙芝居

近頃の電話のベルはよい知らせ
方言が近頃ふつとなつかしく
近頃は女から来る果し状
近頃は夫権も落ちた市場籠

川柳塔鹿野みか月川柳会 土橋
地の底にモグラが生きて茄子が枯れ
踏まれても地を這う人として生きる
現代っ子大地を知らぬ足の裏
地獄でもあなたとならば行きましよう

地に足がつかぬ幽霊そんな僕
少しとほけた父の地下足袋はいてみる
一本の雑草も大地の愛をうけ
確実に話を聞いている大地

地下街で地震おきたらどないしよう
商売も地元の水子にあやされて
地蔵尊の前にもひ子を来
地に堕ちてから親の跡継ぎと決め
地上げ屋の罫がねらった都市砂漠

地の中を人間さまに犯される
路地裏に別嬪さんと恵比須さん
地の果ての仲間はずっといい人だ

正朗 静恵 昭二 三男 米子 舞吉 巡歩 静江 長三 日出子 幸子 与根一 叮紅 螢報 トシ子 奈海 としを 雅女 苦句 はるお 富恵 新正子 くに子 小鹿 三千代 けんじ 八重子 みさ子 諷人 日枝子

昼寝していても土地の値はねている
地上げ屋はここまで来ないパラダイス
地続きのあの世ほんやり見えてきた
地に腰をおろして握り飯を食う
何時までも地球は青い方がいい
生きていても大地だ強い足跡を
安物の生地でなかなか洗えない
大地から熱い吐息がもれてくる
向い風受け立つ胸が好きになる
母の胸温さ知らない共かせぎ

カルガモの母も毅然と胸を張り
愛という胸の鼓動に酔うてみる
失言が根雪となって胸に棲む
この薄い胸に育児の歴史抱く
告白はできずしこりが胸に棲む
電算機胸算用とかみあわぬ

山陰合同銀行出題『チャレンジ』
中原 諷人選

走つて飛んで常にチャレンジしています
またひとつチャレンジ出来た棒グラフ
一億の一円玉へチャレンジだ
姑の味に今日もチャレンジしています
チャレンジャーもお守りそつと思はせる
富士山にチャレンジ今朝の夢でした
ライバルへ恋のチャレンジ盗まれた
チャレンジャーの精神すてぬ蛙たち
挑戦を受ける日赤い靴みがく
チャレンジが好きで翔んでる赤い靴
ライバルの挑戦ならば素手で受け
私の手は何に挑んでいるのかな
初鏡おんなチャレンジはじまりぬ

由多香 美つ千 久子 喜与志 和子 汲香 隆風 螢 野草 英美 幸枝 幸美子 きみ子 かつ乃 花子 静生 ちえ子

引き籠る心チャレンジしてごらん
チャレンジをやめた時から花いちもんめ
早起きにチャレンジ畠に花が咲く
チャレンジへ何時も鉛筆を向けている
チャレンジに少年汗を惜しまない
チャレンジ精神そして肘深を食う
バラに挑むと手負いの傷が深くなる
星ひとつ恋にチャレンジして流れ
紙カブトチャレンジさせる五月風
花束の挑戦状を届けよう

脱皮して空へチャレンジしてみよう
チャレンジの意気どん底で燃え上がり
カマキリのチャレンジ胸を張んなさい
ライバルにチャレンジ黙秘権つかう
紫陽花にチャレンジ今日は黒を着る
素手の男にチャレンジなどは仕掛けない
下を見る瞳のチャレンジに負けそうだ
薬一本が味方にあつた挑戦状
銭がなくてもチャレンジャーにはなれそうで

打吹川柳会 江原とみお報
ビノキオの鼻も近頃花粉症
真夜中にきく騒音も生きている音
孤独感と妻を忘れる日になれて
肥を汲みながら習った農の道
胃カメラが保証しますと安堵させ
正面の席は大事に空けてある
焼酎党政治の情け格を上げ
ふり返る今日一日の罪祈る
松山の女が掬う匂の味
イントロの度に忘れて出だし
紫陽花がお色直しの小糠雨

はるお 諷人 雄々 たち 早苗 紫映 巡歩 日枝子 宗光 妻 螢 白峰

美つ千 美佐子 美佐子 和子 くに子 八重子 喜与志 小鹿 日枝子 美佐子 由多香 久子 三千代

二番目を目ざせば急ぐことはない丸腰になった父の帽子掛さんづけも出来かね先生と呼び還暦にも一度虹をかけなおし刺のないサボテンかも知れぬ私竹を切るかえす刀で悪を切る

冗談を嫌う上司に肩がこり散歩道郷に居れと引きとめる磨かれて嫁も家風の鈴鳴らす何をくよくよ人間灰になるだけさ

針の先程が伝わるえらい事大臣でいる間に外遊しときたい夏の陽に女の隙がある浜辺持味を姑に合わす嫁の知恵

抽斗の軋みが妻を怒らせるピジネスの面がなかなか外れない

西宮北口川柳会 松本 夜逃げしたこともあつたなあ妻よ鬼の目に何故人間は逃げて行く

ど忘れが平均寿命越えて増しセツトオール男の顔が鬼になる

赤と黒セツトのように胸に棲む期待した親のわたしの罪である

平均に分けて採るの遺産分け夫婦茶碗セツトのままですつまでも

欲しくもないものも出てくる福袋許す気で心の扉開けておく

ささやかな期待を詰める種袋逃げるのは男追わないのは女

ランチタイムサーピスセツト持て余す平均的な夫だとおもつフルムーン

典子 雀踊子 柳風

喬水 杜和 三政

善政 梅朗 吉朗

弘朗 温子 節枝

幸子 節子 呂鷹

とみお 一朗報 勝

萬的 白宗 武庫坊

いわゑ はつ絵 伊三郎

眉水 静子 颯云児

美智子 佳秋 英子

光代

いちずの子言いわけもせず逃げもせず逃避行ゆく方知れず天の川逃げ道を一つ作っている遊び

鮑食の鳩は街から逃げられぬ輪を画いて妥協ゆるさぬ水すまし

平均的くらしと思つてころてん湯上りの裸の王子母が追つ

聞き役が一線を引く金のこと成長の孫にかなわぬことばかり

アベレージだけで計れぬニューパワー平均寿命伸ばし続けて寝たつきり

あら嫌だ同じ服着た人が来る八百八橋名のみ残りていと寂し

平均値でうろろうしする太鼓橋螢火を拝んだ母の三回忌

私から蝶もとんぼも皆逃げる雨の日はゆつくり手紙でもかこう

イメージを抜けてでつかい夢をみるスピードに燃えカールグリーにもソウルにも

ライバルのスランプあてにする弱気中流の中だと背伸びして暮す

金魚掬いにかかった金魚は俺の顔期待して買った機械がこなせない

期待はすれのセツト通りに生かされる期待はずれの答が返る波しぶき

中傷に逃げたら負けと時機を待つ楽しみな約束詰まる予定表

平均の寿命超えてる呆けている平均寿命越えて自信あるノドの冴え声だけは年を取らないクラス会

宣子 年代 青珠

作二郎 定人 みつ子

狹杏 俊子 市雄

文夫 千秀 六郎太

みね 善太郎 ノブ

御前 勝美 森生

保 枯梢 芳仙

紫香 惠美子 江美

園歩 白漢子 千世子

正坊

長男に期待をかける鬼瓦平均点まあまあですと無い特技明日まででもない菓子を食べさせる

寝た孫を背に夜店を見て帰る口数の少ない人の腕つ節

逃げきれぬ逃腰へ浮かんだ母の顔旗色へもつ逃腰が見えてくる

逃がれもつ京の社に花を問う切り札を持っているから逃げ出さぬ

砂時計平均に落ち初夏の風 京都塔の会 松川 杜的報

良い事の外は聞かない老いの耳おおらかな思いしたりくる青葉

孫へ切る牡丹は傘をさして待つ水色の風に驚聞く峠

若葉萌ゆ塔の高さになりたくて割り切つて男素直な顔になる

吉報の手紙は長いほうがよい縁遠い姉が支えている家計

一句添えると一筆書きが動き出すピンポン玉のように返つて来るハガキ

カーテンも薄地に替えて初夏の窓一呼吸微妙に変る血圧計

N響をきくと旅が日たくなる退屈な風の無い日のかさぐるま

付和雷同日本語の乱れ気にしない石庭の銀砂が映える五月晴

七株のさつき見ている羅漢石表裏 硬軟の茶道 門に見せ五月晴れ石庭の砂白すぎる

しげお 紀雄 一郎

花村 三笑子 伊升

香子 散歩 よし津

杜的報 美智子 白李

達子 英子 英子

ただし 諷云児 笑女

武庫坊 年代 花代子

芳子 和友 幸

水客 圭坊 ますお

求芽 栄

シマ子

そよ風と話がつきぬ羅漢さん
 妙蓮寺読めない儘の部屋の額
 高貴葉に負けず小さな粒にする
 一粒のダイヤでもめるかたみわけ
 一粒の山椒明治の母が居る
 一粒のこぼれ種にも有る根性
 機を織る場所に光りは当らない
 京の鉾ゴブラン織の色さやか
 西陣のハタ織る音も定時制
 細織る老母の詠りにある温み
 壁掛けの努力の文字に叱られる
 壁の色メルヘン近い娘の新居
 壁もたぬ姑で私も甘えてる
 壁塗りと言ったらあかんメーキャップ
 白壁の蔵戸を開ける五月晴
 風化した壁に風情のかくれ寺
 スランプの壁破ろうと旅に出る

大原川柳社 小林

近所フォークス鍋の底まで知っている
 日本海越えて黄砂は春の使者
 点滴は命の雫が桜色
 ひたすらに無償の愛の糸を織る
 フルムーン空飛ぶ旅を娘がくれる
 いい風に逢える日を待つ風車
 はなし家の扇子はうどん食べてみせ
 紫陽花へ一と色添える雨しとど
 浮き沈み歩いた足をいとおしむ
 ふし穴があつて隣の風呂が見え
 振り向いてくれた一人に救われる
 夕焼けと明日の約束して戻り
 小紫さまあじさい咲いて露の花

花芯から花芯へ蝶の使者が飛ぶ
 弁当をもらいに帰るラッシュの灯
 両の目に入り切れない星の数
 嘘八百罷り通ったネオン街
 てんとう虫の恋を見つけた幼ない目
 極楽とんぼ行きはよい良い帰りはつらい
 ほととぎす一人ぼっちで啼き止めず
 盆栽も水枯れている友の葬
 かたつむり梅雨を謳歌のランデブー
 世界とは広いとミミス掘ってゆく
 わかあゆ川柳会 松本はるみ報
 重箱の角をつついている野党
 新築のとなり廃屋ぼつねんと
 雷の罪なき大樹裂いている
 廃屋の庭に矢車草が咲き
 黒ばらは美名の裏で浮気する
 母の樹がやさしく包む子守唄
 樹に眠る小鳥の夢をこわすなよ
 廃屋の柱は艶をもっている
 さて次は俺が番だと臆が冷える
 美は乱調にあり花吹雪
 駅へ行く心がわりのせぬうちに
 八尾市民川柳会 飯田悦郎報
 手がみに自分でない老眼鏡
 子を叱る息子の背なひある自分
 鏡の向うに厭な自分があそんでる
 ある時は自分を騙すコップ酒
 少しずつ自分の顔になって老い
 自分の素顔女は忘れかけ
 てっぺんに立つと自分の顔がない
 作業服着ると自分の顔になる

葉子 花村 杜的 満津子 京童 静代 磯 白溪子 三求 静江 江美 正坊 美穂 春子 光子 妻子報 あすなろ 正子 ひでの 寿恵子 みさえ 朝代 智泉 睦子 睦子 敏子 美代子 正己 巴子 喜美子

悦子 妻江 理恵 元江 玉恵 宮子 辰子 みづえ 耕花 聖子 ヒデ子 世似 かつ子 恵美子 民子 鈴江 清泉 天痴人 白汀 はるみ 柳宏子 白史 柳宏子 一高 てまり 雀踊子 甘平 晋吾

金太 節子 砂輝守 芙子 綾珠 喜風 白洋 欣之 帆船 律子 度 薫風 三男 和子 柳伸 壯之助 頂留子 重人 覚然坊 章士 和尾 宏子 雅士 夕花 冬葉 悦郎

走ろう走ろう厭な妬心を捨ててため
のし紙の下にねたみが入れてある
鏡よ鏡紅のあかきにあるねたみ
ねたむ眼でもう一度自分を見て見よう
かまきりを蟻は決してねたまない
ねたまれる身のねせかそよと風
おにいちゃんのおねたみ心抱いてやり
骨つばの男の妬心まだ続く
般若の面はいつも妬心を見つめてる

川柳大阪 山下みつる報

欲深い電話が欲をくすぐりに
蹴躓く小石にだつて意地があり
四捨五入の間で揺れる落ちこぼれ
禪寺の庭で悟りがたらなんだ
ライバルが出来て汗を流して
先読めぬ夫婦で汗を流して
露天風呂呂桶一輪混浴し
岩清水里のお寺は茶の香り
何事も明日に延ばし余命継ぎ
プールざわ日にやくだけの我が青春
名も知らぬ草花愛でる年となり
頼まれもしない孫の名並べてる
一匹の蚊に寝付かれぬひとり旅
故里の蚊はふるさとの音でくる
蚊柱が立つて夕立遠のきぬ
クラス会あだ名呼びあい年忘れ
いなされて痛さを知った白い足袋
鯉のぼり親の願いと初夏の風
忘れずツバメ古巣に帰る初夏
長雨を上手にいなす雨蛙
六十路過ぎ今から行くか英語塾

良子 美子 湖風 凡九郎 美幸 しみじ しまえ 十歩

重人 洛醉 希久志 喜醉 雅巢 正しげお 亮太 もとみ 河南子 一歩 与呂志 金太 醉舟 笑風 鈍泉 三千雄 柳弘 凡兵

初夏の旅夫婦で渡る瀬戸の旅
春送り盛夏の前の頃やよし
ビール党喉の通りで初夏を知る
うたた寝へ毛布をそつと初夏の昼
庭下駄の素足の白に初夏を見る
気まぐれな蚊にも遊ばれた夜の夢
サツクヤーに首相の英語通じない
芽の出ない役者がドサで名演技

堺川柳会七月分會 河内 月子報

隣の娘美しすぎて売れ残り
腹痛に妙薬苦い陀羅尼助
妙薬はこれさ飽のウイスキー
夜逃げしたあとへ素敵な店が出来
妙薬が効いて鼻血が止まらない
妙薬と聞けば何でもすがりつき
均等法未婚の女増えてくる
目的は一〇一ニイハオの旅
還暦の父に未婚の娘が二人
味噌汁にまだまだ遠い姑の味
何よりの妙薬孫や子の笑顔
暴力を見て見ぬ振りをする大人
味噌汁を今日のリスムで飲む夫婦
一人居は鯛の味噌漬腐らせる
味噌汁とスープが揉めている同居
酢味噌和え酢が効きすぎる夫婦仲
閉店へ女将がグイとコップ酒
ブランドに押され老舖も四苦八苦
縄のれん俺の妙薬置いてある
味噌汁も上手に出来てまだ未婚
何もかも便利独身うじ湧かず

哲楽 喜楽 遊心 鉄心 本蔭棒 比呂志 敏

静月 眉水 左久良 素灯 月子 天笑 妻子 元紀 正坊 凡子 頂留子 庸佑 紀美女 初枝 純枝 豊子 冬葉 信博 真平 春香

糠味噌を腹たてながらかき回し
疑って飲んで妙薬効くそうな
煮え切らぬ男へ喰わすからし味噌
味噌汁も同じ好みの仲になり
あれからはガス屋も入れぬおばあちゃん
ひとはけと独身貴族謳歌する
三年味噌残り少ない母の味
何よりも効いた明るい妻の酌
妙薬は知らずに舐めたメリケン粉
夜目遠目痴漢が若く見てくれた
不本意だがやさしい人に気をつける
元氣出る薬元氣な奴が飲み
妙薬を聞かれた方も探しとり
高くて近くて信用できる店
新装開店はかりしているパチンコ屋
お醤油が一本売れた過疎の店
朴の葉の味噌でもてなす国なまり
糠味噌に私ひとりの歌がある

川柳たけはら 森井 舊居報

つばめあかちゃんへびにたべられた
あめのなかこともがひとりたっている
しゅくだいがすんであんしんしたごはん
夏休みたのしいことがおこるかも
弟はときどきつびなごとを言う
自転車坂を登ってしんどいな
あきみのインコかわいい声でなく
水泳は楽しいけど泳げない
自転車にやつと乗れるね四年生
これからは月山に行く夏スキー
民族の風土が匂う博物館
毒ガス資料館案内せまかった

東雲 一千万子 楓 小雲 小雪 半銭 かりん 射月芳 美緒 美房 泰子 美緒 柳宏子 克子 新造 耕花 玉恵 寿恵子

中二純平

母の日はゆつくりしてねお母さん

先駆者とならんか崖の淵を行く

もう少し背丈が欲しい踊りの輪

うまい米うまくない米旅づく

編集部益のラジオを聞いている

案内と別にかちよるちよる観て歩く

故郷も橋がかちよる近づくなり

泣きごはと言うまい赤いカーネーション

ひさしぶりに亡父思い出すしげさ節

友からの電話説りがあたたかい

有難く聞いた説教すぐ忘れ

ピンクレター中二の孫からほのぼのと

近くても遠く咲いてる霞草

蹟いた石に年輪さとされる

アメリカに負けない米の種を播く

齒に衣をきせて謀反を考える

趣味ひとつ文化祭のすばらしさ

業捨てる鐘思いきり思いきり

捨てたはずなのに昨日を夢にみる

畑仕事やめると言って苗を買い

有難う今年も友と旅に出る

湯上がり鏡に年を知らされる

締切りも時限も知らぬ池の鯉

行き先のわかちぬ切符もっている

忙中閑蘭の話が途切れぬない

四、五時間寝させて貰う主婦の風邪

花束を貰えば走るほかはなし

じつとしておられぬ今日の青い空

お痛いの毛虫に愛を囁かれ

梅雨入りも知らぬ私の設計図

言いたいことあって午前様を待つ

中三亜貴子

菁居

房子

政己

蘭幸

静水

八重美

喜久恵

君枝

雪子

トシ江

麻代

俊夫

喜美子

静佳

ヤスエ

栄恵

千恵

光子

愛子

浪子

清水

比呂子

太虚

ふさ枝

静風

博子

淑子

令子

笑子

末っ子も旅立ち二人きりとなり

宇宙開発四季のリズムも狂いそう

今日もまたヒステリックな母なりき

リラックサさせる楽しい演歌みち

年金のくらしスイッチ切り替える

本年金ともれるジョークに考える

恋に恋するもよしバラの首あたり

一年のプランク五体めざめない

あなたわたしの影が仲良くついてくる

青雲の大志語れば雲が飛ぶ

子育てが終わり女に返り咲き

生きている川には螢火を点す

同じ場所売れない本が積んである

持ち主に切れ味までも似て切れぬ

川柳ねやがわ 高田 博泉報

はじかみの紅はべらせて鮎の腹

誤解され雪どけ待つてやつと春

叱るのも叱らないのも親の慈悲

ふっ飛んだ投手を叱る評論家

叱るより褒めて自信をつけさせる

過疎の駅酢こんぶひとつ差し出され

誤解とは今更言えないはめになり

先輩がみな年下の趣味の会

死顔の美しき母思い出す

蠅一匹落ち着きのない会になる

若者のみな去り過疎の石となる

廃駅の錆びたレールを洗う雨

子を叱るとなりの朝のにぎやかさ

若者の夢は梯子を天にかけ

誤解ではなかつた彼の浮気ぐせ

よく叱る母の録音とつてある

満子

節夫

千代女

美佐雄

貞子

一路

観杏

静火

シゲヨ

新造

よし江

照子

雄幸

たかし

篤子

佐和子

頓坊

鉦平

勝美

君子

まさお

創吾

玲子

節子

雅文

白水

すすむ

時弘

紀代

吉峰

残り酒あつめて話がまたはずみ

小引出し去年の花火捜し出し

ベル無情一夜の絆切つて発ち

若者の走るレールに柵がない

留年を叱つて子供に諭される

充分に間をとる母の叱り方

代表で叱られやすい人気者

美しい誤解重ねて恋になる

中二階そんな喫茶がなつかしい

父の日は母の日より忘れがち

自由化にくじけぬ農家米作り

叱られて十年プロの苦い水

父の日の父が大きなクシヤミする

誤解して壺から蛸が出て来ない

終着駅で灯をかざすのは亡母だろう

母子草叱つてくれる父が欲しい

灯を消して駅はドラマの幕閉じる

若者の中で忘れているお齡

美しすぎる継母が時計を狂わせる

茶を入れてまた若者の愚痴となる

父の日の叱る事ない父の酒

言い訳の光る涙に誤解とけ

若者の心くすぐる冒険談

万歩計駅まで歩く冒険目になる

肩並べ息子の意見聞いている

出直しへ過去は問わない始発駅

独身と誤解をされてもてる夜

ひと駅を歩くつもり竹を踏み

管理職いつも不満をためている

不倫して他人の顔でいる二人

駅までの距離で説得する積り

増造

なつめ

権太

美智子

勇太

菜月

藍子

英華

春子

とし

波留吉

おさむ

あやめ

シマ子

良三

一笑

章

かすみ

速水

庸佑

静江

光子

頂留子

てまり

房子

一途

三郎

冬葉

博泉

亜也子

亜成

八十の恋おばあちゃんの声変わり
出むかえの駅までねむる楽な旅
傘の中彼とは別のことと折れ
妻うわ手誤解でしのことと想へ
重大な誤解申電打つたあと
新しい母が叱ってくれました
時の人駅いっぱいに見送られ
禁煙タイム駅売店で買う煙草
グルメにはすぐ騙される舌をもち
若者が譲った席にお辞儀する

川柳わかやま
海に生き海の広さを知らぬ貝
優しきあいつかは折れる騙し舟
遠花火人気に縁の無い野犬
衆生済度仏の慈悲は温かい
巨大なる西日を海は包み込む
のど仏苦い言葉をいくつ飲む
微笑を忘れ給わぬ野の仏
ローン皆かえして空の広いこと
年金暮し世間の広さもそれくらい
まつらない人もアンタの子孫だす
仏飯を供え泣き言ばかりいう
句読点つくと視野が広くなる
み仏になっても人が寄りつかず
胸広く開けているのに気がつかぬ
騙される手品へ息をのんで見る
居酒屋の人気左党のギャンルが増え
これまでの人気と知ってるイヤリング
人気ものピンクの嘘なら許される
開店の人気上々三ヶ日
土俵際その一足にある人気

午尾
緑良報
紫香
柳宏子
小路
亜鈍
磯山
敬山
あいき
吉之助
英壬子
三千子

武雄
恭虎
狂虎
三男
白光子
紀美女
柳宏子
願

萬的
凡九郎
紫香
美智子
柳太
太茂津
登志代
桂香
紀久子
好笑
政一
千寿子

人気があつち花道降りところ
折にふれ母さん惚ふ広い海
主張する自由に広い空がある
この愚痴も仏の君は笑うでしよ
おひまなら来てねと仏よび止める
一言の嫌味が刺さるのどほとけ
道楽の一人へ消せぬ仏間の灯
生臭く生きて仏に遠くいる
大仏の慈悲の微笑へ寄る衆生
夏の僧回る仏を間違える
欲言うな知らぬが仏の本尊じゃ
いつちええ花は仏にとつておこ
此岸より彼岸へ仏の御手を借る
挑戦をするとも自分が見えてくる
老夫よ仏の顔で寝るでない
一坪の広さだけれと咲かす四季
あやつりの糸の細さにある人気
掌の広さよ現在過去未来

聴障川柳
夕日影農夫が川で漱洗う
美作盆地夕日を抱いた茜雲
さよならを夕日に告げた草野球
梅田の地下で終日燃える夕日の画
美しい夕日が誘う詩心
夕日背に今日も子供は塾通い
南の島の夕日は亡父を知っている
赤蜻蛉もうお帰るよ夕日影
今日も亦夕日背負うて鉢仕事
せせらぎに名残り惜しんで夕日去る
夕日落ち世界は変る街の蝶
野良仕事夕日眺めて汗を拭く

照子
信子
信秋
光代
寿子
栄美子
輝子
克子
瑞穂
豊太
忠
稚代
英子
裕美
公子
天彦
幸良
緑良
豊作報
豊作
真女
承平
八恵子
和江
文古
三香
柳香
一眺
みつる
進一
建太郎

豊中もくせい川柳会 田中 正坊報
冷房に重たく沈む煙草の輪
冷房が程よくきいて長話
冷房のよにまじった中で背く
督促のよにまじった孫の文
寂したて書いた手紙が舞い戻る
和解する積り速達便にする
言訳の手紙ワープロ誤字だらけ
いさぎよく破って捨てたラブレター
友の計をまさかまさか手紙見る
母の手紙に祇園囃子がのつてくる
鼻先の運をつかめぬもどかしさ
子報官の鼻括すつてる戻り梅雨
考課表社長は鼻でかき分ける
敗者復活しきりに鼻がかゆくなる
ひよつとこの鼻に自嘲などはない
考えるふりをしている象の鼻
さみしければ鼻動かして森の象
象の鼻ひとのぬく味はすぐ分る
細書きの香典袋ことずかる
旧街道だんだん細くなってゆく
凜と舞う野面の鶴の細い足
食細い母を氣遣う土用入り
苦勞したコトは忘れている笑顔
バカンスで穴場も詰まる人の波
シルク博社展示にも余慶あり
父ちゃんの首が短い肩車
子を叱るなとなりの主婦へ電話
病名を伏せて空しい元気つけ
息つく間考える間もない育児
クラス会ことしも二人斜線引く

薫風
慶子
よし子
花村
つえ子
佳秋
白溪子
とく子
富子
武庫坊
英子
洋子
楠曠
萬的
紫香
正坊
俊子
勝
しげお
路児
登代子
圭坊
きく子
明光
明吉
眉水
博史
隆
典子
晴治

ちり紙にはんの気持と渡す金
派手な浴衣で目高の学校見えています
残月を写す構えに邪魔な雲
母頑固一人ほそぼそ故郷に住む
赤ん坊のように泣けたら楽だろう

南大阪川柳会

中川

滋雀報

蜀洋会

中西兼治郎報

日記帳の余白黙秘権守る
伝言の余白に遅刻せめられる
発展へ民族融和のメッセージ
発見が早くて地獄から戻り
女ひとり不安を隠す厚化粧
真夜中のベルに田舎の母想う
それから舌がもつれてきた本気
憎しみを許すゆけりの花を買
大嫌いな背中を向けている本気
許さねばしょうない腹になつてくる
外泊を許すドクターの思いやり
明日生きる為に余白を温める
友情のことばで埋めてある余白
ふる里で再発見の水の味
新発見今年には花粉には負けぬ
手術台ランプが点る戸が閉る
癌不安看護の妻の明る過ぎ
本気なのか藤十郎の恋芝居
本音では許す苦いな裏帳簿
硬骨漢許す言葉に反発し
古文書の余白は何か言いたそう
答案の余白をうめる文字がない
結婚をして男とは女とは
あの人がまさかかと思う裏おもて
不倫見がつかつたら百叩きではすまぬ
自画像の目に漂うらびる不安
ある不安児童画の空黒く塗る
レントゲン医者はおしたも来いという
絵馬に書いた本気は雨に流される
お許しが出たので少し酔ってます
經典に余白が欲しい不信心

チットやソットで閉口しない母の根
新開店組の花輪をもてあまし
忙しい職場にかかる長電話
長電話今日と言つて切りましょか
大勢の中で子供が泣きわめき
閉口は俄やもめに溜る用
臍曲げてとりつくしまもない無口
裏街で生れ育つた面倒見
面倒になると読んだか乗つてこす
末っ子の面倒老母掌を合わし
窓際について面倒なことは避け
面倒な頼みへ膝を八重に折る
面倒な話を外らすコップ酒
後退はない英断の落とし穴
灰皿の山英断を期待する
成功をしたから英断だと言われ
決断のついた男の見る鏡
結果から見れば英断うらめなり
木で鼻をくぐる態度で門を閉じ
冷淡な言葉の中に愛を見る
冷淡に見えても慈悲の花ばさみ
冷淡な仮面の下は燃えている
どき回りさせて放つたらかす宝
判持つて又来て下さいと言う役場
円満な月日の中にある怖さ

福一 作二郎 房 登志実 寿美子
公一 慶三 シマコ 三重子 綾珠
しんじ 滋雀 信治 庸佑 喜風 新造 寿美
トミ子 柳伸 智子 柳宏子 覚然坊 千梢 恒明 文秋 勝美 章久 憲太郎 ハル子 雀踊子

父の日の父円満な無精髭
年やないもまれて角が取れたんや
円満に見せよとするからアラが出る
円満な家庭の好きな鬼瓦
どの星になつたか天に召された子
五十億星のさだめの夫と妻
流れ星願う間も目忘られず
免罪を受け白い目忘れず
真夏日の牛乳たよりになる白さ
真っ白い方から売れて行く小猫
汗かいた今日の尊さよ
汗のない机で決まる計画書
幸せの星を信じてゴールイン
白いもの増えて細胞日毎減る
白い紙出されて大悟無の一字
千羽鶴白淋しうて赤も折る
お后をのせて童話の白い馬
人の世は白いカラスも飛んでいる
つじつまを合わせる汗がひえてくる
藍襲にあこがれている白レース
星月夜二人にいらぬ言葉かす
三世代波風立てぬ母の腕
潮みちて新たな舞台つくる波
七難をかくす美人でなく美人
昔なじみの星がささやきビヤホール
駒つなぎ川柳会 里 小路報

藤子 頂留子 凡九郎 善信
兼治郎 絹子 恭昌 春子 君子 東雲 美津枝 為子 仙吉郎 良江 照子 楓楽 宏子 みつ子 光子 綾子 登志実 鬼遊 千代三 翠公 凡子 東雲

比沙胡 頂留子 美津枝 幸治 国公 重人 正一 智子 文秋 憲太郎 喜代治 浩一郎 素灯 章久 新造 壯之助 祥恵 勝美 善信 庸佑 史好 外吉 眉水 天笑 雅風 勝 作二郎 月子 度

逆光の中で発見したクルス
血圧の不安を抱いて肥えている
冗談を本気で聞いた日のピエロ
笑っていますじっくり仇打つ気です
盃で許す言葉になる仲間
この橋を渡ると許すことになる
寒い余白が公園の日溜りに
大阪の味を場末の赤のれん
鉦脈発見見果てぬ夢を追う山師
水掛不動が白く乾いている不安
親と離れる許しはカルガモ未だ出さず
残高のゼロが動かない余白
余白には夢をちぎって書きましょう
川柳はまだら

藤子 美幸 アキラ しんじ 冬葉 英一章 信治 甘平 柳宏子 柳伸 小路 喜辭 井上 喜辭 治虫 千流 凡兵 たかし 賀々々 泰平 清治 宙々 夏歩子 源五郎 伸子 喜辭 早苗 由郎 巡歩 夢酔 節子

耳栓をはずして待つていい話
ネタ売りが文才探す堀の中
淡水化大揺れに揺れけりがつく
長生きの保証がなるか万歩計
ばらばらに玩具をこわし喜ぶ子
中国産言えば何んでもよく売れる
人に夢与える雲の七変化
山科のこんなお寺にある逸話
地平線までに絆は切っておく
父の日に平凡すぎる日記帳
そばする音も落語は堂に入り
六道湖のしじみ貝たち高笑い
再婚のはなしひらかぬまま果てる
鬼の顔仏の顔も私のもの
淡白な食事を好む病み上り
六月の白がまぶしい衣替え
生きている幸花束へかみしめる
或る時は子を突き放すタイムリング
好きだから相性なんて言いません
働き者の母の十指があたたかい
風呂敷へ包む本音は軽く提げ
文芸書だけの本屋へ午後の閑
神さまもお神酒が好きでよくお呼び
むらくも川柳會 藤井 明報 無二の友だから心のチャック開け
深水の美人画 父が大事がり
目じるの鳩が戻って来た歓声
目印にされて見上げる夫婦松
漬物の代りサラダの味に馴れ
快適なチャックの音へ朝が出る
サラダなら皆の笑顔こぼれます

紫泉 宗光 多賀子 哲三 秀子 雪代 裕 女 花子 静代 鉄花人 雪子 きみえ 寿美子 登美也 千草 舞吉 愚童 弘朗 雀踊子 雄々 紫吻 早苗 明報 正朗 芳子 文子 一葉 福子 代

岬の灯目じるしにして海の旅
しゃべり止め口のチャックがあればよい
二人旅目じるしがないが連れ添って
欲すてた夫婦チャックを開けたきり
がま口のチャック開ければ福の神
背のチャック何かかんだか動かない
おしゃべりのチャックは固くしめておく
形より心の美人大好きで
主婦業の日課の一つ日記つけ
しみだらけ父の日記の青春譜
想い出の古き日記を焼く煙
読み返す日記に青春のドラマ
商品の開発小さなヒントから
平和と書ける日記で今日の幸
いい話胸にたたんで朝を出る
ホームラン打てば拍手の大会唱
朝の孫笑顔卓よりリズム
初当選やまぬ拍手の渦の中
出勤の朝に希望の靴が鳴る
朝の膳みなそれぞれ夢乗せて
朝露をふんでみどりの風を吸い
一歩二歩孫は拍手につこりと
朝夕の読経欠かさぬ老夫婦
拍手の音もこたまで返る宮
朝ごとに向う鏡に今日の幸
父の無事祈って朝を送り出す
びりなが走る選手へ沸く拍手
名人芸客をうっとりさす拍手
川柳はびきの 塩満 すり減った指紋に父の労働歌
百年の本四を結ぶ夢実る

ヤス子 林蔵 武衛 義良 吉野 竹乃 千里 カツ子 昭江 節江 寿 八重子 保子 ゆき子 昌子 雪路 幸子 克子 よし美 緑水 梅園 三津江 なつえ ふみ女 巡歩 峰雪 明朗 敏報 比沙胡 淑子

愛憎に苦しむ女の細い指

ひきがえる雨にうたれてふやけそう

わりかんのメモあと味をかみしめる

どん底の苦勞を笑う日がめぐり

カタカタと風の会話の四畳半

太閤の墓標のようにツイインヒル

主婦の座を嫁にゆずって丸く住み

追伸に書いて催促さりげなく

ブドウ園河内の色へ夕日照る

ツカガール足がせまつて来る舞台

父の日に父も照れてるプレゼント

舌ばかり精進をして太りすぎ

精密の検査恐れる中年期

梅雨空へコケシの顔も物想い

夏を着て鏡に見せる衣替え

言いだせば炎がたぎる僕の胸

順番は言うまい母の子守歌

野球すきテレビに合せ用事する

あじさいは雨雨雨の淋しい色

父の日は意気揚揚とゴルフ場

おっぱいの温みを知らぬ哺乳瓶

鈍行の旅から妻のプログラム

消費税気軽に入れた票のつけ

打ち水へ低いあいさつツバメ舞い

蟻ん子の列を乱してみたくなる

高齢化追加が続く喜寿傘寿

口にこそ出さぬが妻よ有難う

どの顔も社長に見える同窓会

病みつきの心が分るのも夫婦

トロッコの風がとれない父の耳

順番が来ない天下のまわりもの

与呂志

伴子

隆

吐来

葉子

一屯

シメ子

泰子

白水

利武

昇

一枝

健三

ケイ子

たけし

忠宏

優

キミ子

悦子

トミ子

敦子

末一

かつみ

繁男

絢子

蛙声

志洋

隅谷義一

胡村

阿衣

美津子

主婦代行たった三日で疲れ果て

スランブへ深夜の素振りまだ続き

女ボス京塚昌子に似たタイブ

勉強のきらいなガキがボスとなり

石橋義一

順番にみんな出て行く過疎の村

一方通行・進入禁止の恋もあり

川柳泉尾

吉川

寿美報

トミ子

弘子

昭子

シメ子

三千代

文子

美子

途子

三世

敏

良子

きよ子

晴子

あやの

淑子

美南子

道子

和子

義一

敦子

シマ子

希代司

淳一

眉水

順子

敏

トミ子

弘子

昭子

シメ子

三千代

文子

美子

途子

三世

敏

良子

きよ子

晴子

あやの

淑子

美南子

道子

和子

義一

敦子

シマ子

美代子

はつ子

不感症この世にスリルありすぎて

鉄骨の上で鳶職日々スリル

梵鐘の余韻にもらう無の時間

八尾公民館川柳教室 高杉

鬼遊報

登喜

能喜

泰成

孝子

英一

はる

隆江

公襄

龍襄

市子

トシエ

初子

百子

道子

春子

幸枝

恵以子

君江

弘直

シマ子

知佐子

信章

ふみ子

久美子

美津子

白水

寿美

登喜

能喜

泰成

孝子

英一

はる

隆江

公襄

龍襄

市子

トシエ

初子

百子

道子

春子

幸枝

恵以子

君江

弘直

シマ子

知佐子

信章

ふみ子

久美子

9 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 及 び 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	2 日(金) 午後 1 時より 頂点・投げる・自由吟	サンシビック尼崎 阪神電車尼崎下車南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号 田淵定人 句会費 300円 投句料 60円切手 3枚
堺川柳会	4 日(日) 午後 1 時より 息子・胸・無理・群	堺総合福祉会館 南海高野線堺東駅下車堺市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑
川 柳 塔 まつえ	10 日(土) 午後1時半より 名刺・壺・飲む	慈雲寺 松江市和多見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
八尾市民 川 柳 会	10 日(土) 夕 6 時より 祭り・割れる・育つ・株	八尾市立労働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市弓削町南 2-141 飯田悦郎
西宮北口	12 日(月) 午後 1 時より 選ぶ・余裕・自由吟	西宮市中央公民館 阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘 5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料 60円切手 4枚
川 柳 わかやま	15 日(木・祝日)午後1時より 意欲・音・流す	和歌山県民文化会館 4 F 中集会場 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料60円切手 3枚
南 大 阪 川 柳 会	(金井文秋喜寿祝賀句会) 15 日(祝) 午後 1 時より 詳細は78P	寺田町高松会館 JR環状線寺田町南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 1,000 投句料 180円(郵券可)
川 柳 ねやがわ	18 日(日) 正午より 口紅・流行・見舞・自由吟	寝屋川市立総合センター 4 階 寝屋川市駅下車京阪バス総合センター前下車 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 60円切手 3枚
もくせい 川 柳 会	19 日(月) 午後 1 時より 話題・渡る・月・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急宝塚線曾根下車東南歩 5 分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
富 柳 会	22 日(木) 午後 1 時より 地図・直感・仲裁	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴353 池 森子
高槻川柳 サークル 卯 の 花	22 日(木) 午後 1 時より 朝・ニュース・泥・自由吟	高槻市民会館301号室 阪急電車高槻下車歩 5 分 〒569 高槻市宮田町 3-8-8 川島颯云児 句会費 500円 投句料 200円(60円切手 3枚と20円切手 1枚) 各題 2句
南海電鉄 川 柳 部	22 日(木) 夕 6 時より 処分・チラシ・クレジット	南海会館ビル内南海電鉄本社地下食堂 南海・近鉄・地下鉄各難波駅下車高島屋東南角 〒545 大阪市南区難波5丁目1番60号 南海電気鉄道(株) (川柳部) 用地管理部管理課 廣井季雄 句会費 無料 投句料 60円切手 1枚
川 柳 東 大 阪	24 日(土) 夕 6 時より 野・ホテル・遠い・いのち	東大阪市社会教育センター2階 近鉄布施駅北へ5分長小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西 5-6-23 桑原喜風 句会費 500円 投句料 60円切手 3枚
駒つなぎ 川 柳 会	26 日(月) 夕 6 時より 大げさ・不精・競う・残酷	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南口下車 南へ1丁3筋目左へ駅より歩 3 分 〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1-3-11 津守柳伸

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円(郵券可)、各題 3句以内

原稿送り先(〆切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)

〒597 貝塚市地藏堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

本社9月句会

日時 九月五日(月) 午後六時
会場 メンズファッションセンター3階

東区内本町一丁目 電話06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角

兼題 「やさしい」
「おはなし」

野村太茂津
津守柳伸選
宮口笛生選
塩満敏選
黒川紫香選

席題 二題 当日発表 各題三句以内厳守
会費 五百円

★投句は柳箋(4cm×19cm)に一葉一句。
各業毎に裏面に必ず氏名明記。
投句料 300円(60円切手5枚)同封のこと。

川 柳 塔 社

10月の兼題 「走る」 「いい話」 「幸運眼鏡」

10月の本社句会は2日(日)

『夜市川柳』募集

第4回 「力」 両川洋々選

第5回 「輪」 3句・締切 9月末日
小島蘭幸選

締切 10月末日

投句先 〒593 堺市堀上緑町二一九一二

河内天笑方

堺川柳会

●募 集●

十一月号発表(9月15日締切)

川柳塔(10句)西尾 栞選
水煙抄(10句)黒川 紫香選
愛染帖(3句)橘 高薫風選
茴香の花(3句・女性)八木千代選
吟「シヤツ」 中村ゆきを選
「幻」 土橋はるお選
「酔」 藤解静風選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

十二月号発表(10月15日締切)

川柳塔(10句)西尾 栞選
水煙抄(10句)黒川 紫香選
愛染帖(3句)橘 高薫風選
茴香の花(3句・女性)八木千代選
吟「癖」 広井すえお選
「岸」 園山多賀子選
「目標」 谷 信夫選

★愛染帖・茴香の花・課題吟は同人・誌友
を限らす。

9月の常任理事会は1日(木)

定価 五百円(送料50円)

半年分三千二百円(送料共)

一年分六千三百円(送料共)

昭和六十三年八月二十五日発行

昭和六十三年九月一日発行

編集兼 発行人 西・尾 巖

印刷所 藤原童心社

〒545 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(06)六九一四番

振替口座大阪813336八番

編集後記

☆堺の夜市川柳のまとめの会は、恒例の七月三十一日百人に近い参会者で賑わった。大萬川柳の形を引き継いで丸六年、いよいよ評判に加速が備わって来た。
☆遠来の土居耕花氏を煩わし、地元の高橋千万子さんと「ユーモア対談」を持った。句評リレーが遅れたため、代りの読物となった。作句姿勢のみならず、淡淡とした話しぶりにお二人の手柄がにじみ出ている。佳句は、何も無いところからは生まれ無いと思ひ、また格別のもが無ければ生まれないとも思えなかった。

☆九月に行く中国の洛陽・西安への旅で、私は殊に、阿倍仲麻呂の足跡に興味を覚え、大阪府立図書館で、仲麻呂に関する文献を通読した。千三百年も前の人を著者はよくも調べ上げたものと感心する。
☆六月にも、熊本の人永田俊子さんの句集の序を書くの、老いらくの恋の

川田順氏の詳細を知りたく氏の随筆を同じ図書館で読んで読み進み、一日の予定が二日になってしまふ。
☆私は、旧制中学の低学年時代にもこの図書館へ通い、何の関係もない医学書や、裁判記録などを見た。通称ピス姓と呼ばれた殺人犯が警官に追われて、高槻が茨木辺りの、もう忘れてしまつたが、田圃道を逃げ回るくだりなど、推理小説以上の迫真力に興懐したものだ。学習だけに通う今の中学高校生は可哀そうだ。
☆同志社大学教授の田中光夫先生のお便りに「一家の中至るところ、勝手に築いた本」の山が出来ております。その山を見るたびに何故か平安が僕に訪れます。本の読み方にも、熟読、速読、乱読、遅読などと色色あり積ん読というのもあります。私にはその何れの「読」も実施してあります。とりわけ、積ん読には得も言われぬ妙味がございます。とあった。私は積ん読の嵩

が高じるにつれ、ストレスも高いのは、人間が未熟なせいであろう。(薫)
▼哲学者アラソンのことばに「人を信ずべき理由は百千とあり、人を信ずべからざる理由もまた百千とある。」言い換えれば、思いよう考えようともとれる。この伝てゆくと、リクルート株やその他もろもろの政治家の悪業も、百千の見方によつては悪でなきように思えてくる。人ごとのように振舞えるのは、善いことをしたと信じている証拠である。われら凡人と違つて政治家は哲学も理解しておられるらしい。
▼新聞を読み、テレビを観ながら、やがて税金が高くなる二級酒の晩酌の肴にはボヤクのが一番適している。白玉の酒は静かに飲むべかりけり。歌人でない私には、怒ることによつて膳の貧しさを補うほかはないのである。日々の新聞の声欄には怒りが充満している。しかし、おかしなもので、この欄を読んで欲しい

人には読んでもらえず、同じ怒りをもつ人がファンファンと納得して下さる。同病相あわれみ、泣き涙の涙で、泣き暮れている。
▼首相は、所信表明演説で「辻立して」云々と、国民に訴えられた。不勉強なので、どう理解してよいかわからない。何も書いたものを読まないで、自分の思いを端的に話して下さればよいのと思う。少々停滞してもその方が親しみがあるてよい。川柳も借りものではない自分の思いを自分のことばで作ろう。(き)
☆おかしな夢を見た。どうやら私は病院にいららした。診察室の前の廊下で順番を待っていた。中から医者の声がある。「すぐに済む簡単な手術だからね。こわいこと何んにもないよ。」患者は女で、なぜか舌を出しっぱなしにしている。舌の病気ののだろうか。しばらく考えて、コクンとうなづいた。悲しい顔をした。若い看護婦がツカツカとやってきて「おりこウき

んねさあ行きましょー」そう言つて私の手をとつた。行く手に手術室の赤いランブが点いている。
☆ドアを開けて入ると、和室の真ん中にふとんが敷いてある。誰か女が寝ている様子だ。顔色の悪い女がすがりついてきた。「姉ちゃん死んだんよ。血路いで死んだん。」そう言つて肩をふるわせ、最期こんな恰好やつたんと、と苦しげな様を真似してみせるのだ。隅のソファアに放心した男がうずくまっていた。どうやら私の家らしい。私は、もう一度ふとんを剝いで女の顔を見た。すると、それは私の顔に変わっていた。

☆「夢は人間の潜在的欲望の現れであると共に、ある力をもつたものだ」という説がある。夢の中の出来事が後日そのまま実際に起ることがあり得る。夢を見たら即座にメモをとっておくことを心掛けるべし。遠藤周作が何かの文章に書いていたのが、心に引っかけた。(史)

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
 昭和六十三年八月二十五日 印刷
 昭和六十五年九月一日発行（毎月）日発行
 創刊大正十三年 通巻七三六号

川柳塔

九月号

NEW FORMAL COLLECTION



泣いて笑って……
 夜を通り過ぎたら
 また陽がのぼっていた。
 男のロマンと
 フォーマルと。

OSK JEFF
 ORIGINAL DESIGN

株式会社 **大_エスケ_**

〒540 大阪市東区南新町1-13
 ☎ 06/941 8 0 1 5

5つの個性・5つの色味!!

アイスキャンデー

ミルク・アズキ・パイン・チョコ・宇治金時



販売取扱店本部

ななば高島屋百貨店
 堂北高島屋百貨店
 京都高島屋百貨店
 阪神百貨店
 松坂屋百貨店
 マチヨ百貨店
 京阪千里店

サシユキデパート
 サシユキデパート
 アパロ百貨店
 上本町近鉄百貨店
 妻木大阪近鉄百貨店
 奈良近鉄百貨店
 京都近鉄百貨店

ななば新川店
 道のまち店
 トーヨー力店
 南海難波駅店
 国鉄大塚駅店
 梅田、丸吉百貨店
 堺東店



大阪・ななば



TEL 641-0551

定価 五百円 (送料五十円)